2023年度
大学院国際文化研究科
講義概要（シラバス）

法政大学

科目一覧［発行日：2023/5/1］最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス（https://syllabus.hosei.ac.jp/）で確認してください。

凡例　その他属性

〈他〉：他学部公開科目
〈優〉：成績優秀者の他学部科目履修制度対象科目
〈Ｓ〉：サーティフィケートプログラム_SDGs
〈ダ〉：サーティフィケートプログラム_ダイバーシティ
〈グ〉：グローバル・オープン科目
〈実〉：実務経験のある教員による授業科目
〈ア〉：サーティフィケートプログラム_アーバンデザイン
〈未〉：サーティフィケートプログラム_未来教室

【X2001】国際文化研究Ａ［LETIZIA GUARINI、武市　一成］春学期授業/Spring …… 1
【X2002】国際文化研究Ｂ［大野　ロベルト、武市　一成］秋学期授業/Fall …… 3
【X2003】国際文化共同研究Ａ［熊田　泰章、張　晟喜］春学期授業/Spring …… 4
【X2004】国際文化共同研究Ｂ［和泉　順子、張　晟喜］秋学期授業/Fall …… 6
【X2005】多言語相関論ⅠＡ［粟飯原　文子］春学期授業/Spring …… 7
【X2006】多言語相関論ⅠＢ［粟飯原　文子］秋学期授業/Fall …… 8
【X2007】多言語相関論ⅡＡ［大野　ロベルト］春学期授業/Spring …… 9
【X2008】多言語相関論ⅡＢ［大野　ロベルト］秋学期授業/Fall …… 10
【X2009】多言語相関論ⅢＡ［輿石　哲哉］春学期授業/Spring …… 11
【X2010】多文化相関論ⅠＡ［LETIZIA GUARINI］春学期授業/Spring …… 12
【X2011】多文化相関論ⅠＢ［LETIZIA GUARINI］秋学期授業/Fall …… 13
【X2012】多文化相関論ⅡＡ［熊田　泰章］春学期授業/Spring …… 14
【X2013】多文化相関論ⅡＢ［熊田　泰章］秋学期授業/Fall …… 15
【X2014】多文化芸術論Ⅰ［佐藤　千登勢］春学期授業/Spring …… 16
【X2015】多文化芸術論Ⅱ［廣松　勲］秋学期授業/Fall …… 18
【X2016】異文化社会論ⅠＡ［今泉　裕美子］春学期授業/Spring …… 19
【X2017】異文化社会論ⅠＢ［今泉　裕美子］秋学期授業/Fall …… 21
【X2018】異文化社会論ⅡＡ［浅川　希洋志］春学期授業/Spring …… 23
【X2019】異文化社会論ⅡＢ［浅川　希洋志］秋学期授業/Fall …… 24
【X2020】ナショナリズム／エスニシティ論Ａ［石森　大知］春学期授業/Spring …… 25
【X2021】ナショナリズム／エスニシティ論Ｂ［石森　大知］秋学期授業/Fall …… 27
【X2022】マイノリティ社会論Ａ［曽　士才］春学期授業/Spring …… 29
【X2023】マイノリティ社会論Ｂ［曽　士才］秋学期授業/Fall …… 30
【X2024】多言語社会論Ａ［大中　一彌］春学期授業/Spring …… 31
【X2025】多言語社会論Ｂ［大中　一彌］秋学期授業/Fall …… 33
【X2026】多民族共生論ⅠＡ［松本　悟］春学期授業/Spring …… 35
【X2027】多民族共生論ⅠＢ［松本　悟］秋学期授業/Fall …… 36
【X2028】多民族共生論ⅡＡ［髙柳　俊男］春学期授業/Spring …… 37
【X2029】多民族共生論ⅡＢ［髙柳　俊男］秋学期授業/Fall …… 38
【X2030】国際ジャーナリズム論［神林　毅彦］秋学期授業/Fall …… 39
【X2031】国際文化交流論ⅡＡ［木村　真］秋学期授業/Fall …… 40
【X2032】比較宗教文明論［臼杵　陽］秋学期授業/Fall …… 41
【X2033】多文化情報空間論ⅠＡ［森村　修］春学期授業/Spring …… 43
【X2034】多文化情報空間論ⅠＢ［森村　修］秋学期授業/Fall …… 45
【X2035】多文化情報メディア論ⅠＡ［大嶋　良明］春学期授業/Spring …… 47
【X2036】多文化情報メディア論ⅠＢ［大嶋　良明］秋学期授業/Fall …… 48
【X2037】多文化情報メディア論Ⅱ［重定　如彦］秋学期授業/Fall …… 49
【X2038】外国語実践研究Ａ（英語）［MARK E FIELD］春学期授業/Spring …… 50
【X2039】外国語実践研究Ｂ（英語）［大野　ロベルト］秋学期授業/Fall …… 51
【X2040】外国語実践研究Ａ（ドイツ語）［熊田　泰章］春学期授業/Spring …… 52
【X2041】外国語実践研究Ｂ（中国語）［曽　士才］秋学期授業/Fall …… 53
【X2042】外国語実践研究Ａ（ロシア語）［佐藤　千登勢］春学期授業/Spring …… 54
【X2043】外国語実践研究Ｂ（ロシア語）［佐藤　千登勢］秋学期授業/Fall …… 55
【X2046】Oral Presentation ［MARK E FIELD］秋学期授業/Fall …… 56
【X2047】国際協力論［松本　悟］春学期授業/Spring …… 57

【X2048】国際人権論［藤岡　美恵子］春学期授業/Spring 58
【X2049】多文化情報ネットワーク論Ａ［和泉　順子］春学期授業/Spring 60
【X2050】多文化情報ネットワーク論Ｂ［和泉　順子］秋学期授業/Fall 61
【X2051】国際文化研究日本語論文演習Ａ［浅利　文子］春学期授業/Spring 62
【X2052】国際文化研究日本語論文演習Ｂ［浅利　文子］秋学期授業/Fall 64
【X2053】国際文化研究日本語論文演習Ｃ［浅利　文子］春学期授業/Spring 65
【X2070】修士論文演習Ａ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］春学期授業/Spring 66
【X2071】修士論文演習Ｂ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］秋学期授業/Fall 67
【X2072】修士論文演習Ａ［大嶋　良明］春学期授業/Spring 68
【X2073】修士論文演習Ｂ［大嶋　良明］秋学期授業/Fall 69
【X2074】修士論文演習Ａ［LETIZIA GUARINI］春学期授業/Spring 70
【X2075】修士論文演習Ｂ［LETIZIA GUARINI］秋学期授業/Fall 71
【X2076】修士論文演習Ａ［佐藤　千登勢］春学期授業/Spring 72
【X2077】修士論文演習Ｂ［佐藤　千登勢］秋学期授業/Fall 73
【X2101】博士論文演習ＩＡ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］春学期授業/Spring 74
【X2102】博士論文演習ＩＢ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］秋学期授業/Fall 75
【X2103】博士論文演習ⅡＡ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］春学期授業/Spring 76
【X2104】博士論文演習ⅡＢ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］秋学期授業/Fall 77
【X2105】博士論文演習ⅢＡ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］春学期授業/Spring 78
【X2106】博士論文演習ⅢＢ（代表シラバス）［浅川　希洋志、石森　大知］秋学期授業/Fall 79
【X2107】博士論文演習ⅡＡ［森村　修］春学期授業/Spring 80
【X2108】博士論文演習ⅡＢ［森村　修］秋学期授業/Fall 81
【X2109】博士論文演習ⅡＡ［佐藤　千登勢］春学期授業/Spring 82
【X2110】博士論文演習ⅡＢ［佐藤　千登勢］秋学期授業/Fall 83
【X2111】博士論文演習ⅢＡ［髙柳　俊男］春学期授業/Spring 84
【X2112】博士論文演習ⅢＢ［髙柳　俊男］秋学期授業/Fall 85
【X2121】博士ワークショップＩＡ［浅川　希洋志、大野　ロベルト］春学期授業/Spring 86
【X2122】博士ワークショップＩＢ［浅川　希洋志、大野　ロベルト］秋学期授業/Fall 87
【X2123】博士ワークショップⅡＡ［浅川　希洋志、大野　ロベルト］春学期授業/Spring 88
【X2124】博士ワークショップⅡＢ［浅川　希洋志、大野　ロベルト］秋学期授業/Fall 89
【X2125】博士ワークショップⅢＡ［浅川　希洋志、大野　ロベルト］春学期授業/Spring 90
【X2126】博士ワークショップⅢＢ［浅川　希洋志、大野　ロベルト］秋学期授業/Fall 91
【X2113】博士論文演習ＩＡ［佐藤　千登勢］春学期授業/Spring 92
【X2114】博士論文演習ＩＢ［佐藤　千登勢］秋学期授業/Fall 93

OTR500G1 － 001

国際文化研究 A

LETIZIA GUARINI、武市　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3 領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコツボ的専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」においては、必読文献を読み連ねる。加えて、本研究科において学位論文執筆に必要となる研究方法・手続きなどについても学ぶ。
この授業は 4 つの「テーマ」からなる。なお、扱われる 4 つの「テーマ」についてその順序が前後する場合には、初回授業などにおいてその旨を学生に通知する。

【到達目標】
(1) 国際文化研究の広がりと可能性を理解できること。
(2) 国際文化研究を行うための方法論を理解できること。
(3) 大学院で研究を遂行する上での手続き・心得を理解できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。
(1) 本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が 1 本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
(2) この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士 1 年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
(3) 基礎文献は、1 本 20 ～ 30 ページ程度で、雑誌論文または書籍 1 ～ 2 章分を目途とし、日本語文献 (適書が　ない場合、英語も可) とする。
(4) 授業 3 回を 1 セットとして、基礎文献を 1 本ずつ取り上げ討議する。当該文献を選定した教員はテディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。その際、学生からのコメントや質問等に対するフィードバックも行う。
(5) 大学院における研究遂行のために、注意するべき手続き・心得などについても教示する。
(6) 本授業は、対面で行う (変更がある場合は、学習支援システム等を通して事前に通知する)。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	自己紹介・関心紹介・文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
第 2 回	テーマ 1 ：リサーチデザイン (第一回)	・大学院における学習・研究について解説する。 ・受講学生たちのこれまでの研究状況を確認する。
第 3 回	テーマ 1 ：リサーチデザイン (第二回)	・引き続き、大学院における学習・研究について解説する。 ・研究計画作成の重要性について意識を高める。
第 4 回	図書館ガイダンス	・図書館員による図書館ガイダンスを利用しつつ、法政大学図書館を介した文献調査のイロハを学ぶ。
第 5 回	テーマ２：ジェンダー・セクシュアリティ研究（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
第 6 回	テーマ２：ジェンダー・セクシュアリティ研究（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
第 7 回	テーマ２：ジェンダー・セクシュアリティ研究（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
第 8 回	テーマ３：在日朝鮮人史研究（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
第 9 回	テーマ３：在日朝鮮人史研究（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
第 10 回	テーマ３：在日朝鮮人史研究（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
第 11 回	テーマ 4 ：文学研究（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
第 12 回	テーマ 4 ：文学研究（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
第 13 回	テーマ 4 ：文学研究（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
第 14 回	総括	これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を読みこむことは当然ながら、それ以上に自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
上記の方法によって選定された輪読文献を用いる。

【参考書】
各授業において必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】
成績評価は、下記の①+②+③の提出物などを総合的に判断して行う。
①リサーチデザイン（テーマ１）　②３つのテーマ（テーマ２・３・４）ごとに「ミニ課題」と「レジュメ」にて採点： 20 % × 4
③「期末レポート」： 20 %
以上の合計 100 %となる。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】
課題提出等は、主に学習支援システムを通して行う。

【その他の重要事項】
修士課程 1 年は必ず履修すること。

【担当教員の専門分野等】
レティツィア・グアリーニ
＜専門領域＞
日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論
＜研究テーマ＞
現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。
＜主要研究業績＞
Guarini, Letizia. "Voices against Gender-based Violence in Contemporary Japanese Literature: An Analysis of Two Novels by Kaoruko Himeno and Aoko Matsuda." Voiced and Voiceless in Asia, edited by Halina Zawiszová and Martin Lavi č　ka, Vydavatelství Univerzity Palackého, 2022, pp. 457-486

Guarini, Letizia. "Shōjo Sexuality in Post-War Japan: Parody and Subversion in Kurahashi Yumiko's Divine Maiden." Japanese Studies vol. 42, no. 3, 2021, pp. 339-353, DOI: 10.1080/10371397.2022.2134098
グアリーニ・レティツィア「娘は父の支配から逃れられるのか？ ―角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第 23 号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021 年、55-79 頁
武市一成
〈専門領域〉
アメリカ史、国際文化学
〈研究テーマ〉
植民地主義と関連した「自由」や「生存権」をめぐる差別や排外主義の問題を近年の研究テーマとしている。
〈主要研究業績〉
『松本亨と英語で考えるーラジオ英語会話と戦後民主主義』彩流社、2015 年

【Outline (in English)】
（Course outline）
This course introduces the foundations of the Graduate School of Intercultural Communication according to three domains of interdisciplinary research: multicultural interrelations, multiethnic coexistence, and multicultural informatics.
（Learning Objectives）
(1) To understand the potential of international cultural studies.
(2) To become familiar with methodologies for conducting international cultural studies.
(3) To understand the procedures and rules for conducting research in graduate school.
（Learning activities outside of classroom）
Students are expected to read the reference material and prepare for each class meeting (one to three hours for each session).
（Grading Criteria /Policy）
Assignments for each session (submitting comment sheets and material to facilitate the discussion): 80 %
Final paper: 20%
Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR500G1 － 002

国際文化研究Ｂ

大野　ロベルト、武市　一成

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本研究科の特徴のひとつである「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」3 領域の学際性について、その醸成を促進し、狭いタコツボ的専門性からの脱却を図ると同時に各領域の特徴を明確にするために、必修科目である「国際文化研究 A」「国際文化研究 B」においては、必読文献を読み連ねる。春学期の「国際文化研究 A」で修得した文献購読の力をさらに伸ばし、研究の方法論についての理解を深める。なお、今年度は本研究科で学位論文執筆に必要となる研究方法についても学ぶ。

【到達目標】
（1）国際文化研究の広がりと可能性を入門のレベルで理解できること
（2）国際文化研究を行うための方法論を理解できること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
対面授業として実施する。必読文献を以下によって選定し、読み重ねる。
（1）本研究科修士課程生全員が習得すべき基礎的文献を、全専任教員が 1 本ずつ選定し、選者による簡単な解説・選定理由等を加えて、「国際文化研究科リーディングリスト基礎編」を用意する。
（2）この基礎文献は各教員の専門分野の専門書である必要はなく、本研究科で各院生が学際性・専門性を育てる際に必須となる骨格形成に主眼を置く。また、さまざまな入試経路の本研究科修士 1 年生のレベルを基準まで引き上げることも重要な点である。
（3）基礎文献は 1 本 20～30 ページ程度で、雑誌論文または書籍 1～2 章分を目途とし、日本語文献（適書がない場合、英語も可）とする。
（4）授業 3 回を 1 セットとして、基礎文献を 1 本ずつ取り上げ討議する。
当該文献を選定した教員はディスカッサントとして参加し、教員、学生の双方向による討議の活性化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	文献リストを配布し、このセメスターで読む文献を確定する。
2	テーマ１（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
3	テーマ１（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
4	テーマ１（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
5	テーマ２（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
6	テーマ２（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
7	テーマ２（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
8	テーマ３（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
9	テーマ３（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
10	テーマ３（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
11	テーマ４（第一回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第一回は文献の理解を中心に置く。
12	テーマ４（第二回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第二回は方法論の習得を含める。
13	テーマ４（第三回）	上記の方法により、文献を読み、討論を行なう。第三回は課題をもとにした議論を中心に置く。
14	補足授業	これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を読み、自分なりに議論を整理し、問題点・疑問点を準備して授業に臨むこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
上記の方法によって選定する必読文献を用いる。

【参考書】
必要に応じて、指示する。

【成績評価の方法と基準】
4 つのテーマごとの課題提出（60%）と授業中の討論への貢献（40%）によって評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【その他の重要事項】
修士課程 1 年は必ず履修すること。

【担当教員の専門分野等 1】
大野ロベルト
< 専門領域>
日本文学
< 研究テーマ> 古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、 文学と権力の関係性をめぐる研究
< 主要研究業績>
『Butoh 入門』(共編) 文学通信、2021
『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019
『日記文化から近代日本を問う』(共著) 笠間書院、2017

【担当教員の専門分野等 2】
武市一成
〈専門領域〉
アメリカ史、国際文化学
〈研究テーマ〉
植民地主義と関連した「自由」や「生存権」をめぐる差別や排外主義の問題を近年の研究テーマとしている
〈主要研究業績〉
『松本亨と英語で考えるーラジオ英語会話と戦後民主主義』彩流社、2015

【Outline (in English)】
This course is the continuation of the spring semester, and is required for all the 1st year graduate students. It provides students with a general scope in three prominent research areas of this graduate school, and attempts to cultivate desirable views to encompass in such a broad cross-disciplinary environment.
The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 40 % participation, 60% assignments. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 003

国際文化共同研究 A

熊田　泰章、張　晟喜

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本研究科では，「多文化相関」，「多文化共生」，「多文化情報空間」の三領域が今日的な研究課題のスコープの中で深く連関することを学んでいきますが，本科目は，テーマ設定・リサーチ等を共有しながら，それが自らの研究で達成できているか確認していくことを目的とします．
　受講者は，自らの研究発表を蓄積し，それを共有・公開することにより，問題意識や研究成果を外に発信して共有していく研究スタイルを身につけていきます．
　その上で，上記の研究スタイルを身につけることを通じて，各自の研究の中に，本研究科の特色である「学際的志向の強みを編み込んでいく」ことを目指します．

【到達目標】
上記のテーマを念頭におきながら，受講者各自が修士論文を完成させることが第一の到達目標です．
　その中で，特に，既存の学問の枠組みから飛び出して学際的なアプローチをしていくこと，「今，ここ，自分」といった切実な問題として，研究対象を捉えていくことを目指します．
　また，「部屋にこもって，一人でしっとりと学級を極める」タイプの研究から踏み出し，自ら外に発信しつつ，他者の研究テーマについても一緒に考えていく中で，発信すること，研究を一緒にやっていくことの意義を実感していくことも，到達目標として掲げます．「共同研究」と敢えて謳っているのは，そういった意味があるのです．
　さらに，プレゼンテーション（プレゼン，発表）には delivery（表出の仕方）のテクニックがありますし，論文には引用，注の付け方などの規則がありますが，そういうことについても再度確認しながら身につけていくことも，目標の一つです．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行います．基本的に教室での対面授業としますが，必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置します．本授業の基本的な授業計画はシラバスに沿って進めますが，変更がある場合には，「学習支援システム」で提示いたします．本授業の開始日までに具体的な授業方法などを同システムで提示します．
　発表者（プリゼンター）は自分のプレゼンに関するレジュメ等を作成し，プレゼンを行い，出席者皆で討論していきます．プリゼンター以外の受講生は，疑問点・意見等を準備した上で，討論に参加します．
　修士論文構想発表会を大きな節目と捉え，それに向けて進捗状況や，研究上の悩み・問題点などを受講者・教員間で共有していきます．
　上記の節目を意識しながら，受講者の「書く行為による成果物」（例えば，報告書・論文など）についても，その内容，論の提示の仕方，形式などについて，随時指導していきます．
　受講者の質問等には，授業時，あるいは授業後に「学習支援システム」あるいは個人メール等を用いてフィードバックを行います．そのようなかたちで，毎回の授業の成果の共有・蓄積を図ります．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	• 授業の進め方について周知する． • 発表のスケジュールを立てる． • 受講者の研究の進捗状況について報告してもらう．
第 2 回	論文の書き方について	• 論文を書くことの意味と書き方について確認する．
第 3 回	発表とその指導　1	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 4 回	発表とその指導　2	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 5 回	発表とその指導　3	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 6 回	発表とその指導　4	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 7 回	発表とその指導　5	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 8 回	前半総括・その他	• 前半の発表の総括．いい点は何か見つめつつ，悩み・問題点等の共有と，その解決を図る．
第 9 回	発表とその指導　6	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 10 回	発表とその指導　7	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 11 回	発表とその指導　8	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 12 回	発表とその指導　9	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 13 回	発表とその指導　10	学生 2 名による発表 • 質疑応答． • 発表の delivery，論文の書き方などについての指導（随時行う）．
第 14 回	総括	• 授業の総括．いい点は何か見つめつつ，悩み・問題点等の共有と，それらの解決を図る．これ以降どう進めたらいいか考える．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
• 発表者は，各自レジュメ，プレゼン・スライド等を作成し，自らの発表を用意する．
• 発表回のみならず，常に修士論文の執筆を念頭に置き，意味をかみしめながら，「書くという行為」を積極的に行う．
• 発表者以外の受講者は，発表者の内容を可能な限り授業で検討できるよう，発表の内容に関する事柄を調べておく．さらに，発表者に対する質問・コメント等を用意しておく．
• 修士論文のよりよい完成を目指すために，本授業を積極的に活用する．
• 授業後に，指摘された点を見直したり，関連文献等を積極的に読んだりすることで，自分の視点を広げていく．
• 本授業の準備・復習時間は，各 4 時間を標準とします．

【テキスト（教科書）】
随時指定しますが，取りあえずは，以下のものを用意してください．
• 斉藤孝・西岡達裕 (2005).『学術論文の技法』[新訂版]．東京：日本エディタースクール出版部．（論文の基本的な形式等については，この本を中心に解説します．）
• 刈谷武彦 (2002).『知的複眼思考法　誰でも持っている想像力のスイッチ』．東京：講談社．（通読することで，読む・書くという行為の意味を再確認させてくれます．）

【参考書】
授業において適宜指示します．

【成績評価の方法と基準】
発表 70 %
討論への参加度・貢献度 30 %
　上記はあくまで目安であり，担当者の協議により，必ずしも数値化に寄らない側面も考慮することがありますが，ご理解ください．
　この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
発言しやすい場を作ることに留意します．

【学生が準備すべき機器他】
辞書・パソコンなど．

【その他の重要事項】
1）受講者数により，発表の回数が増減することがあります．
2）修士課程 2 年目の春学期の科目であることを，特に意識して運営していきます．従って，修士論文の基本方針等を固めていくことを念頭に置き進めていきます．
3）発信していくことは，それだけでも意味があることです．それを意識し，同時に自分と異なった意見を受け入れていく姿勢を身につけます．
4）問題と同次元で「ベタに」（あるいは「ガチに」といってもいいかも）問題に取り組むだけでなく，より高い次元で，自分の研究の意味に括弧を付けてその意味を問いかけていく，「メタな」取り組みを取り入れる必要があります．是非，ある時点で立ち止まって考えてみてください．
5）「論文を書く」というのは，自分の研究してきたことに自分自身で「区切りをつける」仕事でもあります．そのことを意識し，必要な文献等をしっかり読み込み，執筆に向けての準備をしてください．

【担当教員の専門分野等】
熊田
＜専門領域＞文化記号論，テクスト論
＜研究テーマ＞間文化性研究

＜主要研究業績＞「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互受容－個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 16 号，2015 年
張　晟喜
＜専門領域＞児童文学、日韓童謡史。
＜研究テーマ＞まど・みちおとユン・ソクチュン童謡比較
＜主要研究業績＞『まど・みちお 詩と童謡の表現世界』風間書房、2017 年

【カリキュラム上の位置づけ】
修士論文を完成される年度の前半に配当され，「国際文化研究 A, B」の延長線上で，かつ秋学期の「国際文化共同研究 B」の直前の科目です．この科目は修士 1 年目での研究の上に，いよいよ修士論文執筆を視野に入れる点で，極めて重要な意味を持ちます．

【Outline (in English)】
【Course outline】
With respect to our Graduate School, it is of fundamental importance to study how the three fields —'Intercultural Correlation Studies', 'Multiculturalism Studies', and 'Multicultural Information Space Studies' — are intertwined with each other in the scope of today's research enquiries. The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.
By the end of course, you should be able to acquire a research style, wherein you disseminate your own problem awareness and research results by accumulating, sharing and publicising your own research results.
Besides that, through this acquisition process, you are expected to go up to the stage where you can make this 'strong point of our graduate school interwoven' with your own research.
【Learning Objectives】
The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to presentation(70%) and contribution in each class meeting(30%).

OTR600G1 － 004

国際文化共同研究Ｂ

和泉　順子、張　晟喜

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本科目は、修士論文あるいはリサーチペーパーの完成に向けて、受講する2年次の院生と教員で切磋琢磨する授業で、1年次の「国際文化研究A」「国際文化研究B」、2年次春学期の「国際文化共同研究A」の延長線上にある。
「共同研究」というと、通常は共通テーマのもと、複数人が分担しながらともに研究することを意味するが、この場合の「共同」には、修士論文作成という共通の課題に向けて、それぞれ知恵を出し合い、協力し合う意味が込められている。
研究科の3領域、すなわち「異文化相関関係」「多文化共生」「多文化情報空間」に目配りしつつ、自分の研究の位置づけや方法論などを他者のそれと比較し、再検証することを通して、より完成度の高い論文を目指す。
とりわけ、本研究科の特色である学際的思考を組み込んでいく。

【到達目標】
上記の「授業の概要と目的」を念頭に置き、受講者各自がそれに見合った修士論文を完成させることを、本科目の最大の到達目標とする。
一定の構成・分量と主張をもつ論文の執筆は、誰にとってもたやすいことではない。一人で悩んだり、壁にぶつかって立ち往生することなく、同様の課題に直面している他の受講生からアドバイスをもらい、この道の先輩である教員の体験を聴くことで、困難な作業を順調に進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文の進捗状況に関する受講者の発表を中心に進めていく。発表者はレジュメもしくはパワーポイントを作成して発表を行い、他の出席者からの疑問・意見・助言等をまじえ、全員で討論していく。
修士論文中間発表会、修士論文の提出を二つの大きな節目と捉え、それに向けての進捗状況や研究上の悩み・問題点を受講者・教員間で共有していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
2	修士論文中間発表 (1)	発表者1、2、3による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
3	修士論文中間発表 (2)	発表者4、5、6による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
4	修士論文中間発表 (3)	発表者7、8、9による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
5	修士論文中間発表 (4)	発表者10、11、12による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
6	修士論文中間発表 (5)	発表者13による1回目の発表および発表者1による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
7	修士論文中間発表 (6)	発表者2、3による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
8	修士論文中間発表 (7)	発表者4、5による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
9	修士論文中間発表 (8)	発表者6、7による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
10	修士論文中間発表 (9)	発表者8、9による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
11	修士論文中間発表 (10)	発表者10、11による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
12	修士論文中間発表 (11)	発表者12、13による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
13	論文提出前ディスカッション	修士論文提出を間近に控え、各自が直面している問題や課題について議論し、その解決策等を検討する。
14	まとめ	提出した修士論文を振り返り、反省会を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
(1) 自分の発表時に出された質問・批判・助言などを参考にし、常に自分の論文の質を高めるよう努めること。
(2) 他者の発表時に得られたヒントや着想を、常に自らの論文に活かし、質の向上をはかること。
(3) 自分の研究テーマを常に頭の片隅におき、アイデアを遊ばせながら日常生活を送ること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
特になし。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
自分の発表時の内容40%、他者の発表時の貢献度30%、平常点30%を目安に、総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
受講生が論文執筆について疑問や不安に感じていることを、できるだけ授業内で共有し、適切なアドバイスを得られるようにする。

【学生が準備すべき機器他】
パワーポイントなどを使って報告する場合は、パソコンを持参し、対面授業の場合は教室でプロジェクターの準備をしておくこと。

【その他の重要事項】
・受講生の人数によって、授業計画が変更される場合もある。

【Outline (in English)】
The seminar is designed to enhance participants' knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.
At the end of the course, participants are expected to improve their interdisciplinary thinking and to write up the Master's thesis/the Research paper.
【Learning Objectives】
This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper by providing feedback and support from other students, seniors and instructors. Students may update on their progress and discuss tasks they accomplish for the thesis. Based on 【Outline】of the seminar, students are expected to prepare for interim presentation and to complete the thesis.
【Learning activities outside of classroom】
(1) Students should develop the Master's thesis/the Research paper based on questions, comments and advice given in the class.
(2) Students should develop the Master's thesis/the Research paper by discussing and reviewing other students' work.
(3)Students are expected to refine their research subject.
The standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Presentation（40 %）, Contribution(30%), Participation (30%)
Students are required to take more than 60% score in total to pass.

LIN500G1 － 101

多言語相関論ＩＡ

粟飯原　文子

サブタイトル：**旧植民地地域の文学・文化**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主にアジア・アフリカ・ラテンアメリカの（出身の作家による）さまざまな文学作品を精読・分析することで、文学作品が時代、社会、世界の状況にどのように応えているのかを考え、地域と言語を横断した世界文学への視座を身につける。また適宜テクストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】
さまざまな言語で書かれた短篇・中篇小説（主に日本語訳）を精読し、歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養うと同時に、各作品の主題、手法、表現などに注目しながら、文学テクストの分析・批評の方法を身につける。英語で書かれた作品はなるべく原書で読み、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジュメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。
「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて、適宜変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方について説明。以下、各回にとりあげる作家の名を記す。
第 2 回	金石範①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 3 回	金石範②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 4 回	李良枝①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 5 回	李良枝②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 6 回	目取真俊①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 7 回	目取真俊②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 8 回	モハッシェタ・デビ①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 9 回	モハッシェタ・デビ②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 10 回	アヴニ・ドーシ①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 11 回	アヴニ・ドーシ②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 12 回	ナナ・クワメ・アジェイ=ブレヤニー①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 13 回	ナナ・クワメ・アジェイ=ブレヤニー②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 14 回	春学期のまとめ	春学期で学んだことのまとめをおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業時に指示する。

【参考書】
授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表（60 %）、授業への貢献（40 %）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】
さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】
アフリカ文学、アフリカ地域研究
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html

【Outline (in English)】
[Course outline] This course aims at an in-depth comparative study of texts and authors from the regions including Asia, Africa, Middle East, Latin America and the Caribbean. [Learning objectives] Students will be expected to develop skills of critical reading of literary texts with attention to their historical and social contexts. [Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the assigned materials. The required study time is at least four hours for each class session. [Grading policy] Final grade will be decided based on the following: presentation 60% and in-class contribution 40%.

LIN500G1 － 102

多言語相関論ＩＢ

粟飯原　文子

サブタイトル：**旧植民地地域の文学・文化**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
主にアジア・アフリカ・ラテンアメリカの（出身の作家による）さまざまな文学作品を精読・分析することで、文学作品が時代、社会、世界の状況にどのように応えているのかを考え、地域と言語を横断した世界文学への視座を身につける。また適宜テクストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】
さまざまな言語で書かれた短篇・中篇小説（主に日本語訳）を精読し、歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養うと同時に、各作品の主題、手法、表現などに注目しながら、文学テクストの分析・批評の方法を身につける。英語で書かれた作品はなるべく原書で読み、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジュメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。
「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて、適宜変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方について説明。以下、各回にとりあげる作家の名を記す。
第 2 回	ガッサン・カナファーニー①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 3 回	ガッサン・カナファーニー②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 4 回	ガブリエル・ガルシア＝マルケス①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 5 回	ガブリエル・ガルシア＝マルケス②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 6 回	エドウィージ・ダンティカ①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 7 回	エドウィージ・ダンティカ②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 8 回	チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 9 回	チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 10 回	グギ・ワ・ジオンゴ①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 11 回	グギ・ワ・ジオンゴ②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 12 回	チヌア・アチェベ①	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 13 回	チヌア・アチェベ②	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第 14 回	秋学期のまとめ	秋学期で学んだことのまとめをおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
授業時に指示する。

【参考書】
授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】
発表（60 %）、授業への貢献（40 %）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】
さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】
アフリカ文学、アフリカ地域研究
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html

【Outline (in English)】
[Course outline] This course aims at an in-depth comparative study of texts and authors from the regions including Asia, Africa, Middle East, Latin America and the Caribbean. [Learning objectives] Students will be expected to develop skills of critical reading of literary texts with attention to their historical and social contexts. [Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the assigned materials. The required study time is at least four hours for each class session. [Grading policy] Final grade will be decided based on the following: presentation 60% and in-class contribution 40%.

LIN500G1 － 103

多言語相関論ⅡA

大野　ロベルト

サブタイトル：**パロディと文化**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
パロディという概念を軸に、主に 20 世紀の文学理論を逍遥したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】
文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテクストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
対面授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	ソシュールをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	レヴィ＝ストロースをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バルトをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	ジュネットをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	デリダをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	小説とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	映画とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	舞台とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	音楽とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	サブカルチャーとパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回のテーマとなるテクストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】
発表と議論への貢献 50 %、レポート 50 %
成績評価は 100 点満点とし、60 点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本文学
＜研究テーマ＞
古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究
＜主要研究業績＞
『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021
『紀貫之　文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019
『日記文化から近代日本を問う』（共著）笠間書院、2017

【Outline (in English)】
This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.
While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.
The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 50% presentation and participation in discussions, 50% final paper. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIN500G1 － 104

多言語相関論ⅡB

大野　ロベルト

サブタイトル：**パロディと文化**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
パロディという概念を軸に、主に 20 世紀の文学理論を逍遥したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】
文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテクストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
対面授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	エーコをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	バフチンをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バンヴェニストをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	サイードをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	フーコーをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	政治とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	教育とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	経済とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	司法とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	科学とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
各回のテーマとなるテクストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】
リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】
発表と議論への貢献 50 %、レポート 50 %
成績評価は 100 点満点とし、60 点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
日本文学
＜研究テーマ＞
古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究
＜主要研究業績＞
『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021
『紀貫之　文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019
『日記文化から近代日本を問う』（共著）笠間書院、2017

【Outline (in English)】
This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.
While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.
The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.
The grading criteria is as follows: 50% presentation and participation in discussions, 50% final paper. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIN500G1 － 105

多言語相関論Ⅲ A

輿石　哲哉

サブタイトル：**言語の研究方法を学ぶ**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが，本授業のテーマです．国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが，言語の研究法についてはテクニカルなところがあり，なかなか理解が難しいのが現実です．本授業では，それを克服すべく，基本的な文献を読みながら言語研究の基本である音声研究を学んでいきます．

【到達目標】
１）言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること．
２）その概念，方法論を様々な言語に適用させ，より広い一般化の道筋を模索していくこと．
３）外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
基本的にオンラインでの開講となります．各回の授業計画は変更はありませんが，もし変更がある場合には，「学習支援システム」で提示します．本授業の開始日までに具体的なオンライン授業の方法などを，同システムを用いて提示します．
授業は演習形式で行います．授業では学生にどんどん意味を問いかけていき，教材を日本語にしていってもらいます．この際，重要なのは，
１）全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと，
２）分からない場合，積極的に質問したり，意見を出し合うこと，
の 2 点です．
課題や授業内容については，「学習支援システム」を用いて，基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので，それをさらなる研究等に活かしてください．
最終授業だけでなく，中途でも，折を見て，フィードバックの時間を設けますので，内容についての質問等には随時対処していきます．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	Introduction	本科目の概略，学習の仕方等についての説明．その上で，教材を読み始める．
2	Organs of Speech	発話に用いられるところの器官について学ぶ．
3	Speech Sounds, Classification of Vowels	言語音，母音の分類について学ぶ．
4	Classification of Vowels	母音の分類について学び，様々な言語の母音を概観する．
5	Further Classification of Vowels	母音の分類についてさらに見る．
6	Classification of Consonants	子音の分類について学ぶ．
7	Classification of Consonants	子音の発音について，様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ．
8	Classification of Consonants	子音の発音について，様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ．
9	Classification of Consonants, Further Analysis of Consonants	子音の発音について見た後，副次的調音について学ぶ．
10	Combination of Sounds	音の連続について学ぶ．
11	Syllables	言語の音声記述で重要な概念である音節という概念について学ぶ．
12	Quantity, Accent	音長，アクセントについてその概略を学ぶ．
13	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について，学ぶ．
14	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について，引き続き学ぶ．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回，必ず内容について質問しますので，必ず読んできてください．さらに関与する概念で新しいものについては，先にご自身で調べておくと，非常に理解が深まります．
まず，文献を読むべく，英語に習熟することが非常に重要です．常に英語力の向上に努めてください．発表に関しては，発表の担当者は，担当箇所をきちんと読んだ上で，発表の準備を怠りなくすること．他の受講者も，ひと通りその箇所を読み，自分なりの意見を持つようにすること，の 2 点が大切です．
大学設置基準に鑑みた場合，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，あくまで標準としてご理解ください．

【テキスト（教科書）】
Takebayashi, Shigeru (1976). *A Primer of Phonetics*. Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle.[入手困難なため，授業支援システム等により配布します．]

【参考書】
以下に，辞書と年鑑・地図を挙げておきます．
・高橋作太郎ら（編集）.『リーダーズ英和辞典』. 第三版．東京：研究社.
学習者用辞書ではなく，一般用の辞書で，英語を読むのには必須です．
・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*. New York: The World Almanac Books.
・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.) London: Philip's.
以上の 2 冊は，英語の文献を読むときとても役に立ちます．

【成績評価の方法と基準】
授業での発表（50 %），討論への参加（50 %）．欠席は基本的に認めません．
この評価法をもとに，本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
アンケート非実施につき，特にありません．

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので，パソコンなどの情報端末を用意することが望ましいです．

【その他の重要事項】
言語研究の基礎として，音声に関する研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です．今回のテキストは，とても基礎的なテキストですので，初歩から言語学・音声学の考え方が分かるような構成になっています．授業では，教材の内容を理解するだけではなく，その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように，一緒に議論しながら解説を加えていきます．言語の研究の基礎固めをしたい方，構造主義を基本から理解したい方には，特にオススメの内容になっています．言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します．なお，進め方などについては，履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります．
●授業形態については，「オンライン」となっていますが，可能であれば周知の上，「対面」も採り入れていきたいと思います．したがって，その点を考慮の上，履修をお願いします．

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞言語学，英語学（形態論，統語論，音声学），英語史，英語辞書学．
＜研究テーマ＞英語の語を中心とする領域．各部門のインターフェース．
＜主要研究業績＞ Koshiishi, Tetsuya (2011). *Collateral Adjectives and Related Issues*. Bern: Peter Lang.

【カリキュラム上の位置づけ】
言語・文化に関して，比較・対照するということを軸に学んでいく 2 単位の科目です．（今年度は言語の研究法の基本をを学んでいきます．）

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key for understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading a textbook on phonetics, which constitutes the foundation of linguistic studies.
【到達目標（Learning Objectives）】
Three-fold:
1. to familiarise yourself with basic concepts and methodology of language studies,
2. to pursue generalisations through applying them,
3. to get accustomed to reading literature in foreign language(s).
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You should read in advance and be ready for being asked various questions, or being asked for giving comments. According to the MEX regulation, the course of this type expects you to spend 4 hours for preparation and reviewing.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria /Policy）】
- Basically, no absence allowed. Active participation in class sessions 50%, presentations 50%.
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

CUA500G1 － 107

多文化相関論ＩＡ

LETIZIA GUARINI

サブタイトル：**ジェンダー理論から現代文化を読み解く**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、三浦玲一、早坂静（編）『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』（彩流社、2013 年）を読んで、ジェンダー理論やクィア理論の視点から文化を考察する力を養う。また具体的な文学作品や映像作品を取り上げ、クィアの視座から文化事象を分析する方法を身につける。

【到達目標】
１） ジェンダー理論やクィア理論についての基礎的な知識を身につける。
２） クィアの視座から文学・映像作品を読みとくことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
三浦玲一、早坂静（編）『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』（彩流社、2013 年）を読む。毎回、1 名の発表者が、担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は 20 分程度）。
また、文学作品や映像作品を取り上げ、グループでディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。
第 2 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第１章	第１章「フロイトのセクシュアリティ理論とジェンダー問題」についてディスカッションを行う。
第 3 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第２章	第２章「性的差異の二律背反―カント、フロイト、ラカン派精神分析」についてディスカッションを行う。
第 4 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第３章	第３章「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性―『プリキュア』、『タイタニック』、ＡＫＢ 48」についてディスカッションを行う。
第 5 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第４章	第４章「核家族の男たち―冷戦期アメリカにおけるリベラリズムと組織からの逃走」についての発表。
第 6 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第５章	第５章「彼女はなぜ去っていったのか―コスモポリタニズムと移民女性」についての発表。
第 7 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第６章	第６章「デモクラシー、メリトクラシー、女性の暮らし― 20 世紀イギリスのリベラリズムとジェンダー」についての発表。
第 8 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第７章	第７章「主体化、ジェンダー化―家父長制資本主義体制下のイングランドとアイルランド」についての発表。
第 9 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第１０章	第１０章「男性性とセクシュアリティの教育―ヘンリー・ジェイムズ「巨匠の教え」」についての発表。
第 10 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第１１章	第１１章「エイズ・アートとセクシュアル・マイノリティの政治―『フィラデルフィア』、『レント』、『ザ・ノーマル・ハート』」についての発表。
第 11 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第１３章	第１３章「Ｑの欲望―現代の映画とクィア批評」についての発表。
第 12 回	『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』第１４章	第１４章「ちゃんと正しい方向にむかってる」―クィア・ポリティクスの現在」についての発表。
第 13 回	作品分析（１）	『作りたい女と食べたい女』についてディスカッションを行う。
第 14 回	作品分析（２）	『Queer Japan』についてディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
課題のテキストを必ず事前に読む。
発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】
三浦玲一、早坂静（編）『ジェンダーと「自由」―理論、リベラリズム、クィア』（彩流社、2013 年）価格￥ 3,080

【参考書】
菅野優香編『クィア・シネマ・スタディーズ』（晃洋書房、2021 年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子 (編)『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019 年）
黒岩裕市『ゲイの可視化を読む―現代文学に描かれる＜性の多様性？ ＞』（晃洋書房、2016 年）
新ヶ江章友『クィア・アクティビズム はじめて学ぶ〈クィア・スタディーズ〉のために』 （花伝社、2022 年）
森山至貴『LGBT を読みとく: クィア・スタディーズ入門』(ちくま新書、2017 年）

【成績評価の方法と基準】
研究発表とグループワーク 60 %、学期末レポート 40%で総合的に評価する。学期末レポートでは、クィアの視座から授業で取り上げられた文学・映像作品について書評を書く（1500 字程度）。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の状況によってオンライン授業に変更できるように準備する必要があることに気づいた。

【学生が準備すべき機器他】
発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論
＜研究テーマ＞現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。
＜主要研究業績＞
Guarini, Letizia. "Voices against Gender-based Violence in Contemporary Japanese Literature: An Analysis of Two Novels by Kaoruko Himeno and Aoko Matsuda." Voiced and Voiceless in Asia, edited by Halina Zawiszová and Martin Lavi č ka, Vydavatelství Univerzity Palackého, 2022, pp. 457-486.
Guarini, Letizia. "Shōjo Sexuality in Post-War Japan: Parody and Subversion in Kurahashi Yumiko's Divine Maiden." Japanese Studies vol. 42, no. 3, pp. 339-353, DOI: 10.1080/10371397.2022.2134098
グアリーニ・レティツィア「娘は父の支配から逃れられるのか？ ―角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第 23 号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021 年、55-79 頁.

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this class, we will discuss "Gender and Freedom: Theory, Liberalism, Queer" (eds. Reichi Miura and Shizuka Hayasaka, 2013). Students will learn about gender and queer theory applied to the analysis of culture and representation. They will also analyze specific literary and visual texts.
（Learning Objectives）
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) Acquire basic knowledge about gender and queer theory.
2) Read literary and cultural works from the perspective of gender and queer studies.
（Learning activities outside of classroom）
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.
（Grading Criteria /Policy）
The final grade will be decided based on the following:
Involvement during discussion and presentation: 60%
Final essay: 40%

CUA500G1 － 108

多文化相関論ＩＢ

LETIZIA GUARINI

サブタイトル：**メディアにおける〈みる/みられる〉の権力**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、『〈みる/みられる〉のメディア論　理論・技術・表象・社会から考える視覚関係』（高馬京子、松本健太郎編、2021 年）を読んで、現代社会における〈みる／みられる〉の関係性について考察しながら、文学作品、映像作品、SNS などにおける視線と権力を分析する力を養う。

【到達目標】
1. 文学作品、映像作品、SNS などにおける〈みる/みられる〉概念についての知見を得る。
2. 幅広くメディアにおける身体の表象を分析する能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
『〈みる/みられる〉のメディア論　理論・技術・表象・社会から考える視覚関係』（高馬京子、松本健太郎編、2021 年）を読む。毎回、発表者が担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は 20 分程度）。
また、様々なメディアを分析しながらグループでディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。
第 2 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』はじめに、第 1 章	はじめに「〈みる／みられる〉からみえるものを考える」、第 1 章「〈ネット-ワーク〉の感覚配合比率 ―視覚中心主義の終焉」についてディスカッションを行う。
第 3 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』第 2 章、第 3 章	第 2 章　「「見える」／「見えない」の社会理論―まなざしの前提としての社会的承認をめぐって」、第 3 章「みる／みられるのポリティクス ―視線・監視・ジェンダー」についての発表。
第 4 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』第 4 章、第 5 章	第 4 章「観光は「見る」ことである／ない―「観光のまなざし」をめぐって」、第 5 章「人工知能は「見る」ことができるのか―ＡＩにできる／できないことと、人間にしかできないこととは何か」についての発表。
第 5 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』第 6 章、第 7 章	第 6 章「データヴェイランス ―観察者不在の監視システム」、第 7 章「アイドルコンテンツ視聴をめぐるスコピック・レジーム ―マルチアングル機能とＶＲ機能が見せるもの」についての発表。
第 6 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』第 8 章、第 9 章	第 8 章「テレビのなかの身体 ―リモート元年のワイドショー世界の構造転換を読み解く」、第 9 章「デジタルファッションメディア空間における視線と言説 ―インスタグラム、ファッション、規範的女性像」についての発表。
第 7 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』第 10 章、第 11 章	第 10 章「視線の両義性―一七世紀オランダ風俗画にみる検尿の騙し絵」、第 11 章「視覚中心主義としての〈私小説〉 ―超越的な「私」の誕生」についての発表。
第 8 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』第 12 章、第 13 章	第 12 章「みる／みられる自由・権利・義務 ―それらに関わる法と現在」、第 13 章「メディアミックス的なネットワークに組み込まれる人びとの身体 ―サンリオピューロランドにおけるテーマ性／テーマパーク性の流動化」についての発表。
第 9 回	『〈みる/みられる〉のメディア論』第 14 章、第 15 章	第 14 章「観光の「みる／みられる」が再編するアート―マレーシア・ペナンにおけるストリートアートの増殖と観光の論理」、第 15 章「口コミを観る／観られる ―爆買いを解き明かす口コミ理論を考える」についての発表。
第 10 回	メディア分析（1）	『ヘルタースケルター』（漫画、映画）についてディスカッションを行う。
第 11 回	メディア分析（2）	『ファーストラブ』（小説、映画）についてディスカッションを行う。
第 12 回	個人研究発表（1）	修士論文についての個人研究発表をしてもらいます。
第 13 回	個人研究発表（2）	修士論文についての個人研究発表をしてもらいます。
第 14 回	まとめ	授業全体のまとめを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
課題のテキストを必ず事前に読む。
発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】
高馬京子、松本健太郎（編）『〈みる/みられる〉のメディア論　理論・技術・表象・社会から考える視覚関係』（ナカニシヤ出版、2021 年）価格￥ 2,860

【参考書】
　シーラ・ジェフリーズ『美とミソジニー:美容行為の政治学』慶應義塾大学出版会、2022 年
竹村和子『彼女は何を視ているのか―映像表象と欲望の深層』作品社、2012 年
『現代思想　特集＝ルッキズムを考える』2021 年 11 月号

【成績評価の方法と基準】
研究発表とグループワーク 60 %、学期末レポート 40%で総合的に評価する。学期末レポートでは、授業で取り上げられた作品について論じる (1500 字程度)。

【学生の意見等からの気づき】
受講生の状況によってオンライン授業に変更できるように準備する必要があることに気づきました。
個人研究を発表し、他の受講生からフィドバックを受けることが重要だと気づきました。

【学生が準備すべき機器他】
発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論
＜研究テーマ＞現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。
＜主要研究業績＞
Guarini, Letizia. "Voices against Gender-based Violence in Contemporary Japanese Literature: An Analysis of Two Novels by Kaoruko Himeno and Aoko Matsuda." Voiced and Voiceless in Asia, edited by Halina Zawiszová and Martin Lavi č ka, Vydavatelství Univerzity Palackého, 2022, pp. 457-486.
Guarini, Letizia. "Shōjo Sexuality in Post-War Japan: Parody and Subversion in Kurahashi Yumiko's Divine Maiden." Japanese Studies vol. 42, no. 3, pp. 339-353, DOI: 10.1080/10371397.2022.2134098
グアリーニ・レティツィア「娘は父の支配から逃れられるのか？ ―角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第 23 号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021 年、55-79 頁.

【Outline (in English)】
（Course outline）
In this course, we will discuss "Media Studies of Looking and Being-looked-at-ness" (edited by Kyoko Koma and Kentaro Matsumoto, 2021). This course is designed to enhance students' understanding of the role of the gaze in the construction of identities and power relations. Students will learn to analyze the dynamics of looking and being looked at in literary and cultural texts.
(Learning objectives)
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) Understand the concepts of "gaze" and "to-be-looked-at-ness."
2) Analyze representations of the body in a wide range of media.
（Learning activities outside of classroom）
Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.
（Grading Criteria /Policy）
The final grade will be decided based on the following:
Involvement during discussion and presentation: 60%
Final essay: 40%

CUA500G1 － 109

多文化相関論ⅡA

熊田　泰章

サブタイトル：**人の表象の間文化性**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では間文化性研究の基本的考え方を理論と実例によって学ぶ。そのために、間文化的に生成された文化活動であるヨーロッパ絵画を例として取り上げる。諸文化が相互に共通点を有していることと、その共通点がゆえに相違点が際立つこと、そして、それらの共通点と相違点を相互に認識し合いながら、諸文化が間文化的関係性の中で相互に影響を与えあうことを把握する。「(図) 像はいかにして意味を創造するか」という問いをめぐって、この授業を展開する。この問いは、ゴットフリート・ベーム『図像の哲学　いかにイメージは意味をつくるか』が発する問いである。図像は、それが何を表象するものであるかはともかく、古代文明において墳墓装飾や宮殿装飾に用いられ、あるいは、それ以前においても、洞窟の壁画として用いられ、しかして、古典古代のギリシャ・ローマにおいて人の日常の中で人の姿が目にされるものとなったことを経て、様々な時代の様々な文化での様々な用いられ方を積み重ねながら、今日のすべてが図像化されるにまで至っている。ベーム『図像の哲学』を基本のテクストとして、ベームの問いがいかに発せられたのかを探求し、その問いへの答を検討する。

【到達目標】
図像表象の歴史的変遷と多文化間の共有性について把握する。
図像表象行為の内在性と超越性について多文化横断的に把握する。
古典古代のギリシャ、そしてそれ以前の古代エジプトにまで遡って、図像表象の歴史をたどり、その継続と断絶を追って、特にルネサンス期フランドルの肖像画とそれ以降の風俗画に着目して整理を進め、今日の図像の氾濫がいかにして生じてきたかについて考察を行う。
使用する文献によって、個々の事例を具体的に知り、それらにおける図像表象の共通性を分析的に知る。
図像表象の研究を通して、間文化性について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行う。基本的に教室での対面授業とするが、必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置する。本授業の開始日の前に、「学習支援システム」による連絡事項を確認すること。
論文精読と教員の説明に基づき、学生が能動的に学ぶ大学院授業とする。
図像研究を通して間文化性を学ぶために、4 冊の研究書を順次精読し、かつ相互に参照する分析を行う。毎回、取り扱う個所を定め、事前に履修者が内容を確認し、学術用語、固有名詞などを調べ、報告する。その報告に基づき、授業の中で内容に対するまとめと批評を行う。
関連する適切な美術展を選び、作品に対する分析を行う。
毎回の授業では、履修者の報告に対する講評を行って、フィードバックとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	通時的・共時的な文化の共通性
第 2 回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	ベンヤミンの今日的意義
第 3 回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』	ベンヤミンの限界
第 4 回	ベーム『図像の哲学』	はじめに
第 5 回	古代エジプトの「肖像画」	死者の表象
第 6 回	古代エジプトの「肖像画」	生者の表象
第 7 回	古代ローマの「肖像画」	古代ローマの人間表象
第 8 回	アレキサンダー大王の表象	持続し、変化する意味
第 9 回	ポンペイのパン屋夫婦の表象	個人の表象
第 10 回	ファイユームという転換期	個人の表象
第 11 回	対話する表象	私たちを見つめるまなざし
第 12 回	人間の表象の個人化	人間の表象の新たな変化
第 13 回	存在の不安	存在の不安と個人の表象
第 14 回	人間の表象に関するこのセメスターのまとめ	取り上げて、考察してきた人間の表象の変遷についての、このセメスターのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読み、内容を確認し、学術用語等を調べる。
分担発表のための準備をする。
本授業の準備・復習時間は、各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛－ルネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002 年
ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛－フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社、2002 年
ゴットフリート・ベーム『図像の哲学－いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017 年
ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、筑摩書房、2019 年

【参考書】
ジェラール・ジュネット『芸術の作品Ⅰ－内在性と超越性』和泉涼一訳、水声社、2013 年
ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ―啓蒙の光の陰で』小野潮訳、法政大学出版局、2014 年
ジョン・A・ウォーカー／サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門－美術史を超えるための方法論－』岸文和他訳、晃洋書房、2001 年
ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫、2006 年

【成績評価の方法と基準】
毎回の授業における報告に対する評価 50 %と最後の期末レポート 50 %によって評価する。
具体的事例の分析と考察により、人物表象の歴史的変遷と多文化間の共有性について、及び、表象行為の内在性と超越性について、多文化横断的に把握したことを確認する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生の意見に基づき、学生の分担発表の計画を明確に定めます。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布と課題提出のために学習支援システムを活用します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化記号論、テクスト論
＜研究テーマ＞間文化性研究
＜主要研究業績＞
「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互受容－個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 16 号、2015 年
「唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 15 号、2014 年
「絵画のナラトロジー試論―知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道―共生と連帯を求めて』彩流社、2013 年

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, students will learn the basic concept of intercultural study on theory and examples. For that purpose, we will take European painting, an interculturally generated cultural activity, as an example. Students will understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to presentation(50%) and final report(50%).

CUA500G1 － 110

多文化相関論Ⅱ B

熊田　泰章

サブタイトル：**人の表象の間文化性**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では間文化性研究の基本的考え方を理論と実例によって学ぶ。そのために、間文化的に生成された文化活動であるヨーロッパ絵画を例として取り上げる。諸文化が相互に共通点を有していることと、その共通点がゆえに相違点が際立つこと、そして、それらの共通点と相違点を相互に認識し合いながら、諸文化が間文化的関係性の中で相互に影響を与えあうことを把握する。「(図) 像はいかにして意味を創造するか」という問いをめぐって、この授業を展開する。この問いは、ゴットフリート・ベーム『図像の哲学　いかにイメージは意味をつくるか』が発する問いである。図像は、それが何を表象するものであるかはともかく、古代文明において墳墓装飾や宮殿装飾に用いられ、あるいは、それ以前においても、洞窟の壁画として用いられ、しかして、古典古代のギリシャ・ローマにおいて人の日常の中で人の姿が目にされるものとなったことを経て、様々な時代の様々な文化での様々な用いられ方を積み重ねながら、今日のすべてが図像化されるにまで至っている。ベーム『図像の哲学』を基本のテクストとして、ベームの問いがいかに発せられたのかを探求し、その問いへの答を検討する。
春学期「多文化相関論Ⅱ A」の成果を基にする。

【到達目標】
図像表象の歴史的変遷と多文化間の共有性について把握する。
図像表象行為の内在性と超越性について多文化横断的に把握する。
古典古代のギリシャ、そしてそれ以前の古代エジプトにまで遡って、図像表象の歴史をたどり、その継続と断絶を追って、特にルネサンス期フランドルの肖像画とそれ以降の風俗画に着目して整理を進め、今日の図像の氾濫がいかにして生じてきたかについて考察を行う。
使用する文献によって、個々の事例を具体的に知り、それらにおける図像表象の共通性を分析的に知る。
図像表象の研究を通して、間文化性について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行う。基本的に教室での対面授業とするが、必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置する。本授業の開始日の前に、「学習支援システム」による連絡事項を確認すること。
論文精読と教員の説明に基づき、学生が能動的に学ぶ大学院授業とする。
絵画を通して間文化性を学ぶために、テキストとして 4 冊の研究書を順次精読し、かつ相互に参照する分析を行う。毎回、取り扱う個所を定め、事前に履修者が内容を確認し、学術用語、固有名詞などを調べ、報告する。その報告に基づき、授業の中で内容に対するまとめと批評を行う。
関連する適切な美術展を選び、作品に対する分析を行う。
毎回の授業では、履修者の報告に対する講評を行って、フィードバックとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』 ベーム『図像の哲学』	通時的・共時的な文化の共通性 ベンヤミンの意義と限界 ベームの問い
第 2 回	個人の表象	古典古代からルネサンス
第 3 回	個人の表象	フランドル
第 4 回	市民生活の表象	風俗画
第 5 回	フーコー『マネの絵画』	「チュイルリー公園の音楽会」
第 6 回	フーコー『マネの絵画』	「オペラ座の仮面舞踏会」
第 7 回	フーコー『マネの絵画』	「マクシミリアンの処刑」
第 8 回	フーコー『マネの絵画』	「ボルドーの港」
第 9 回	フーコー『マネの絵画』	「温室にて」
第 10 回	フーコー『マネの絵画』	「給仕する女」
第 11 回	フーコー『マネの絵画』	「笛を吹く少年」
第 12 回	フーコー『マネの絵画』	「草上の昼食」 「オランピア」
第 13 回	フーコー『マネの絵画』	「フォリー・ベルジェールのバー」
第 14 回	個人の表象の間文化性	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
文献を事前に読み、内容を確認し、学術用語等を調べる。
分担発表のための準備をする。
本授業の準備・復習時間は、各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛－ルネサンス期フランドル肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002 年
ツヴェタン・トドロフ『日常礼賛－フェルメールの時代のオランダ風俗画』塚本昌則訳、白水社、2002 年
ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、ちくま学芸文庫、2019 年
ゴットフリート・ベーム『図像の哲学－いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017 年

【参考書】
ジェラール・ジュネット『芸術の作品Ⅰ－内在性と超越性』和泉涼一訳、水声社、2013 年
ツヴェタン・トドロフ『ゴヤ―啓蒙の光の陰で』小野潮訳、法政大学出版局、2014 年
ジョン・A・ウォーカー／サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門－美術史を超えるための方法論－』岸文和他訳、晃洋書房、2001 年
ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫、2006 年

【成績評価の方法と基準】
毎回の授業における報告に対する評価 50 %と最後の期末レポート 50 %によって評価する。
具体的事例の分析と考察により、人物表象の歴史的変遷と多文化間の共有性について、及び、表象行為の内在性と超越性について、多文化横断的に把握したことを確認する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生の意見に基づき、学生の分担発表の計画を明確に定めます。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布と課題提出のために学習支援システムを活用します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化記号論、テクスト論
＜研究テーマ＞間文化性研究
＜主要研究業績＞
「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互受容－個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 16 号、2015 年
「唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 15 号、2014 年
「絵画のナラトロジー試論―知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道―共生と連帯を求めて』彩流社、2013 年

【Outline (in English)】
【Course outline】
In this class, students will learn the basic concept of intercultural study on theory and examples. For that purpose, we will take European painting, an interculturally generated cultural activity, as an example.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to understand the fact that the cultures have something in common with each other, and that the differences make them stand out, and that the cultures have an intercultural relationship while recognizing the commonalities and differences.
【Learning activities outside of classroom】
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria /Policy】
Final grade will be calculated according to presentation (50%) and final report (50%).

ART500G1 － 112

多文化芸術論Ⅰ

佐藤　千登勢

サブタイトル：**映画を読む**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、芸術テクストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性と重層性について考え、議論します。ロシア（ソ連）、チェコ（チェコスロバキア）、ポーランドの文学作品や映画を用いながら、それぞれの国々の社会、経済、文化、歴史、国家間の勢力均衡を解読する作業を通して、多義的記号体系を分析・洞察する力を養います。

【到達目標】
映画作品を中心に、芸術言語が担う審美的機能と社会批判の機能という一見相反する多義的な表現の読解を重ねることで、これを自身の見解や思考の組み立て方に役立てて、論理的に議論やプレゼンテーションを展開する力を獲得することが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
旧社会主義国家で創造された芸術テクストは、その国の文化や社会構造、イデオロギー、歴史的背景、国家間の関係を濃厚に映し出す、いわば、体制と人間社会の縮図モデルです。しかし、多義的で重層的な言語（映画言語、音楽言語を含む）により、それは、多様な解釈を許容するとともに、作者の真の意図やメッセージを解読すべき錯綜した迷宮のような作品となっていることも少なくありません。私たちは、手法や表象、形式といった審美的観点に着目すると同時に、《抑圧》《イデオロギーによる民族統合》《民族差別》《冷戦》《ソ連邦崩壊と離散》《ナショナリズム》といった社会学的・歴史的キーワードを基に、二重構造の芸術テクストを分析・批評していきます。授業でなされた議論や自身の見解を A4 一枚程度にまとめたリアクションペーパーを毎回、提出してもらいます。リアクションペーパーにはコメントを加えて教場もしくは学習支援システムを通して返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	芸術の機能について−− シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ	ロシア・フォルマリズム宣言としても名高いシクロフスキーの『手法としての芸術』を基に、「異化−自動化」「日常− 非日常」「手法−素材」等の二項対立の芸術上の、また日常における意義を考える。
第 2 回	芸術の機能について−− シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ（2）	ロシア・フォルマリズムの主導者シクロフスキーが提唱した「異化」の概念について具体例を確認しつつ、理解を深める。
第 3 回	煽動と挑発−− モンタージュ派：エイゼンシテイン	エイゼンシテイン『ストライキ』、『戦艦ポチョムキン』、『十月』の煽動的なモンタージュについて概説。
第 4 回	煽動と挑発−− モンタージュ派：ジガ・ヴェルトフ	都市化と複製技術の発達を背景としたヴェルトフの手法としてのモンタージュについて考察。
第 5 回	プロパガンダ−− プドフキンの映画言語『アジアの嵐』	プドフキン『アジアの嵐』における多様なモンタージュを分析して審美的側面を確認しながら、同時にこの作品が呈示する多民族併合や社会主義革命の正当化という多層的テーマを読む。
第 6 回	プロパガンダ−− トゥーリンの映画言語『トゥルクシブ』	プロパガンダ的煽動性の記号や表象を現前化させずに、宗教的煽動とも言える超越的力の存在と崇高さの創出、サブリミナル的手法によるプロパガンダの力を分析していく。
第 7 回	面従腹背の二重構造−− エイゼンシテイン『イワン雷帝』	エイゼンシテインの世界的影響力を配下におくためにスターリンが制作依頼した『イワン雷帝』。この作品にはスターリンを批判・揶揄する記号や表象、表現が構造化されている。作品をめぐってのスターリンとエイゼンシテインとの闘争という背景も交えつつ、概説。
第 8 回	面従腹背の二重構造−− アンジェイ・ワイダの映画言語（1）	ポーランドがソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、映画テクストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。『灰とダイヤモンド』、『地下水道』を扱う。
第 9 回	検閲からの解放の果て−− アンジェイ・ワイダの映画言語（2）	東欧革命、ソ連邦崩壊の後、歴史は、再評価、書き換え、名誉回復を迫られ、表現に検閲は消滅した。その時、「カティンの森事件」をワイダはどう描いたかを検証する。
第 10 回	審美的《イソップ言語》−− タルコフスキー『鏡』	幼年時代の回想的要素とドキュメンタリー映像が印象的な『鏡』。だが、幼年期の断片的回想にはスターリン時代の粛清のエピソードが多様な様式で重ねられている。象徴性や映画言語の二重性に着目しつつ、《父性の喪失》についても考えていく。
第 11 回	抵抗と挑発−− ヴェラ・ヒティロヴァの映画言語	旧チェコスロバキアの統制から自由になろうとする国民の意志を、二人の自由闊達な少女たちを通してスタイリッシュに描出するセンス、そして映画言語の二重性、台詞と映像の不一致や台詞の重みについて考察。
第 12 回	寓話的諷刺と不条理−− シャフナザーロフ『ゼロ・シティ』	ソ連社会を幾重にもパロディ化した不条理作品の珠玉『ゼロ・シティ』を基に、終末期のソ連の表象、シャフナザーロフの映画言語を考察する、また、父親（国家）とは何ものか？　について考える。
第 13 回	寓話的諷刺不条理−− アブラーゼ『懺悔』	ソ連で社会現象となった映画『懺悔』。スターリンとヒトラーを融合させたような支配者、彼に両親を粛清された少女。支配者の一族のその後の償いの物語は、史実とシュールな感覚やユーモアを交えて表現される。その寓話的表象に着目しつつ、史実、記憶、不条理について考察していく。

第 14 回	国家と個人―― パーヴェル・チュフライ『パパって何？』	ソ連崩壊後のロシア国民のメンタリティを、《父親》に裏切られた「義理の息子」の回想に重ね合わせた寓話的手法とその重みについて検討。《父殺し》の伝統についても考察。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
レジュメの内容や視聴した映像資料に対する自身の見解等を A4 一枚程度にまとめたリアクションペーパーを次週回に毎回提出する（学習支援システムを利用）。リアクションペーパー作成に要する時間は１時間程度。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用しません。教員の作成した資料を、教場もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
参考書は使用しませんが、参考文献は、随時、レジュメに掲載します。

【成績評価の方法と基準】
平常点（50 %）、リアクションペーパー（50 %）として総合的に判断します。本授業の到達目標の 60 %以上を達成した学生を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
とくにありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムを通して資料配付、課題提示を行うことがありますので、ネットの通信環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】
20 世紀ロシア文学。ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論。ソ連およびロシアの映画。
http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html

【Outline (in English)】
● Course outline
We consider artistic texts not only as a place for experiencing aesthetic pleasures but also as a device of social criticism, and discuss the polysemy and multiplicity of their expressions and representations.
● Learning Objectives
The aim is to acquire the ability to logically develop discussions and presentations by repeatedly watching movie works and using them to formulate one's own views and thoughts.
● Learning activities outside of classroom
After each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your own views on the video materials you watched by the next week.It takes about 1 hour to create the reaction paper.
● Grading Criteria/ Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(50 %) and short reports(50 %). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ART500G1 － 113

多文化芸術論Ⅱ

廣松　勲

サブタイトル：**フランコフォニー文学と社会**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
複数文化に広がる社会文化的現象を分析するために、この授業では「カナダ・ケベック州」と「カリブ海域諸島のフランス海外県」という、2 つの「フランス語圏（フランコフォニー）」に注目する。いずれの地域もアメリカ大陸の一部であり、「英語圏（アングロフォニー）」とも密接に関わる地域でもある。
これらの地域の芸術は、作品の形式に集中した「内在分析」だけではとらえ切れない豊饒な問題系を抱えている。そのため、文学・映画テクストに「社会学的なテクスト分析」を施すことで、テクストとコンテクストとの繋がりを、各地域の作品をもとに分析する。
このような具体的な作品分析を行うため、事前に各地域の社会文化的・言語学的状況を紹介することになる。

【到達目標】
この授業では、複数の言語・文化が併存する地域において生産される芸術作品（主に文学と映画）を分析対象として、いかに社会文化的現象が芸術作品に書き込まれるのかを検討する。
とりわけ、英語文化とフランス語文化が併存する「カナダ・ケベック州」、そしてフランス語文化とクレオール語文化が併存する「カリブ海域諸島」を分析対象にしつつ、学生には文学・映画テクストの「社会学的なテクスト分析」の方法を身に付けてもらうことを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
日本語による講義を行う。受講者は関心のあるテーマまたは作品について調査・分析を行い、それを基にした期末レポートを提出してもらう。
なお、期末レポートについては、フランスまたはフランス語圏に少しでも関連するならば、自らの研究テーマに即した発表を行うこともできる（比較分析など）。
さらに、毎回の授業においてコメントシートを提出してもらうことで、学生の理解度・考えなどを把握しておきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション：フランス語圏とは何か？	「フランコフォニー」や「アングロフォニー」の歴史・地理
第 2 回	カリブ海域諸島のフランス語圏①	カリブ海域諸島の社会文化的・言語学的状況
第 3 回	カリブ海域諸島のフランス語圏②	エメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』
第 4 回	カリブ海域諸島のフランス語圏③	エドゥアール・グリッサンの小説『レザルド川』
第 5 回	カリブ海域諸島のフランス語圏④	パトリック・シャモワゾーの小説『素晴らしきソリボ』
第 6 回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑤	カリブ海域諸島の思想
第 7 回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑥	カリブ海域諸島の映画：『マルチニックの少年』
第 8 回	カナダ・ケベック州のフランス語圏①	カナダ・ケベック州の社会文化的・言語学的状況
第 9 回	カナダ・ケベック州のフランス語圏②	ジャック・ゴドブーの小説『やぁ、ガラルノー！』
第 10 回	カナダ・ケベック州のフランス語圏③	エミール・オリヴィエの小説『パッサージュ』（邦訳なし）
第 11 回	カナダ・ケベック州のフランス語圏④	ダニー・ラフェリエールの小説『吾輩は日本作家である』
第 12 回	カナダ・ケベック州のフランス語圏⑤	カナダ・ケベック州の思想
第 13 回	カリブ海域諸島からケベック州へ	カリブ海域とケベック州とのつながり：セゼールのドキュメンタリーを介して
第 14 回	総括	社会と芸術とのつながり方

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・本講義で扱う文学作品については、一作を除いて、ほぼ全て邦訳が存在する。受講生には、できるだけ翻訳文献にも触れてほしい。
・授業で扱うアメリカ大陸のフランス語圏については、それぞれ自分自身でも社会状況などを事前に調べておいて欲しい。
・本授業の準備学習・復習時間は、合計 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
・毎回資料を配布します。

【参考書】
・平野千香子著『フランス植民地主義の歴史』人文書院，2002 年.
・鳥羽美鈴著『多様性のなかのフランス語』関西学院大学出版会，2012 年.
・秋田茂著『イギリス帝国の歴史』中公新書，2012 年.
・井野瀬久美惠著『興亡の世界史 大英帝国という経験』講談社学術文庫，2017 年.

【成績評価の方法と基準】
・平常点と期末レポートに基づき、総合的に評価する。
①平常点（コメントシートなど）： 30%
②期末レポート： 70%

【学生の意見等からの気づき】
・講義科目ではあるが、できるだけ学生が自らの考え・反応などを講義中に述べられるような雰囲気づくりに努めたい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞フランコフォニー文学
＜研究テーマ＞ 脱植民地化以後のメランコリー、トランスカルチャー等
＜主要研究業績＞ "Mélancolie postcoloniale : relecture de la mémoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Patrick Chamoiseau et Émile Ollivier"（モントリオール大学提出博士論文）

【Outline (in English)】
This course introduces the foundations of literature of French speaking world (especially in the Americas) to students taking this course. They can learn also the methodology of literary research while reading literary text and social context at the same time.
The goals of this course are to understand and explain the socio-cultural situation of francophone literature.
Before and after each class meeting　students will be expected to spend four hours reading the relevant documents.
Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in-class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, term-end report: 70%.

POL500G1 － 114

異文化社会論ＩＡ

今泉　裕美子

サブタイトル：**地域と国際関係：植民地社会からのアプローチ**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
植民地社会を、異なる文化をもつ人及びその集団同士の関係、移動によって形成される「地域」として捉え、それら「地域」が国際関係をいかに構成し、変化させているのかを学ぶ。
過去の植民地社会のみならず、現代も植民地的な状況におかれている社会、植民地支配が宗主国と植民地に生み出した移民社会、旧植民地宗主国に新たな形で表れている植民地主義も対象とする。
本年度は太平洋島嶼 (特にミクロネシア）の “Nuclear Colonialism” をテーマとする。

【到達目標】
１．植民地社会を人および人の集団の移動、運動、くらし、経験などから考察し、これに必要な基本的な概念、理論、思想について理解できる。
２．植民地支配体制と植民地社会の相互の連関から国際関係の特徴を把握し、植民地支配が過去にもたらした／形を変えて今なお再生産される問題を、植民支配を受けた／受けている人びとの取り組みから理解できる。
３．一見、自身の研究課題と異なるテーマであっても、自らの関心や研究課題とのつながりを「発見」することを通じて、広領域学としての国際関係学（International Studies）、および地域研究の方法を理解し、自身の研究に応用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
１．毎回報告者を決め、割り当てられたテキストあるいは資料に関する報告、報告者以外は、質問やコメントを準備し、ディスカッションを行うことを基本とする。テーマによっては講義を行う。
２．本授業に関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。
３．対面で行うことを原則とするが、感染症対策などの理由からオンラインになる可能性がある（【その他の注意事項】を確認して下さい）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方、受講生の関心を共有。資料（a）（b）を手がかりに、“Nuclear Colonialism” に関する太平洋島嶼の基礎情報、問題の所在、女性が活動の中心になること、などについて。
2	“Nuclear Colonialism” １－米国による核実験	第二次世界大戦後初の米国によるマーシャル諸島での核実験 Operation Crossroads について、関連する動画を中心に、関連文献に学び議論する。
3	“Nuclear Colonialism” ２－戦略的信託統治と核実験	植民地なき植民地制度としての戦略的信託統治と核実験の関係について学び、議論する。
4	“Nuclear Colonialism” ３－米国による水爆実験	米国によるマーシャル諸島での Operation Castle における水爆 Bravo 投下について、動画を中心に、関連文献に学び、議論する。
5	“Nuclear Colonialism” ４－英、仏による核実験	英、仏による太平洋島嶼での核実験について、動画を中心に関連文献に学び、議論する。
6	“Nuclear Colonialism” ５－日本の関わり①	マーシャル諸島で行われた水爆 Bravo 投下を日本にとっての「第五福竜丸事件」として考える。
7	“Nuclear Colonialism” ６ －日本の関わり②	アメリカの「核の傘」の下での安全保障を選択した日本の立場、水爆 Bravo 投下を日本、沖縄、東アジア規模での被ばくの問題として考える。
8	“Nuclear Colonialism” の経験の記録と継承１－歴史教育での取組み	マーシャル諸島共和国の歴史教科書をテキストに学び、議論する。
9	“Nuclear Colonialism” の経験の記録と継承２－詩とチャント	マーシャル諸島の詩人 Kathy Jetnil-Kijiner の表現と活動から学び、議論する。
10	“Nuclear Colonialism” の経験の記録と継承３－日本の地域での取り組み	焼津、三浦、高知など地方都市、第五福竜丸記念館などでの経験の記録と継承について学び、議論する。
11	“Nuclear Colonialism” の経験の記録と継承４－絵画、映画	絵画、映画を通じた記録と継承について、関連する資料について学び、議論する。
12	Decolnization of Nuclear Pacific １	”Nucler Justice"に関する主張と取組みから学び、議論する。
13	Decolnization of Nuclear Pacific ２	太平洋の軍事化、気候温暖化、開発問題などとの関係から “Nuclear Colonialism” を捉えなおし、太平洋島嶼の人びとの取り組みから学び、議論する。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
英語文献は分量が少ない資料であり、日本語の参考文献を随時紹介する。
（a)”From the Constitution of the Federated States of Microneisa, 1975,”Evelyn Flores, and Emelihter Kihleng eds., *Indigenous Literatures from Micronesia*, Honolulu: University of Hawai’i Press,2019.
（b)The Indigenous Caucus of the Nuclear Connections Across Oceania Conference” Ō tepoti Declaration,”December 1, 2022. (https://blogs.otago.ac.nz/taor-ncpacs/files/2022/12/O%CC%84tepoti-Declaration-1Dec22.pdf)
（c)「植民地」、「帝国主義」、「新植民地主義」梅棹忠夫監修『新訂増補　世界民族問題事典』平凡社、2002 年。
（d）前田哲男監修、グローバルヒバクシャ研究会編著『隠されたヒバクシャ』凱風社、2005 年。
（e） Dan Lin & Kathy Jetnil-Kijiner, "Anointed," 2019.（https://www.piccom.org/programs/anointed-1)
（f)Julianne M.Walsh with Hilda Heine, Carmen Milne Bigler, and Mark Stege, *Etto nan Raan Kein: A Marshall Islands History*, Honolulu: Bess Press, 2012.

【参考書】
随時、提示する。

【成績評価の方法と基準】
授業での討論、参加度など 30 %、報告 30 %、レポートなどの提出物 40 %。以上の成績評価をもとに、本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【学生が準備すべき機器他】
・オンラインライブ授業を行う可能性もあるため、各自、パソコンやタブレットなどの通信機器、安定的な接続、通信容量に制限がない環境を準備する。

【その他の重要事項】
・連絡や報告レジュメは学習支援システムの掲示板にて行うため、投稿通知の連絡が入るよう設定すること。
・やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。

【担当教員の専門分野等】
法政大学学術研究データベース　http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html　を参照。
・およそ 30 年にわたって行ってきた日本国内、ミクロネシアでの聞き取りを踏まえ、沖縄県県史、市史などの編さん、執筆に関わって来た。また米国議会図書館の Nan’yo Collection や琉球大学付属図書館矢内原忠雄文庫（http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/yanaihara/about.html）など複数の機関で、旧南洋群島関係の史料の発掘、整理、公開に関わった。「大文字の歴史」と「小文字の歴史」の関係を、史資料の発掘、分析と同時に、地域住民の経験をどう記録し、歴史として次世代に継承するか、そのための聞き取りの方法、地域外の研究者として地域にいかに関わるのか、から取り組み続けている。この経験に基づく「地域研究」の方法を紹介し、受講生とともに考えてゆきたい。

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course will introduce students to understand colonial society consisting of diverse cultural backgrounds under colonial system of international relations. As we focus on Pacific Islands, especially Micronesia, students will seek to understand this region through themes include global process of colonization and decolonization, nationalism and identity, militarization as neocolonialism reflecting the complex nature of contemporary global issues. Students will be also familiar with International Studies and Regional Studies.
【Learning Objectives】
Students will be able to:
① Understand “region” as an actor to develop and change international relations.
② Analyze the issues of colonial societies in the evolution of international relations with understanding of relevant concepts, theories, and thought.
③ Critically analyze information and documents pertaining to Okinawa, setting them in historical context and in interdisciplinary perspective.
【Methods】

① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 24-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.
② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.
③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.
④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related Okinawa or students' interests and understanding.
【Learning activities outside of classroom】
Based on the【Methods】, the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and feedback:40%
Students are required to take more than 60% score in total to pass.

POL500G1 － 115

異文化社会論ＩＢ

今泉　裕美子

サブタイトル：**国際関係学（International Studies）：植民地社会研究から発展したアプローチを学ぶ**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
国際○○研究/論/学とは、専門分化した学問が、世界の複雑な事象を分析することを通じて発展してきた。なかでも、国際関係に関する研究の発展過程では、対象を国内から国外へと変化させたことに留まらず、その時々の国際関係とこれを構成する行為体をどう捉え、その相互の関係をいかに特徴づけるかを分析し、また国内と国外の事象の相互連関も対象としてきた。
日本の高等教育機関が「国際関係論」を掲げた教学組織を設け、本格的に取り組み始めたのは、第二次世界大戦後の東京大学においてであった。国際政治学との一体的性格を強めるアメリカの International Relations（IR）にほぼ対応しつつも、広領域学として構成されたことや地域研究を附随させた点にオリジナリティがみられた。
本授業では、敗戦後日本の高等教育機関が、国際関係研究を取り入れるうえでの問題意識や方法、特に社会や文化をも対象とし、歴史的な視点を重視するようになったことに着目する。そこで、広領域学として成立した国際関係学（International Studies）を、その系譜のひとつである植民地社会 (正確には植民及び植民政策）研究からの発展を確認したうえで、学としての方法論を考察し、現在の国際（あるいはグローバル）○○研究/論/学への理解につなげる。

【到達目標】
１．国際関係研究の進展のなかで、国際関係学の特徴を理解できる。
２．関連する基本的な概念、理論、思想を理解できる。
３．国際関係学の方法論、特に" 関係性" をめぐる視点や方法、学際的アプローチのなかでの専門分野の追究について、自分の研究テーマや専門分野にひきつけて理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
１．毎回報告者を決め、割り当てられたテキストあるいは資料に関する報告、報告者以外は、質問やコメントを準備し、ディスカッションを行うことを基本とする。テーマによっては講義を行う。
２．本授業に関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。
３．対面で行うことを原則とするが、感染症対策などの理由からオンラインになる可能性がある（【その他の注意事項】を確認して下さい）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の目的と内容の説明、受講生の関心を共有する。
2	国際関係学とは何か	テキスト (a) を中心に学ぶ。
3	植民及び植民政策研究、地域研究から「国際関係論」へ：矢内原忠雄	テキスト (c)(d) を中心に学ぶ。
4	出発点としての「国際関係論」：川田侃	テキスト (e) を中心に学ぶ。
5	もう一つの出発点としての「国際関係論」：斉藤孝	テキスト（f）を中心に学ぶ。
6	「広義の国際関係論」：社会・文化への広がりと歴史への視点	テキスト (a)(g）を中心に学ぶ。
7	中間のまとめ	ここまでの授業の内容を整理し、後半の授業につなげる。
8	国際関係学の方法論	テキスト (b) を中心に学ぶ。
9	国際関係のなかで専門分野を問い直す①－政治・経済	テキスト (a)(b）を中心に学ぶ。
10	国際関係のなかで専門分野を問い直す②－社会・文化	テキスト (a)(b）を中心に学ぶ。
11	「学際的国際関係論」？	テキスト (h) を中心に学ぶ。
12	国際関係学と地域研究①	テキスト (a)(b)(i) を中心に、国際関係の行為体としての「地域」、地域研究の視点と方法を学ぶ。
13	国際関係学と地域研究②	テキスト (a)(b)(j) を中心に、国際関係の行為体としての「地域」、地域研究の視点と方法を学ぶ。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
(a) 百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993 年。
(b) 百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003 年。
(c) 木畑洋一「植民政策論・国際関係論」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011 年。
(d) 今泉裕美子「矢内原忠雄の国際関係研究と植民政策研究-講義ノートを読む」『国際関係学研究』23、1996 年。
(e) 川田侃『国際関係概論』東京大学出版会、1958 年。
(f) 斉藤孝『国際関係論入門』(新版）有斐閣、1981 年。
(g) 南塚信吾他編『国際関係論基礎研究』福村出版、1976 年。
(h) 岩田一政『国際関係研究入門 (増補版)』東京大学出版会、2003 年。
(i) 飯島みどり「近代の陰画としての「地域」」『歴史評論』№ 575、1998 年。
(j) 鹿野政直「地域史と世界史」鹿野政直『化生する歴史学―自明性の解体のなかで』校倉書房、1998 年。

【参考書】
武者小路公秀他編『国際学-理論と展望』東京大学出版会、1976 年。
衛藤瀋吉他編『国際関係論』東京大学出版会、1982 年。
フレッド・ハリディ（菊井禮次訳）『国際関係論再考』ミネルヴァ書房、1997 年。
島根國士編『国際文化学への招待』新評論、1999 年。
平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000 年。
進藤榮一『現代国際関係学』有斐閣、2001 年。
鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011 年。
『地域研究（特集：地域研究方法論)』vol.12,No.2,2012 年。
酒井啓子編『グローバル関係学とは何か』岩波書店、2020 年。
【事典など】
松原正毅他編『世界民族問題事典（新訂増補版)』平凡社、2002 年。
川田侃他編『国際政治経済事典（改訂版)』東京書籍、2003 年。

【成績評価の方法と基準】
授業での討論、参加度など 30 %、報告 30 %、レポートなどの提出物 40 %。
以上の成績評価をもとに、本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
国際関係研究を学ぶ機会をもたなかった受講生にも、「国際」を掲げた学問分野で学ぶ以上知っておくべきこと、特に基礎的な概念、理論、研究史、学際的な追究のなかでの専門性の追究などについて、受講生の関心や研究テーマに引き付けて学べるような工夫を継続する。

【学生が準備すべき機器他】
・オンラインライブ授業を行う可能性もあるため、各自、パソコンやタブレットなどの通信機器、安定的な接続、通信容量に制限がない環境を準備する。

【その他の重要事項】
・連絡や報告レジュメは学習支援システムの掲示板にて行うため、投稿通知の連絡が入るよう設定すること。
・やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。

【担当教員の専門分野等】
法政大学学術研究データベース　https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html を参照。

【Outline (in English)】
The aim of this course is to review the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and to understand of its academic discipline. After WWII, Tokyo University inaugurated "kokusai kankei ron" as a system of education and research of international relations introducing Anglo-American International Relations (IR) with a kind of acculturation. "Kokusai kankei ron" came to prevail in postwar Japan and have its specific feature in the method. This class explore the development of the International Studies originated from colonial studies in the variety of approaches. It will lead to understanding of transformation of traditional disciplines into "International so and so."
【Learning Objectives】
Students will be able to:
① Comprehend the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and its academic discipline.
② Understand key concepts, theory, and thought of International Studies.
③ Comprehend International Studies based on students' research field and topics.
【Methods】
① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 24-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.
② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.
③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.
④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related the objects of the class or students' interests and understanding.
【Learning activities outside of classroom】
Based on the【Methods】, the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.
【Grading Criteria /Policy】
Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and feedback ： 40%
Students are required to take more than 60% score in total to pass.

PSY500G1 － 116

異文化社会論ⅡA

浅川　希洋志

サブタイトル：**文化はどのように人の心を形成するのか**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
国際社会で生きるとき、私たちは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えるとき、私たちは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考える傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。
本授業では、文化心理学や心理人類学に関わる文献（特に、河合隼雄著『日本文化のゆくえ』、東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』、恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』、斎藤環著『ひきこもり文化論』等）を読み解きながら、心の働きと文化の関連性について学んでいく。

【到達目標】
心の働きと文化の関連性、特に家庭でのしつけや学校教育が子どもたちに何を期待し、そのような期待と文化の間にどのような関連があり、そのような期待を内在化した教育システムの中で、子どもたちがどのような心の働きを身につけていくのか、を理解する。また、私たちが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能（心の働き）がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第 1 章「『私』さがし」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第 7 章「異文化体験の軌跡」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	東洋『日本人のしつけと教育』第 1 章「意欲の構造」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	東洋『日本人のしつけと教育』第 2 章「役割社会と受容的勤勉性」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	東洋『日本人のしつけと教育』第 3 章「内在モデルとしての『いい子』」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	東洋『日本人のしつけと教育』第 4 章「『気持ち』への関心」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	東洋『日本人のしつけと教育』第 5 章「滲み込み型のしつけと教育」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	東洋『日本人のしつけと教育』第 6 章「道徳意識と道徳判断」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
10	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第 1 章「リサの疑問」、第 2 章「かくれたカリキュラム」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第 3 章「集団の中の個人」、第 4 章「小さな選民たち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
12	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第 5 章「キング先生の戦い」、第 6 章「内なるアメリカ、内なる日本」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
13	『ひきこもり文化論』第 4 章「『甘え文化』と『ひきこもり』―比較文化的考察」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
14	授業の総括	授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備をしておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
①河合隼雄著『日本文化のゆくえ』（岩波書店、2000 年）
②東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』（東京大学出版会、1994 年）
③恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』（中公新書、1992 年）
④斎藤環著『ひきこもり文化論』（ちくま学芸文庫、2016 年）
＊テキストはできる限り PDF 化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】
必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】
「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。
「配分（%）」：討論への参加（50 %）＋ 担当日の発表（50 %）

【学生の意見等からの気づき】
受講生が自身の研究を発展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　ポジティブ心理学、文化心理学
＜研究テーマ＞（1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について、（3）フロー経験と生理指標の関連性について。
＜主要研究業績＞
『フロー理論の展開』世界思想社（2003 年）、「フロー経験の諸側面」島井哲志編『ポジティブ心理学： 21 世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006 年）、“Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?” Journal of Happiness Studies（2010 年）、『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造』学文社（2011 年）、「楽しさと最適発達の現象学―フロー理論」鹿毛雅治編『モティベーションを学ぶ 12 の理論』金剛出版（2012 年）、『クリエイティヴィティ』チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016 年）、"Universal and cultural dimensions of optimal experiences." Japanese Psychological Research（2016 年）、「持続的な幸福（マーティン・セリグマン）―ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』（第 20 巻第 3 号）金剛出版（2020 年）、「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したもの」『心と社会』（第 53 巻第 2 号）日本精神衛生会（2022）。

【Outline (in English)】
(1) Course Outline
In this seminar, students will explore issues related to culture and psychological functioning by reading more like anecdotal books and articles, and discuss how culture shapes psychological processes of people. Each student's own experiences they have had in different cultures will be welcomed to deepen class discussions.
(2) Learning Objectives
One of the main objectives of this seminar is to understand how educational practices in a culture are intended to bring up children as culturally desired and also expected adults through the educational process of the culture.
(3) Learning Activities Outside of Classroom
Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.
(4) Grading Criteria/Policy
Final grade will be decided based on following:
In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

PSY500G1 － 117

異文化社会論ⅡＢ

浅川　希洋志

サブタイトル：**文化はどのように人の心を形成するのか**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
異文化社会論Ⅱ A では文化の違いから生じる教育システムの違いやそれによって培われる心のあり方に関する文献を読み、心の働きと文化の関連について考察していくが、本授業ではそのような「文化と心」にまつわる事象を文化心理学の枠組み、つまり文化心理学における理論として捉えなおすことを主たる目的とする。授業では、北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』、リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』等をテキストとして用い、掘り下げた議論の必要なトピックスに関しては適宜、英語論文を含めた原著にあたっていく。また、授業全般を通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを考えていく。

【到達目標】
心の働きと文化の関連性を文化心理学の枠組みの中で捉えることができる。特に、Markus & Kitayama が提唱した文化的自己観のモデルに注目し、人々の持つ文化的自己観が彼らの認知、感情、モチベーションなどとどのように関連しているのかが理解できること。また、授業で扱ったトピックスを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかが理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 1 章「古代ギリシャ人と中国人は世界をどう捉えたか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 2 章「思考の違いが生まれた社会的背景」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 3 章「西洋的な自己と東洋的な自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 4 章「目に映る世界のかたち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 5 章「原因推測の研究から得られた証拠」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 6 章「世界は名詞の集まりか、動詞の集まりか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 7 章「東洋人が論理を重視してこなかった理由」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第 8 章「思考の本質が世界共通でないとしたら」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
10	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第 2 章 「自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第 3 章 「感情」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
12	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第 4 章「欧米における自己高揚と日本における自己批判」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
13	ディスカッション	授業で扱った文化心理学的知見が、受講者の修士論文のテーマを発展させる上で、何らかの新しい視点を与え得るものだったかどうかを討論する。
14	授業の総括	授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備をしておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
①北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』（共立出版、1998 年）
②リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』（ダイヤモンド社、2004 年）
＊テキストはできる限り PDF 化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】
必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】
「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。
「配分（%）」：討論への参加（50 %）＋ 担当日の発表（50 %）

【学生の意見等からの気づき】
受講生が自身の研究を発展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　ポジティブ心理学、文化心理学
＜研究テーマ＞（1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について、（3）フロー経験と生理指標の関連性について。
＜主要研究業績＞
『フロー理論の展開』世界思想社（2003 年）、「フロー経験の諸側面」島井哲志編『ポジティブ心理学： 21 世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006 年）、“Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?” Journal of Happiness Studies（2010 年）、『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造』学文社（2011 年）、「楽しさと最適発達の現象学―フロー理論」鹿毛雅治編『モティベーションを学ぶ 12 の理論』金剛出版（2012 年）、『クリエイティヴィティ』チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016 年）、"Universal and cultural dimensions of optimal experiences." Japanese Psychological Research（2016 年）、「持続的な幸福（マーティン・セリグマン）―ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』（第 20 巻第 3 号）金剛出版（2020 年）、「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したもの」『心と社会』（第 53 巻第 2 号）日本精神衛生会（2022）。

【Outline (in English)】
(1) Course Outline
This seminar will read theory-oriented books and articles in cultural psychology and try to understand relevant issues with a theoretical framework of cultural psychology. Main topics of this seminar will be on how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships. In addition, what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies will be argued throughout the course.
(2) Learning Objectives
By the end of the course, students are expected to understand (a) how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships, and (b) what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies.
(3) Learning Activities Outside of Classroom
Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.
(4) Grading Criteria/Policy
Final grade will be decided based on following:
In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

CUA500G1 － 201

ナショナリズム／エスニシティ論Ａ

石森　大知

サブタイトル：**文化人類学の諸アプローチ**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
・本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論を文化人類学的視点から学ぶとともに、自らの興味関心あるいは学習・研究テーマと関連付けて考える能力を身につけることを目的とする。
・春学期のナショナリズム／エスニシティ論Ａでは「文化人類学の諸アプローチ」について学び、秋学期のナショナリズム／エスニシティ論Ｂにおいてナショナリズム・エスニシティ論の中心的な理論や概念を学ぶための準備とする。

【到達目標】
・現代文化人類学に関する専門的な知識を習得する。
・文献の内容をただ理解するだけではなく、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展につなげる。
・ものごとを相対的に捉えることによって得られる他者理解の力や洞察力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
・本授業は対面授業となります（ただし、実際の授業運営においては対面とリアルタイム・オンラインの組み合わせで実施予定）。
・本授業は主に文献の輪読形式で行いますが、学生の理解促進のために講義形式も適宜取り入れる。
・文献の輪読では、毎回発表者を立てます。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
・春学期は、現代文化人類学の中心的な概念や理論を広く学ぶ（一方、秋学期は、民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる）。
・履修者から出された興味深いコメントや質問等を授業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第１回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、履修上の注意、自己紹介、各自の問題関心を発表
第２回	文化相対主義	文化相対主義の諸相に関する文献の発表およびグループ討論
第３回	文化と経済	贈与交換に関する文献の発表およびグループ討論
第４回	家族と親族	家族・親族研究に関する文献の発表およびグループ討論
第５回	紛争・暴力・国家	戦争と平和に関する文献の発表およびグループ討論
第６回	宗教と世界観	宗教概念とアニミズムに関する文献の発表およびグループ討論
第７回	儀礼と国家	人類学的儀礼研究に関する文献の発表およびグループ討論
第８回	エスニシティ	エスニシティ論に関する文献の発表およびグループ討論
第９回	多文化主義	多文化主義論に関する文献の発表およびグループ討論
第10回	開発と文化	開発人類学に関する文献の発表およびグループ討論
第11回	人類学批判	ポストコロニアル論に関する文献の発表およびグループ討論
第12回	自然と文化	存在論的転回に関する文献の発表およびグループ討論
第13回	科学と文化	科学に関する文献の発表およびグループ討論
第14回	総括	春学期のまとめと秋学期の準備

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
・授業内で紹介する文化人類学や地域研究の関連文献を読む。
・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
・本授業の準備学修・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
授業中に適宜紹介するが、以下のものを挙げておく。
内堀基光・山本真鳥（編）『人類文化の現在―人類学研究』放送大学教育振興会、2016 年。
桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論 文化人類学―基本と最新のトピックを学ぶ』ミネルヴァ書房、2018 年。
松村圭一郎・中川理・石井美保（編）『文化人類学の思考法』世界思想社、2019 年。

【成績評価の方法と基準】
討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70 %）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30 %）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生同士の議論がより活発になるような授業運営（議論を引き出すための工夫、発言しやすい雰囲気や授業の流れ）を心がける。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
・第１回目授業には必ず出席してください。事前の連絡や相談もなく第１回目授業を欠席した場合は原則、履修を認めません。
・対面をオンラインで同時配信するハイフレックス型授業は実施しません。

【担当教員の専門分野】
＜専門領域＞文化人類学、オセアニア地域研究
＜研究テーマ＞オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
＜主要研究業績＞
石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学―グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。
石森大知 2019「民族性から土着性へ―ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面」『国際文化学研究』53:1-27。
石森大知 2019「「新しいロトゥ」としてのバハーイー教―ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This course introduces the basics of cultural anthropology, which seeks to understand cultural diversity in the world. And also, we learn the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes.
[Learning Objectives]
At the end of the course, students are expected to understand how nation is defined and how people use this concept for nation-building, economic development and welfare policy.
[Learning Activities Outside of Classroom]

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
[Grading Criteria/Policy]
Grading will be decided based on briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

CUA500G1 － 202

ナショナリズム／エスニシティ論Ｂ

石森　大知

サブタイトル：**民族・国家・エスニシティ**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業では、ナショナリズム・エスニシティ論に関連するテーマを扱った論文を講読し、それらと自らの学習・研究テーマを関連付けて考える能力の習得を目指す。具体的には、民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、ナショナリズム、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる。

【到達目標】
・太平洋諸島、東南アジア、日本など世界各地の民族誌の講読を通して、ナショナリズムおよびエスニシティの多様性・普遍性に関する洞察力を身につける。
・日本語だけではなく、英語の学術論文の内容を的確に理解できるようにする。
・文献の内容を理解することに加え、批判的な読み方をできるようにする。その作業を通して、自らの研究テーマの構想・発展につなげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
・本授業は対面授業となります（ただし、実際の授業運営においては対面とリアルタイム・オンラインの組み合わせで実施予定）。
・本授業は主に文献の輪読形式で行いますが、学生の理解促進のために講義形式も適宜取り入れる。
・文献の輪読では、毎回発表者を立てます。発表者はレジュメに基づいて発表し、それを受けて履修者全員で討論を行う。よって全ての履修者は文献を熟読の上で授業に参加すること。
・秋学期は民族・国家・エスニシティをはじめ、人種主義、反植民地運動、国民統合、先住民運動、国家からの逃避などに関する論文を取り上げる（一方、春学期は現代文化人類学の中心的な概念や理論を広く学習する）。
・履修者から出された興味深いコメントや質問等を授業内で取り上げ、全体に対してフィードバックを行うとともに、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方とスケジュール、授業の概要説明
第 2 回	民族と国家	民族・国家・エスニシティに関する文献の発表およびグループ討論
第 3 回	同時代のエスニシティ	エスニシティとその論争に関する文献の発表およびグループ討論
第 4 回	人種主義と植民地化	人種概念の社会的構築に関する文献の発表およびグループ討論
第 5 回	反植民地運動と国民統合－太平洋の事例①	太平洋の植民地主義と国家独立に関する講義
第 6 回	反植民地運動と国民統合－太平洋の事例②	太平洋の反植民地運動に関する文献の発表および討論
第 7 回	反植民地運動と国民統合－太平洋の事例③	太平洋の国民統合に関する文献の発表および討論
第 8 回	先住民・エスニシティ・国家①	先住民の権利に関する講義
第 9 回	先住民・エスニシティ・国家②	文献 A（日本の事例）の発表および討論
第 10 回	先住民・エスニシティ・国家③	文献 A（アジアの事例）の発表および討論
第 11 回	国家からの逃避－東南アジアの事例①	文献 B（1 章）の発表および討論
第 12 回	国家からの逃避－東南アジアの事例②	文献 B（5 章）の発表および討論
第 13 回	国家からの逃避－東南アジアの事例③	文献 B（6 章）の発表および討論
第 14 回	総括	秋学期に学んだことを振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・輪読に使用する文献の予習・復習を行う（発表担当者かどうかに関わらず文献を熟読）。
・授業内で紹介する文化人類学や地域研究の関連文献を読む。
・図書館などで関連文献を探し、授業の理解を深める。
・自らの研究テーマについて日ごろから関心を深め、必要な文献を読み調べる。
・本授業の準備学修・復習時間は各２時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
教科書はとくに指定せず、必要に応じて関連資料を配布する。

【参考書】
授業中に適宜紹介するが、以下のものを挙げておく。
田辺明生ほか（編）『環太平洋地域の移動と人種－統治から管理へ、遭遇から連帯へ』京都大学学術出版会、2020 年。
深山直子ほか（編）『先住民からみる現代世界－わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018 年。
丹羽典生・石森大知（編）『現代オセアニアの〈紛争〉－脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂、2013 年。
ジェームズ・C・スコット『ゾミア－脱国家の世界史』佐藤仁監訳、みすず書房、2013 年。

【成績評価の方法と基準】
討論・発表内容、授業への参加態度など平常点（70 %）を重視するとともに、授業内で課す予定のレポートやレジュメの内容（30 %）も評価対象とする。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
学生同士の議論がより活発になるような授業運営（議論を引き出すための工夫、発言しやすい雰囲気や授業の流れ）を心がける。

【学生が準備すべき機器他】
資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用します。

【その他の重要事項】
・第１回目授業には必ず出席してください。事前の連絡や相談もなく第１回目授業を欠席した場合は原則、履修を認めません。
・対面をオンラインで同時配信するハイフレックス型授業は実施しません。

【担当教員の専門分野】
＜専門領域＞文化人類学、オセアニア地域研究
＜研究テーマ＞オセアニア地域を主な対象とし、宗教運動、キリスト教信仰、植民地主義、地域紛争などに関する研究
＜主要研究業績＞
石森大知・丹羽典生（編）2019『宗教と開発の人類学―グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。
石森大知 2019「民族性から土着性へ―ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面」『国際文化学研究』53:1-27。
石森大知 2019「「新しいロトゥ」としてのバハーイー教―ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This course introduces the theories and concepts of nationalism and ethnicity from the perspective of cultural anthropology, and to acquire the ability to think in relation to students own research themes.
[Learning Objectives]
At the end of the course, students are expected to understand how nation is defined and how people use this concept for nation-building, economic development and welfare policy.
[Learning Activities Outside of Classroom]
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

[Grading Criteria/Policy]
Grading will be decided based on briefing paper and report (30%) and in class contribution (70%).

CUA500G1 － 203

マイノリティ社会論Ａ

曽　士才

サブタイトル：**英国と日本の中国系移民ー教育とアイデンティティ**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
①北アメリカやイギリスにおける中国系移民集団、②トランスカルチュラリズム概念に基づく移民研究、③ホスト社会での共生の可能性と課題、以上 3 点について分析し、理解を深める。

【到達目標】
中国系移民を事例にマイノリティとしての移民集団の社会と文化、特に定着後のアイデンティティについての知見の獲得を目標にしている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
グローバリゼーションのもと、国際的規模の移民現象が近代以降見られるようになった。その特徴は個人が主体となって国境を越えて移動する点にある。本授業では、四大移民の一つである中国系移民について、イギリスと日本における移住過程、コミュニティの形成、ホスト社会との関係、アイデンティティの変化を取り上げる。特に第二世代以降の教育を通しての言語やアイデンティティの継承や変容について考察したい。具体的には選定したテキストの講読と討論を織り交ぜて授業を進めていく。課題へのフィードバックは Hoppii の掲示板で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	自己紹介（志望動機）、授業説明、教材の配布
第 2 回	講義 1	移民研究、エスニシティ、トランスカルチュラリズム
第 3 回	講読と討論 1-1	日本への移住過程、学校教育
第 4 回	講読と討論 1-2	中華学校における歴史的変遷
第 5 回	講読と討論 1-3	華僑社会と中華学校教育の変容
第 6 回	講読と討論 1-4	東京、横浜の中華学校の現在
第 7 回	講読と討論 1-5	神戸の中華学校の現在、変容する中華学校
第 8 回	関連映像鑑賞と討論	神戸、横浜、東京の中華学校関連の映像
第 9 回	講義 2	前半の振り返り、文化境界とアイデンティティ
第 10 回	講読と討論 2-1	イギリスへの移住過程、学校教育
第 11 回	講読と討論 2-2	補習校、コミュニティ、家庭
第 12 回	講読と討論 2-3	第二世代が語るアイデンティティの形成
第 13 回	講読と討論 2-4	教育とアイデンティティの形成
第 14 回	まとめと考察	英国と日本における中国系移民の文化とアイデンティティについて比較整理し、学期全般の振り返りを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テーマごとにテキストを配布

【参考書】
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998 年
石川朝子「日本の華僑社会と中華学校教育の変容：華僑教育から華文教育へ」『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報．人文編』 (21) p.23-50、2015 年
裘暁蘭『多文化社会と華僑・華人教育 - 多文化教育に向けての再構築と課題』青山ライフ出版、2012 年
朱彗玲『華僑社会の変貌とその将来』日本僑報社、1999 年
陳天璽など「特集「華人とは誰かー教育とアイデンティティ」」『華僑華人研究』（8）p.43-84、2011 年
白璐、柳本雄次「日本の中華学校における歴史的変遷からみた多文化教育の展開とその要因：横浜山手中華学校を中心に」『東京福祉大学・大学院紀要』10(1・2) p.121-131、2020 年
山本須美子『文化境界とアイデンティティーロンドンの中国系第二世代』九州大学出版会、2002 年

【成績評価の方法と基準】
発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化人類学、中国民族学
＜研究テーマ＞華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ
＜主要研究業績＞
『日本華僑社会の歴史と文化―地域の視点から』（共編著）明石書店、2020 年
「戦中・戦後における神戸華僑の体験―華僑学校の教職員の事例」『異文化（論文編）』第 19 号（法政大学国際文化学部）、2018 年
「日本残留中国人―札幌華僑社会を築いた人たち」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究―国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016 年
『落地生根―神戸華僑と神阪中華会館の百年＜増補版＞』研文出版、2013 年（中華会館編、共著）
「在日華人社会の民俗文化」山下清海編『華人社会がわかる本―中国から世界へ広がるネットワークの歴史、社会、文化』明石書店、2005 年

【Outline (in English)】
【Course Outline】
This course deals with education and ethnic identity of Chinese migrant in the United Kingdom and in Japan.
【Learning Objectives】
At the end of the course, participants are expected to (1) obtain basic knowledge about the relationship between education and ethnic identity of Chinese migrant in the United Kingdom and in Japan, (2) enhance the basic concept of transculturalism.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, participants will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text and prepared a resume . Your required study time is two hours for each class meeting. Your study time will be two hours.
【Grading Criteria/Policy】
Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution（70 %）and term-end report（30 %）.

CUA500G1 － 204

マイノリティ社会論Ｂ

曽　士才

サブタイトル：**米国と中国における先住民**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
①国民国家と先住少数民族、②マイノリティの文化とアイデンティティ、以上 2 点について分析し、理解を深めていく。

【到達目標】
現代世界とエスニシティを読み解く知見と力を身に着ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
フランス革命後に誕生した国民国家がその後世界中に広まるなか、国家権力を握った強大な民族へ従属する地位に追いやられた先住少数民族集団は、不平等な状況下で、差別や偏見にさらされながらも、自らの文化の維持継承を図り、アイデンティティを追求してきた。今学期は、北米（アメリカ、カナダ）と中国の先住少数民族を事例に、民族の文化とアイデンティティの変容を見ていきたい。課題へのフィードバックは Hoppii の掲示板で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	自己紹介（志望動機）、授業説明、教材の配布
第 2 回	講義 1	民族集団、文化とエスニシティ
第 3 回	講義 2	北米の先住民族、中国の少数民族
第 4 回	政治・経済 1	カナダ・イヌイットの経済
第 5 回	政治・経済 2	中国・オロチョンの定住と文化変容
第 6 回	文化の継承と変容 1	米国・プエブロの文化継承戦略
第 7 回	文化の継承と変容 2	台湾・プユマの文化とアイデンティティ
第 8 回	言語・教育 1	カナダ・デネーの教育
第 9 回	言語・教育 2	中国・ミャオ族のバイリンガル教育
第 10 回	観光開発と先住民 1	世界の事例から考える
第 11 回	観光開発と先住民 2	中国・西南中国のエスニック・ツーリズム
第 12 回	精神世界 1	米国・ナバホにとっての大地
第 13 回	精神世界 2	中国・ミャオ族の式年祭祀―鼓社節
第 14 回	まとめと議論	先住少数民族の文化とアイデンティティについて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。授業日程と講読する論文名のリストは初回の授業で配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テーマごとにテキストを配布

【参考書】
綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂 1993 年
綾部恒雄編『アメリカの民族：ルツボからサラダボウルへ』弘文堂 1992 年
末成道男、曽士才編『世界の先住民族：ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店 2005 年
富田虎男、スチュアートヘンリ編『世界の先住民族：ファースト・ピープルズの現在 07 北米』明石書店 2005 年
綾部恒雄編『世界の先住民族：ファースト・ピープルズの現在 10; 失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店 2007 年

【成績評価の方法と基準】
発表と討論への参加 70 %、期末レポート 30 %。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
特になし。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞文化人類学、中国民族学
＜研究テーマ＞
華南少数民族のエスニシティ、日本華僑の文化の再構築とアイデンティティ
＜主要研究業績＞
「聖なる時空の現出とその観光資源化」長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」－中国南部諸民族の分析から』風響社 2019 年
「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス―中国南部地域の分析から』風響社 2016 年
「西南中国のエスニック・ツーリズム」鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶応義塾大学出版会、2009 年
『中華民族の多元一体構造』風響社、2008 年（共訳。費孝通編著）
「貴州におけるミャオ文字の創作とバイリンガル教育」塚田誠之編『民族表象のポリティクス―中国南部の人類学・歴史学的研究』風響社、2008 年
『世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在 01 東アジア』明石書店、2005 年（共編著）

【Outline (in English)】
（Course Outline）
This course deals with the basic concepts of nation-state and ethnic minority. It also deals with the relationship between culture and indentity in ethnic groups in the United States, Canada, Mainland China and Taiwan.
（Learning Objectives）
At the end of the course, participants are expected to (1)obtain basic knowledge about indigenous people of North America and China, (2) enhance the concept and theory of ethnicity.
（Learning activities outside of classroom）
Before each class meeting, participants will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text and prepared a resume . Your required study time is two hours for each class meeting. Your study time will be two hours.
（Grading Criteria/Policy）
Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution（70 %）and term-end report（30 %）.

ARSa500G1 - 206

多言語社会論 A

大中　一彌

サブタイトル：**青の政治学Ⅰ　～現代ヨーロッパの基礎研究～**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この科目「多言語社会論 A」では、《青》という色を軸に据えつつ、ヨーロッパ地域の文化や、その背景について学んでいきます。学生の皆さんの参加を中心に組み立てられており、この地域の文化に詳しくない人でも、大学院生として研究をするのに必要な学びを体験することができます。授業を紹介する動画（約６秒）をご覧ください　https://youtube.com/shorts/8jK2B1pRnI0

【到達目標】
コースの終わりまでに、参加者の皆さんは次のことができるようになるでしょう：
1) 色彩の認識を、ただ自然の特徴を映し出す視覚の問題としてだけ考えるのではなく、「青」のように、色を分類して表現する言葉をもった文化や社会に由来する現象として考えることができる。
2) 文章や画像、映像など、人間がおこなう表現を検討する際に、単に表現を感覚的に捉えるだけでなく、そうした表現を制約していたであろう物質的な条件についても思いをめぐらせることができる。
3) ヨーロッパ地域における「青」のような、ひとつの文化要素についても、検討する時代や、社会階級が異なれば、ひとつの要素がもつ意味合いに、さまざまな違いやニュアンス、価値の逆転などが生じるという前提に立って、研究を発想することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
（ア）この科目は基本的に「対面」です。ただし、参加者の皆さんの個別の事情や状況により、Zoom を使った参加を積極的に認めています。
（イ）毎回、教員から授業内容の説明があり、これに対し、学生から質問や意見を出す時間帯があります。
（ウ）【希望者のみ】ひとりひとりの参加者が今関心をもっていることについて、話題提供した場合、加点をいたします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	初顔合わせ	授業計画の説明
2	古代ギリシア	教員の内容説明（ホメロスにおける青の不在）→ 学生からの質問・発言
3	色彩語進化説	教員の内容説明（世界の多くの言語で青は不在）→ 学生からの質問・発言
4	ニュートン	教員の内容説明（スペクトルについて考える）→ 学生からの質問・発言
5	ゲーテ	教員の内容説明（「青いガラスは対象をもの悲しく見せる」）→ 学生からの質問・発言
6	中間ふりかえり①	教員の内容説明（『ブルーは熱い色』）→ 学生からの質問・発言 ※詳細は【その他の重要事項】に記載されているリンク先をご覧ください。
7	中世初期	教員の内容説明（青の語源は「蛮族（ケルト人とゲルマン人）の遺産」）→ 学生からの質問・発言
8	青く染める	教員の内容説明（ホソバタイセイとインディゴ）→ 学生からの質問・発言
9	青と秩序①	教員の内容説明（ステンドグラスの青、マリア崇拝）→ 学生からの質問・発言
10	青と秩序②	教員の内容説明（カペー王家の青、「青地に金色の百合の花の散らし模様」の紋章）→ 学生からの質問・発言
11	中間ふりかえり②	教員の内容説明（『ベルリン・天使の詩』）→ 学生からの質問・発言
12	色彩と社会的排除①	教員の内容説明（中世ヨーロッパにおける芸人、娼婦、ユダヤ人の服装と多色嫌悪［クロモフォビア］）→ 学生からの質問・発言
13	色彩と社会的排除②	教員の内容説明（中世ヨーロッパのキリスト教社会において罪は暗い色をしていたのか）→ 学生からの質問・発言
14	まとめ	第 13 回までの内容がこなせなかった場合には予備日

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
（ア）【授業計画 / Schedule】のなかで毎回触れる内容、とくに提供された文字資料を落ち着いて読んだり、リストに掲載された映像素材を視聴したりするなどして、ふりかえりを行う。
（イ）【希望者のみ】指定する LMS（Google Classroom か学習支援システム）に、関心のある事柄にかんする投稿を行う。
（ウ）この授業の準備や復習に必要な時間は、上記（ア）（イ）などの作業に必要な時間とします。日本語やその他の言語の習熟度が異なる多様な学生が、このセミナーに参加します。そのため、一律の時間の長さは定めません。しかし、大学設置基準によれば、２単位の講義及び演習の準備・復習時間は１回につき４時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】
教科書を購入する必要はありません。

【参考書】
下記【その他の重要事項】にあるリンク先をご覧ください。

【成績評価の方法と基準】
1. 授業への参加（平常点）50%
2. 授業中における発言や質問　50%
3.【希望者のみ】授業外の準備を伴う話題提供（※）
4. 授業運営への貢献（※）
（※）項目 3. と 4. は、項目 1. と 2. の合計の枠外の形で、全体の 100%のなかで 10%程度の得点を、話題提供や貢献があった都度ごとに加算していきます。

【学生の意見等からの気づき】
・ヨーロッパ地域のさまざまな文化をめぐる学びは、必要そうではあるけれど、わかりづらそうで敬遠したくなるという方もいるようです。
・この多言語社会論 A は、「青」という、多くの人が知る色を軸とした組み立てとすることにより参加のハードルを下げ、そうした方が、必要な学びにアクセスできる場となることを目指しています。

【学生が準備すべき機器他】
資料の共有などに、Google Classroom や Hoppii を使いますので、必要な機器や情報環境はお持ちであったほうが良いでしょう。なお、市販されている映像作品の公衆送信は行いません。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や進学、就職などの相談も OK です。
・問い合わせ先や、取り上げる予定の映像作品、参考書については、次のリンク先をご覧ください【学内生のみ、要統合認証】。
https://docs.google.com/document/d/1Y45Tl-JBe9dsNAwztUWF-OiwZQg1O2qkmR1eyRk2kIA/edit?usp=sharing

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.
[Learning Objectives]
1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.
2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.
3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.
[Learning activities outside of classroom]
(a) Read the textbook assigned each session.
(b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.
(c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.
[Grading Criteria/Policy]
1. Class participation 50%
2. Remarks and questions in class 50%
3. [For those who wish to do so] Presentation of a topic involving preparation outside of class (*)
4. Contribution to class management (*)
(*) Items 3. and 4. will be added as an extra 10% outside of the total of items 1. and 2. for each topic or contribution.

ARSa500G1 － 207

多言語社会論Ｂ

大中　一彌

サブタイトル：**青の政治学Ⅱ　～現代ヨーロッパの基礎研究～**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この科目「多言語社会論 B」では、《青》という色を軸に据えつつ、ヨーロッパ地域の文化や、その背景について学んでいきます。学生の皆さんの参加を中心に組み立てられており、この地域の文化に詳しくない人でも、大学院生として研究をするのに必要な学びを体験することができます。授業を紹介する動画（約６秒）をご覧ください　https://youtube.com/shorts/Gzf8Ht3CVNo

【到達目標】
コースの終わりまでに、参加者の皆さんは次のことができるようになるでしょう：
1) 色彩の認識を、ただ自然の特徴を映し出す視覚の問題としてだけ考えるのではなく、「青」のように、色を分類して表現する言葉をもった文化や社会に由来する現象として考えることができる。
2) 文章や画像、映像など、人間がおこなう表現を検討する際に、単に表現を感覚的に捉えるだけでなく、そうした表現を制約していたであろう物質的な条件についても思いをめぐらせることができる。
3) ヨーロッパ地域における「青」のような、ひとつの文化要素についても、検討する時代や、社会階級が異なれば、ひとつの要素がもつ意味合いに、さまざまな違いやニュアンス、価値の逆転などが生じるという前提に立って、研究を発想することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
（ア）この科目は基本的に「対面」です。ただし、参加者の皆さんの個別の事情や状況により、Zoom を使った参加を積極的に認めています。
（イ）毎回、教員から授業内容の説明があり、これに対し、学生から質問や意見を出す時間帯があります。
（ウ）【希望者のみ】ひとりひとりの参加者が今関心をもっていることについて、話題提供した場合、加点をいたします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第１回	初顔合わせ	授業計画の説明
第２回	暗い色の地位向上①	14 世紀イタリア：商人たちがまとう黒服とアラブ・イスラーム世界の黒
第３回	暗い色の地位向上②	15 世紀ブルゴーニュ公と王侯貴族たち
第４回	暗い色の地位向上③	16 世紀：宗教改革と豪華さの嫌悪
第５回	フェルメールの青	17 世紀：カメラ・オブスクラとラピス・ラズリ
第６回	人工顔料の発明	18 世紀：プルシアン・ブルーと江戸時代の日本
第７回	中間ふりかえり①	『マリー・アントワネット』
第８回	青をめぐる語彙の増加とメランコリー。ロマン主義の夢	『若きヴェルテルの悩み』『青い花』
第９回	革命とナショナリズム	共和主義（青）とその敵たち（白、赤）
第 10 回	マネの青	19 世紀後半：印象派とセルリアン・ブルー、「スキャンダル」の構造
第 11 回	グローバル化する青①	「デニム」「ジーンズ」とヨーロッパのつながり。元来の労働着から、20 世紀後半になると、反体制的な文化や運動のニュアンスも
第 12 回	中間ふりかえり②	『乱暴者（あばれもの）』『理由なき反抗』『五月のミル』『万事快調』
第 13 回	グローバル化する青②	両大戦間期：欧米における黒からマリン・ブルーへの移行（制服、背広、スポーツウェアなど）
第 14 回	まとめ：青は「まとまる」色？	EU の旗。シラバス第 13 回までの内容がこなせなかった場合には予備日

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
（ア）【授業計画 / Schedule】のなかで毎回触れる内容、とくに提供された文字資料を落ち着いて読んだり、リストに掲載された映像素材を視聴したりするなどして、ふりかえりを行う。
（イ）【希望者のみ】指定する LMS（Google Classroom か学習支援システム）に、関心のある事柄にかんする投稿を行う。
（ウ）この授業の準備や復習に必要な時間は、上記（ア）（イ）などの作業に必要な時間とします。日本語やその他の言語の習熟度が異なる多様な学生が、このセミナーに参加します。そのため、一律の時間の長さは定めません。しかし、大学設置基準によれば、２単位の講義及び演習の準備・復習時間は１回につき４時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】
教科書を購入する必要はありません。

【参考書】
下記【その他の重要事項】にあるリンク先をご覧ください。

【成績評価の方法と基準】
1. 授業への参加（平常点）50%
2. 授業中における発言や質問　50%
3.【希望者のみ】授業外の準備を伴う話題提供（※）
4. 授業運営への貢献（※）
（※）項目 3. と 4. は、項目 1. と 2. の合計の枠外の形で、全体の 100%のなかで 10%程度の得点を、話題提供や貢献があった都度ごとに加算していきます。

【学生の意見等からの気づき】
・ヨーロッパ地域のさまざまな文化をめぐる学びは、必要そうではあるけれど、わかりづらそうで敬遠したくなるという方もいるようです。
・この多言語社会論 B は、「青」という、多くの人が知る色を軸とした組み立てとすることにより参加のハードルを下げ、そうした方が、必要な学びにアクセスできる場となることを目指しています。

【学生が準備すべき機器他】
資料の共有などに、Google Classroom や Hoppii を使いますので、必要な機器や情報環境はお持ちであったほうが良いでしょう。なお、市販されている映像作品の公衆送信は行いません。

【その他の重要事項】
・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
・留学や進学、就職などの相談も OK です。
・問い合わせ先や、取り上げる予定の映像作品、参考書については、次のリンク先をご覧ください【学内生のみ、要統合認証】。
https://docs.google.com/document/d/1uAZ7VueS786QiO0T_fu2OFuxQYeVaRj9AiWNK22-vVE/edit?usp=sharing

【Outline (in English)】
[Course Outline]
This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.
[Learning Objectives]

1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.
2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.
3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.
[Learning activities outside of classroom]
(a) Read the textbook assigned each session.
(b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.
(c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.
[Grading Criteria/Policy]
1. Class participation 50%
2. Remarks and questions in class 50%
3. [For those who wish to do so] Presentation of a topic involving preparation outside of class (*)
4. Contribution to class management (*)
(*) Items 3. and 4. will be added as an extra 10% outside of the total of items 1. and 2. for each topic or contribution.

SOS500G1 － 208

多民族共生論ＩＡ

松本　悟

サブタイトル：**東南アジア・日本の開発と民族**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業は「開発と民族」をテーマとし、民族概念、東南アジアの開発と民族、日本の民族問題という 3 つのモジュールで議論を行う。それを通して、民族という視点から開発や国家を捉えられるようにする。

【到達目標】
（1）民族、人種、少数民族、部族、先住民族をめぐる議論を理解し説明できる。
（2）言語、健康、教育、インフラ整備など、開発課題と民族の関係を批判的に理解し、東南アジアや日本の事例を使って論理的に自らの見解を述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しつつ、対面で行う。
■第 1 回は教員が担当し、第 2 回からは事前課題文献をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。
（1）履修者全員が事前課題文献（20 頁程度を想定）を熟読し、①「文献の簡潔な要約」（15 分以内）、②「この文献から重要だと考えた点」を 3 つ程度とそう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
（2）（1）を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
（3）必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙いを説明し、履修者の関心を聞き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	概念①民族理論の展開と課題	1980 年代の社会学の文献を通して民族という概念について考える。
3	概念②少数民族を考える座標	東南アジアの少数民族に関する文献をもとに、少数民族を考える視点について考える。
4	概念③民族・国家・言語	19 世紀以降のヨーロッパでの議論を通じて、民族と言語を繋げることの背景と問題について考える。
5	概念④先住民族の登場	開発学で先住民族が着目されるようになった歴史的背景を理解し、この概念との付き合い方を考える。
6	総合討論Ⅰ	第 2 回～第 5 回の学びをもとに、「開発と民族」を考える上で留意すべきことを議論する。
7	東南アジアの開発と民族①タイ	タイの山地民をめぐる論争を通して開発と民族について考える。
8	東南アジアの開発と民族②ラオス	北ラオスの焼き畑民の調査を通して開発と民族について考える。
9	東南アジアの開発と民族③メコンデルタ	民族が混在するメコンデルタのベトナム戦争の記憶を通して開発と民族について考える。
10	東南アジアの開発と民族④	ミャンマーを追われるロヒンギャの歴史を通して開発と民族について考える。
11	日本の民族問題①単一民族国家論	なぜ、いつから日本が単一民族国家と言われるようになったのかを通して、国と民族の関係を考える。
12	日本の民族問題②アイヌ民族の健康問題	健康の社会的決定要因からアイヌ民族差別について考える。
13	日本の民族問題③自ら語ること	とかく調査対象とされやすいアイヌ民族が自ら記録することの意味について考える。
14	総合討論Ⅱ	総合討論Ⅰ及びその後の授業を踏まえた論点を抽出し議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・課題文献は時間をかけて読み、内容を十分理解したうえで事前課題に取り組むこと。
・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
課題文献（英語、日本語）は学習支援システムを通じて配布。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
（1）事前課題・発表 60%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
（2）平常 20%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
（3）研究報告 20%

【学生の意見等からの気づき】
Jamboard のようなブレインストーミング用のアプリを使用することで、授業中の議論をスムーズにファシリテートできる。また、留学生にとっては、議論の経過を可視化することで、内容を理解しながら議論に参加できる。

【学生が準備すべき機器他】
Jamboard を使うため、対面で参加する際も、大学のネットワークに接続可能なパソコンを持参すること。

【その他の重要事項】
・少数民族が多く暮らす東南アジアの開発現場に長く関わっている教員が、自らの経験をもとに課題文献や発表者へのコメントを行う。
・履修者の人数や語学力、研究テーマによって課題文献は柔軟に対応する。また履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞国際開発研究
＜研究テーマ＞影響評価、国際組織、開発援助、NGO、メコン地域の開発と環境
＜主要研究業績＞
『国際協力と想像力』（主編者、日本評論社、2021 年）
『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）
『NGO と世界銀行』（主編者、ミネルヴァ書房、2012 年）
『人々の資源論』（分担執筆、明石書店、2008 年 9 月）
『シリーズ国際開発　生活と開発』（分担執筆、日本評論社、2005 年 9 月）
※詳しい研究業績は以下を参照のこと。
https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/detail.html?lang=ja&achievement=chosho

【Outline (in English)】
【Course outline】
The theme of this course is "development and ethnic groups" focusing on the concepts, the ethic groups in development in Southeast Asia and the history of the ethnicity issues in Japan. The course aims to discuss and analyze development from the perspectives of ethnic groups.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) Understanding and explaining the controversy over the concept of ethnic group, race, ethnic minorities, tribe and the indigenous people.
2) Express her/his opinion critically on the social/historical/interactive relations between development issues and ethnic groups.
3) Applying the cases of development in Southeast Asia and in Japan for 1) and 2) above.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, students will be expected to have read the assigned literature. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria / Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
2) Short reports on your own research: 20%
3) In class contribution: 20%

SOS500G1 － 209

多民族共生論ＩＢ

松本　悟

サブタイトル：**先住民族と国際規範ー国際文化からのまなざしー**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業は「先住民族と国際規範」をテーマとし、国際連合や国際開発機関、民間銀行の国際協会などの宣言や政策が形成された過程やその実効性を批判的に読み解きながら、先住民族など多民族が共生できる国際社会に向けた規範のあり方を考える。

【到達目標】
（1）先住民族の権利を守る国際規範の形成史を説明できる。
（2）実際の規範がどのように実務に適用されているかを批判的に分析できる。
（3）当該分野の専門的な文献を読んで要点を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しつつ、対面で行う。
■第 1 回は教員が担当し、第 2 回からは事前課題文献をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。
（1）履修者全員が事前課題文献（20 頁程度を想定）を熟読し、①「文献の簡潔な要約」（15 分以内）、②「この文献から重要だと考えた点」を 3 つ程度とそう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
（2）（1）を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
（3）必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙い、課題文献を説明し履修者の関心を聞き取る。それにしたがって授業内容を変更・確定する。発表の担当者を決める。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	先住民（族）について	多民族共生論 IA の復習を兼ねて先住民（族）という概念について考える。
3	国際開発金融機関の政策変化	国際開発金融機関の過去と現在の先住民（族）配慮政策を比較して何が変わり、何が変わらなかったかを考える。
4	先住民（族）と開発政策	国際開発金融機関が融資したプロジェクトで影響を受ける先住民（族）にどのように配慮政策（国際機関）を伝えるべきかを考える。
5	日本の開発援助と先住民族	日本の開発援助機関の先住民（族）配慮政策についてその歴史と妥当性を国際開発金融機関と比較して議論する。
6	学生による発表①	履修者による研究発表と議論。
7	先住民族の権利に関する国連宣言	2007 年の画期的な宣言の意義とそこに至るプロセスから国際規範形成の難しさを考える。
8	自由で事前に十分な情報が提供された合意（FPIC）	先住民（族）と開発を考える上で重要な FPIC の概念の成り立ちと葛藤から主体的な関与について考える。
9	企業の海外進出を支援する輸出信用機関の政策	企業を支援する公的金融機関のの環境社会配慮政策を世界銀行や ODA と比較して考える。
10	学生による発表②	履修者による研究発表と議論。
11	プロジェクトを通して考える①カンボジア	実際の開発協力プロジェクトにここまでの学びを適用して考える。1 回目はカンボジア北東部の事業。
12	プロジェクトを通して考える②フィリピン	2 回目は先住民族に関わる 2 つのタイプの NGO（プロジェクト、アドボカシー）の事業から市民社会の影響について考える。
13	プロジェクトを通して考える③ダム開発	中国などの新興ドナーの先住民（族）配慮について、世界銀行と比較して考える。
14	総合討論	ここまでの授業を横断的に捉えなおし、先住民族の権利を守るための国際規範について考える際の重要な視点について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。
・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
課題文献（英語、日本語）は学習支援システムを通じて配布。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
（1）事前課題・発表 60%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
（2）平常 20%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
（3）研究報告 20%

【学生の意見等からの気づき】
Jamboard のようなブレインストーミング用のアプリを使用することで、授業中の議論をスムーズにファシリテートできる。また、留学生にとっては、議論の経過を可視化することで、内容を理解しながら議論に参加できる。

【学生が準備すべき機器他】
Jamboard を使うため、対面で参加する際も、大学のネットワークに接続可能なパソコンを持参すること。

【その他の重要事項】
・国際金融機関の先住民族政策を含むセーフガード政策の改善を働きかける活動に NGO 職員として関わっていた教員が、その経験を発表へのコメントや補足講義に活かす。
・履修者の人数や語学力、研究テーマによって課題文献は柔軟に対応する。また履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞国際開発研究
＜研究テーマ＞影響評価、国際機構論、国際協力学
＜主要研究業績＞
『国際協力と想像力』（編著、日本評論社、2021 年）
『調査と権力』（単著、東京大学出版会、2014 年）
『NGO から見た世界銀行』（編著、ミネルヴァ書房、2013 年）
『映画で学ぶ国際関係 II』（共著、法律文化社、2013 年）
『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）
『シリーズ国際開発　生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline (in English)】
【Course Outline】
The theme of this course is indigenous people and international norms. It will enable students to critically understand the historical development and the application for the projects of international norms to protect indigenous peoples' rights in relation to not only international development cooperation but also international finance or foreign investment.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1) Explaining how the International Laws or Norms to protect the rights of the indigenous people have been developed.
2) Analyzing critically how the International Laws or Norms to protect the rights of the indigenous people have been applied for actual cases.
3) Explaining the summary of the relevant academic literatures to international laws/norms and the rights of indigenous people.
【Learning Activities】
Before each class meeting, students will be expected to have read the assigned literature. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria / Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
2) Short reports on your own research: 20%
3) In class contribution: 20%

HIS500G1 － 210

多民族共生論ⅡA

髙柳　俊男

サブタイトル：**人物でたどる日本近現代史**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
「多民族共生論Ⅱ」は、春学期と秋学期で学ぶ内容を変えている。
春学期のⅡAでは、朝鮮やアジアと関係の深い日本人個人に関する伝記的著作を読んで、アジアをめぐる近現代日本の思想や社会運動の潮流を振り返っている（秋学期のⅡBは、在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察）。
ⅡAではこれまで、鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・上田正昭・茨木のり子を扱ってきた。今年度は、黒川創による立派な伝記（大佛次郎賞受賞）が刊行されたことを踏まえ、哲学者で行動する知識人だった鶴見俊輔（1922～2015年）をあらためて取り上げたい。
①鶴見俊輔という一個人の歩んだ道や、その中で身につけた思想・ものの見方を知る
②鶴見俊輔や彼と関わりのあった他の人物を通して、近現代日本の社会・思想・文化などの潮流をたどる
③とくに、アジアとの関わりの中で、どのような社会運動・思想潮流があったかに着目する
④特定の個人に関する伝記的著作の中から追究すべき課題を見出し、調査・探求する
⑤これまでの各人の研究や関心に応じて、受講者相互間に有益な討論を成立させる

【到達目標】
上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。
具体的には、歴史の中を生きる個人の伝記的記述を読むことを通して、日本近代史をアジアとの関わりの中で再検証するための契機をつかめるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
今回のテキストは、鶴見俊輔に関する評伝である。500頁に及ぶ大冊なので、1回につきほぼ50頁ずつのペースで読み進めていく。
レポーターの報告と全員の討論により、ゼミのような形で進める。レポーターは、登場する人物や事件などの事象のうち、大切と思われる点や関心のある点を中心に事実調べをし、授業で議論すべき論点を提出すること。近年格段に検索が容易になった各種のデータベースを駆使し、関連する当時の新聞・雑誌記事などにも目配りをしながら、時代を実証的に再現するよう努めることが大事である。
受講者数が少ない場合は、負担が極端に多くなることを避け、レポーター無しで進める回も設ける。
毎回、冒頭で前回の振り返りをすることでフィードバックとし、また関連する映像を観ながら既習事項を定着させる回も、数回入れる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入（その1）	受講者各自の自己紹介、授業計画の解説、参考文献の紹介などのガイダンス
第2回	導入（その2）	年譜や各種新聞記事などを使いながら、鶴見俊輔の伝記的な事項をあらかじめ整理する
第3回	テキスト　第一章第一節～第二節	生い立ちと家族関係
第4回	テキスト　第一章第三節～第二章第二節	米国留学、佐野碩のこと
第5回	テキスト　第二章第三節～第二章第六節	日米開戦と「交換船」での帰国、応召
第6回	関連映像の上映①	鶴見俊輔の映像鑑賞①
第7回	テキスト　第三章第一節～第四節	戦後の出発、『思想の科学』の創刊
第8回	テキスト　第三章第五節～第七節	雑誌『思想の科学』での諸活動
第9回	テキスト　第四章第一節～第五節	六〇年安保闘争と「声なき声の会」、竹内好
第10回	関連映像の上映②	鶴見俊輔の映像鑑賞②
第11回	テキスト　第四章第六節～第一〇節	ベトナム戦争と「ベ平連」の活動、韓国・朝鮮との関わり
第12回	テキスト　第五章第一節～第五節	民芸運動への関心
第13回	テキスト　第五章第六節～第九節	日高六郎、アジア女性基金、老いへの向き合い方
第14回	関連映像の上映③	鶴見俊輔以外の人物の映像を観て、まとめとする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業中に指示する関連文献の講読、関連映像視聴、関連箇所への訪問など。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
黒川創『鶴見俊輔伝』（新潮社、2018年）

【参考書】
以前この授業でテキストとした鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』（新曜社、2004年）をはじめ、膨大にある鶴見俊輔の著作。
そのほか、本書のなかで登場する他の著述家たちの著書に、適宜あたってみること。

【成績評価の方法と基準】
レポーター時の報告30％、普段の授業への貢献度40％、学期末に提出する授業総括報告書30％を目安とし、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。
近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究
＜研究テーマ＞
在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。
＜主要研究業績＞
・「渡日初期の尹学準―密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文編、2004年）
・「短歌と在日朝鮮人―韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）
・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために―国際系学部の事前学習授業の実際から」（「学輪 IIDA」機関誌『学輪』第2号、2016年）
＊詳細は、「学術データベース」をご参照のこと

【Outline (in English)】
This class aims to study about the trends of contemporary Japanese thought and social movements over Asia, by reading of a biographical work on Japanese individual closely related to Korea. In this year, we read the book on Shunsuke Tsurumi.
Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 30%, in-class contribution 40%, and term-end report 30%.

HIS500G1 － 211

多民族共生論ⅡB

髙柳　俊男

サブタイトル：**朝鮮・在日朝鮮人と日本社会**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本と朝鮮半島との関係史や、在日朝鮮人（総称）が経てきた歴史を明らかにする。その際、政治史や運動史のみならず、生活史・文化史・精神史の解明にも重点を置く。
日朝関係や在日朝鮮人の事例を追うことが、広く国際関係や日本国内の多民族共生全般について考える際、示唆が得られるようにしたい。
なお、一次資料を含めた各種文献に関して、当時と現在の 2 つの視点から丁寧な読解ができるよう努める。

【到達目標】
上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。
具体的には、在日朝鮮人の経てきた歴史・文化やその日本社会との関わりを、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解し、受け売りや図式的把握ではなく、自らの言葉で具体的・実証的に語れるようになることを目指す。
また、「研究」という自らの行為を、より客観的・多面的に眺める契機を得るようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
秋学期のこの授業では、日本社会に大きな比重を占める「異民族集団」である在日朝鮮人を素材に、日本における異文化摩擦や多民族共生の姿を具体的に考察している。
2012 年度から 8 年間、戦後、各種の民族団体・政党・社会運動団体ないし日本政府関係機関などが出した朝鮮関係のパンフレット・小冊子を読み解きながら、戦後の朝鮮・在日朝鮮人をめぐる論調や運動の系譜を追う作業を行った。取り上げたテーマは、戦後初期の在日朝鮮人運動、都立時代も含めた民族学校、朝鮮戦争、北朝鮮帰国事業、祖国自由往来運動、朝鮮高校生への襲撃事件、日韓条約、外国人学校法案、出入国管理法案、金嬉老事件、日立就職差別事件と民闘連運動、韓国民主化運動、在日韓国人政治犯、丸正事件、在日朝鮮人理解のための副読本作成、などである。
定年前最後のサバティカルを経た 2021 年度からは、私自身が大学生以来、このテーマで執筆してきた各種の文章を取り上げている。研究者としての自己の歩みを俎上に載せるのは、必ずしも受講者に範を垂れる意味ではなく、その試行錯誤や紆余曲折の歩みを示すことで、同じく「研究」に携わる立場である受講生に、何らかの参考や示唆となることを期待するからである。
今年度は、導入として各種の書評を取り上げたあとは、文化面を中心に取り扱う。取り上げるそれぞれの著作は、その時代の社会潮流や研究動向の産物であり、また当然のこととしてその後のことは書いていないので、現在からみたら不十分な箇所もある。受講者は、テキスト内容を正確に読み解くとともに、それらを「当時」と「現在」という２つの文脈の中に置いて、客観的・学術的に分析していく。すなわち、なぜこのような主張がなされたか、「当時」の背景を明らかにすると同時に、「現在」の目から見た認識の問題点や、当該課題のその後の推移、さらには研究史の進展などもフォローしつつ報告するよう努めること。
授業の進め方としては、テキストをレポーターの報告と全員の討論で読んでいく。受講者が少なければレポーター無しの回も設けたい。毎回、冒頭で前回の振り返りをすることでフィードバックとし、また関連する映像を観ながら既習事項を定着させる回も、数回入れる。
対面を基本とするが、コロナ感染の推移や受講者数などにより、臨機応変に考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	受講者の自己紹介、授業計画の解説、当面のテキスト配付、など。
第 2 回	書評①	在日朝鮮人関係の概説書や通史の書評を読む。
第 3 回	書評②	特定の個人の自伝や追悼文集などを扱った書評を読む。
第 4 回	映像による学習内容の振り返り（その 1）	映像上映とそれをめぐる議論
第 5 回	書評③	在日朝鮮人の精神史を通覧した本の書評を読む。
第 6 回	書評④	在日韓国人政治犯の復権を企図した本の書評を読む。。
第 7 回	法政二高の 11・3 事件	法政二高の 11・3 事件に関する講演会の記録を読む。
第 8 回	映像による学習内容の振り返り（その２）	映像上映とそれをめぐる議論
第 9 回	在日朝鮮人と短歌	在日朝鮮人の作歌活動に関する論文を読む。
第 10 回	帰化者による文学	松本富生の本への解説を読む。
第 11 回	音楽とオペラ	音楽関係に言及した小文を読む。
第 12 回	映像による学習内容の振り返り（その３）	映像上映とそれをめぐる議論
第 13 回	日本人と在日朝鮮人の関係性	両者の連帯ないし望ましい関係を考察した文章を読む。
第 14 回	まとめ	これまでの全 13 回の授業をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
テキストに登場する文献や授業中に指示する関連文献の講読、関連映像の視聴、関連箇所への訪問など。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
その都度、紙媒体もしくは pdf で配付する。

【参考書】
『韓国朝鮮を知る事典』（平凡社）、『在日コリアン辞典』（明石書店）などの事典類

【成績評価の方法と基準】
レポーター時の報告 35 %、普段の授業への貢献度 30 %、および学期末の授業総括報告書 35 %を目安に、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。
近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生もともに意義を感じ、自身の研究にも役立つような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究、日朝関係史
＜研究テーマ＞
在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。
＜主要研究業績＞
・「渡日初期の尹学準―密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第 5 号論文編、2004 年）
・「短歌と在日朝鮮人―韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第 26 号、2007 年）
・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために―国際系学部の事前学習授業の実際から」（「学輪 IIDA」機関誌『学輪』第 2 号、2016 年）
＊詳細は、本学の「学術研究データベース」をご参照

【Outline (in English)】
This class aims to study about Japanese multicultural coexistence, by reading of my own papers on Japan-Korea relations or Korean minority in Japan.
This year, we will first cover various book reviews as an introduction, and then focus on cultural articles.
Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 35%, in-class contribution 30%, and term-end report 35%.

SOC500G1 － 213

国際ジャーナリズム論

神林　毅彦

サブタイトル：**グローバル社会におけるジャーナリズムの役割**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
国際社会が、気候危機、パンデミック、戦争、経済や貿易問題などに直面するなか、国際ジャーナリズムの役割がますます重要視されている。国際ジャーナリズムの現状、影響、問題点、対策等や報道の背景などを重点的に議論する。下記が主な内容となる。
１．気候危機など深刻化する国際問題と報道、SNS、AI の影響　２．外交とジャーナリズム　３．報道にみられる政治的、経済的、社会的影響

【到達目標】
ジャーナリズムの役割、倫理、直面する問題、また、その対策や国際報道の背景などに理解を深めることができるようになる。また、効果的な情報発信ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
国内外の問題に関する日本、海外メディアの報道を検証しながら、ジャーナリズムの本来の役割について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ジャーナリズムの役割 総論
第 2 回	メディアの特性（Ⅰ）	ニュースの構造、要素
第 3 回	メディアの特性（Ⅱ）	国際報道と国際関係ー政治的バイアス
第 4 回	メディアの特性（Ⅲ）	国際報道とメディアビジネスー経済的バイアス
第 5 回	メディアの特性（Ⅳ）	国際報道とその影響
第 6 回	メディアの特性（Ⅴ）	国際報道と倫理問題
第 7 回	国際ジャーナリズム（Ⅰ）	ジャーナリズム、プロパガンダ、PR
第 8 回	国際ジャーナリズム（Ⅱ）	戦争報道（ウクライナ等）
第 9 回	国際ジャーナリズム（Ⅲ）	環境問題、気候危機の報道
第 10 回	国際ジャーナリズム（Ⅳ）	原発事故、原発問題の報道
第 11 回	国際ジャーナリズム（Ⅴ）	世界的な経済、貿易問題の報道
第 12 回	フィールドワーク	インタビュー、取材
第 13 回	ワークショップ	ワークショップ（報道）
第 14 回	今後の国際報道	メディアの多様化、SNS、AI の影響

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
グローバルな問題に関する報道に目を向け、批評を行う。また、報道の方法、問題点などを考える。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
とくになし。担当者が資料等を配布する。

【参考書】
参考書　―　ビル・コヴァッチ、トム・ローゼンスティール「ジャーナリズムの原則」日本経済評論社　２００２年　（原書 The Elements of Journalism）。
The New York Times, The Financial Times, The Christian Science Monitor, The Guardian, BBC, Xinhua News Agency, Yonhap News, NHK、他。

【成績評価の方法と基準】
平常点 30%、授業での発表や議論 40%、レポート（内容評価）30%

【学生の意見等からの気づき】
映画監督、政治家、ジャーナリストなどとのインタビューや米国の報道番組の視聴は学生が積極的に参加していた。配付資料（日本語、英語）は理解の助けとなっているようだ。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞ジャーナリズム論
＜研究テーマ＞国際ジャーナリズム論、ジャーナリズム倫理
＜主要研究業績＞
1) “How women are banding together to change Japanese politics,” 2022, The Christian Science Monitor.
2）“In Japan, Unification Church scandal stains integrity of ruling party,” 2022, The Christian Science Monitor.
3)「原発事故が奪ったふるさとを返せ」「部落解放」2022 年 7 月号、解放出版社。

【Outline (in English)】
（Course outline）The theme of this course is theories of international journalism in the information age. This course provides opportunities for students to critique news coverage in Japanese and foreign media outlets and discuss mainly the impact of social media; journalism and diplomacy; and political, economic and social factors influencing media content.
（Learning Objectives）At the end of the course, students are expected to do the followings:
A. Have a clear understanding of the principles of journalism.
B. Have a clear understanding of the integral role of international journalism, especially in the face of increasingly serious global issues such as migration, climate crisis and the pandemic.
C. Discuss the most pressing issues facing international journalism today.
（Learning activities outside of classroom）Students will read articles in major Japanese and foreign media regularly about diplomatic and global issues.
（Grading Criteria /Policy）Grading will be determined by 30% participation, 30% presentations, 40% writing assignments.

HIS500G1 － 215

国際文化交流論ⅡA

木村　真

サブタイトル：**人の移動現象にアプローチするさまざまな方法**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、さまざまな形態の人の移動が地域社会やさまざまな人間集団に与えた影響を考察します。人の移動は近現代の世界に限られた現象ではありませんが、とくに、19 世紀以降の国民国家形成過程、都市化や近代化の過程、世界各地の紛争のなかで見られた出稼ぎ、国外・国内移住、強制的な住民交換、政治的亡命などの移動現象と人々のネットワーク、人々の帰属意識、さらに国家による政策の関係に注目します。それによって、現代社会で生じている多様な、多面的な移動現象の理解を深めることを目的とします。

【到達目標】
①国民国家形成過程の人の移動について、多面的な理解を修得すること
②住民交換政策の地域社会に与える影響についての知見を得ること
③人々の多様な形態の移動にともなう送り出し地域、受け入れ地域の人々の文化的影響に関する知見を得ること
④以上のテーマについて、とくに歴史研究や地域研究の方法を学ぶこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
近代バルカン、東欧の事例を中心に担当者が講義も行いますが、受講者全員で関連文献、論文を読み、発表をしてもらいます。また、受講者の専門地域もしくは関心を持つ地域の事例について報告発表もしてもらう予定です。各授業の内容について質問、意見をリアクションペーパーの形で提出してもらいます。なお、対面式を前提としますが、状況によってオンラインとなるかもしれません。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の進め方について
第 2 回	近代の東欧、バルカン社会（1）	東欧、バルカン地域における国民国家形成以前の人の移動
第 3 回	近代の東欧、バルカン社会（2）	帝国内の各地、ならびに帝国内外を結ぶさまざまな人の移動
第 4 回	国民国家形成過程と人の移動（1）	バルカン地域における国民国家形成のプロセス
第 5 回	国民国家形成過程と人の移動（2）	国家形成にともなう人の移動（武装勢力、軍隊、住民移動など）
第 6 回	国民国家形成過程と人の移動（3）	国家形成にともなう人の移動（出稼ぎ、季節労働など）
第 7 回	国民国家形成過程と人の移動（4）	国家形成にともなう人の移動（さまざまな移民形態）
第 8 回	国民国家形成過程と人の移動（5）	国家形成にともなう人の移動（亡命など）
第 9 回	紛争と人の移動（1）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（住民交換）
第 10 回	紛争と人の移動（2）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（強制移住）
第 11 回	紛争と人の移動（3）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（難民）
第 12 回	移動する人々の帰属意識（1）	帰属意識の構築
第 13 回	移動する人々の帰属意識（2）	重層的な帰属意識
第 14 回	人の移動をめぐる研究から得られる知見	人の移動をめぐる歴史学的な研究アプローチの可能性と限界

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
報告発表に際しては、あらかじめ、関連する文献を読み、レジュメを作成準備することが求められます。また、発表者以外の参加者も、関連する概念、事象などについて調べることを期待されます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
受講者の関心に即して決めるつもりです。さしあたり、下記の文献を素材とする予定です。テキストはこちらでコピーを準備します。
Ulf Brunnbauer(ed.) Transnational Societies, Transnational Politics. Migration in the (Post-)Yugoslav Region, 19th-20th Century. Munchen, 2009.

【参考書】
授業において指示します。さしあたり、以下のものを挙げます。
ノーマン・M・ナイマーク『民族浄化のヨーロッパ史』刀水書房、2014 年
山本明代、パブ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房、2017 年

【成績評価の方法と基準】
平常点（授業における発表、ならびに議論への参加）（50 %）、レポート課題（50 %）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】
対面式、オンラインのどちらの場合でも、なるべくコミュニケーションを取り合うよう努力したいと思います。

【担当教員の専門分野等】
〈専門領域〉バルカン近現代史、東欧地域研究
〈研究テーマ〉近現代東欧地域の強制的移動を含む人の移動、移民現象
ブルガリア史、南スラヴ地域を中心に、バルカン近現代史、東欧地域研究を専門としております。現在は授業のテーマでもある南東ヨーロッパ地域の近現代の人の移動を研究しています。また、東欧地域の史学史研究にも関心を持っております。
〈主要研究業績〉
『バルカン史と歴史教育』（共著）2008 年　明石書店
『東欧地域研究の現在』（共著）2012 年　山川出版社
『移動がつくる東中欧・バルカン史』（共著）2017 年　刀水書房

【Outline (in English)】
【Course outline 】This course introduces a historical approach for a diversity of migrations after the 19th century to students taking this course.
【Learning Objectives】At the end of the course, students are required to obtain knowledge about various patterns of migrations after the 19th century.
【Learning activities outside of classroom】Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading Criteria/Policy】Final grade will be decided based on in-class contribution（50%）, and term-end report （50%）.

ARSk500G1 － 217

比較宗教文明論

臼杵　陽

サブタイトル：**イスラームなどの一神教と日本**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
イスラム国（IS) は壊滅したものの、宗教・宗派・民族紛争は世界中で続いている。ウクライナ情勢は解決の見通しがついておらず、中東地域では大地震に襲われて先行きが見通せない状きぃおうが続いている。今後世界がどんな方向に向かうのか、見えてこない。授業では、日本社会で宗教がどんな意味をもっているのかを出発点として、世界の宗教紛争の現状、とりわけ現代中東の具体的な問題を取り上げながら 検討していく。

【到達目標】
受講者がイスラーム世界を含む現代の宗教紛争を考える際に重要な点は、欧米社会に特徴的に見られる宗教を個人の信仰として捉えるのではなく、共同体あるいは社会における機能に注目して考えることである。 文明として宗教を捉えるということはわれわれが現代社会における 宗教現象を理解するうえでも重要な視点である。宗教文明における 衝突はその教義のちがいというよりも、それぞれの宗教文明がそれぞれの歴史的過程を経て、その現在が形成されてきたということで もある。したがって、宗教文明を比較の視点から捉えるということ は、現在の状況を歴史的な観点からプロセスとして読み直す作業で もある。したがって、宗教の名の下でのテロなどをたんに野蛮で時代錯誤的としてみるのではなく、現代における歴史的過程の帰結という観点からも考え直してみるということである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
出席者数によるが、テキストを決めて演習の形式で進めていくことを原則としたい。必要に応じて、ＤＶＤなどの映像資料などを用いながら、「宗教」に関していったい何が問題なのかを含めて考えていくことにしたい。まずは「多神教」といわれる日本社会にとって「宗教」とは何かを考えていき、参加者の関心によってイスラームやユダヤ教などの「一神教」の世界へと話を移していきたい。毎回、授業に関する小レポートを書いて提出してもらう。授業冒頭で小レポートに対するフィードバックを行い、さらなる議論に活かす。
本科目は、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第１回	イントロダクション	この授業で何を学んでいくのか。
第２回	なぜ日本人は無宗教なのか？　①日本人の宗教観	近現代に注目して日本人の宗教観がいかなるものなのかについて考える。
第３回	なぜ日本人は無宗教なのか？　②明治期から太平洋戦争まで	明治期から太平洋戦争までの日本人にとっての「宗教」とは何かを考える。
第４回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ③ 戦後日本	戦後日本の日本人にとっての「宗教」の変容について考える。
第５回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ④９・１１事件後	９・１１事件後の日本人のイスラーム観を考える。
第６回	日本と中東イスラーム世界の関係①明治・大正期	明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。
第７回	明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。	戦前昭和期の日本・イスラーム関係史を考える。
第８回	日本と中東イスラーム世界の関係③大川周明の初期イスラーム研究	国家主義者の大川周明の青年期のイスラーム神秘主義研究について考える。
第９回	日本と中東イスラーム世界の関係④大川周明晩年のコーラン研究	国家主義者の大川周明の晩年のコーランの翻訳、その研究について考える。
第10回	日本人のユダヤ人観①戦前期	戦前日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第11回	日本人のユダヤ人観②戦後期	日本人のユダヤ人観②戦後期
第12回	日本人のユダヤ人観③欧米との相違	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？
第13回	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？	同じ一神教のイスラーム世界のユダヤ人観はキリスト教世界とどのように違うのか？
第14回	まとめ	総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
中東イスラーム世界、とりわけイスラーム主義あるいはテロはいつ起こるかわからない。したがって、毎日、新聞、テレビ、インターネットでニュースをチェックする習慣をつけてほしい。また、日々起こる事件の表層だけではなく、その底流に流れる事態の本質をきちんと見極める眼力を養ってほしい。 本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996 年。
島薗進『国家神道と日本人』岩波新書、2010 年。
臼杵陽『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社、2009 年。
臼杵陽『大川周明ーイスラームと天皇のはざまで』2010 年。

【参考書】
井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991 年。
井筒俊彦『コーランを読む』岩波現代文庫、2013 年。
大川周明『回教概論』ちくま学芸文庫、2008 年。
大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、2016 年。

【成績評価の方法と基準】
授業内における報告および質疑応答など積極的な姿勢をもって参加しているかによって評価する（４０％）。期末にはレポートを提出してもらう（６０％）。

【学生の意見等からの気づき】
院生諸君との授業内でのコミュニケーションによって授業のあり方を検討する機会をもつことにしたい。

【学生が準備すべき機器他】
なし

【その他の重要事項】
なし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞中東地域研究、宗教・エスニック問題
＜研究テーマ＞パレスチナ／イスラエル紛争、日本の対中東関係、とりわけ聖地問題
＜主要研究業績＞『見えざるユダヤ人』(平凡社)『原理主義』(岩波書店)、『大川周明』(青土社)、『イスラエル』(岩波新書)、『イスラームはなぜ敵とされたか』(青土社)、『アラブ革命の衝撃』(青土社)、『世界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書）、『「中東」の世界史』（作品社）、『「ユダヤ」の世界史』（作品社）など。

【Outline (in English)】
Learning activities outside of classroom
In the Muslim societies or Middle Eastern world, nobody can anticipate what would happen such as terror attacks. Therefore, students attending this class are asked to follow news in newspapers, television or internet so on. Students are also asked to improve their abilities to grab the underlying cause of what are happening every day. Preparation and review are needed for two hours as a standard.
Grading Criteria /Policy

Grading Criteria is to participate actively in reports and questions & answer in class (40%). Semester-end reports are needed to submit (60%).

FRI500G1 － 301

多文化情報空間論ＩＡ

森村　修

サブタイトル：**九鬼周造の哲学研究**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の概要
2023 年度は、九鬼周造の哲学をテーマに主要著作を読んでいく。日本の哲学、特に京都学派の中でも特異な位置にある哲学者が九鬼周造（1888-1941）である。彼は、八年もの間、フランスやドイツに滞在し、当時の最先端の哲学思想を学び、自ら体験した稀有な哲学者であった。長い在外経験もあって、西田幾多郎（1870-1945）や田邊元（1885-1961）などのいわゆる「京都学派」の哲学とは一線を画す存在でもある。その一つの例が、九鬼周造を一躍有名にした『「いき」の構造』（1930）であろう。
そこで、春学期は同書『「いき」の構造』を用いて、日本人や日本の文化における「美意識」を九鬼が哲学的に分析したかを考察する。それゆえ、本講義の目的は、同書によって分析される「いき」という現象を通じて、「日本的美意識」がどのように成立しているかを明らかにすることにある。

【到達目標】
①九鬼周造の哲学を概括することができる。
②日本的美意識について考えることができる。
③レジュメを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
(1) 基本的に「演習」形式で行う。
(2) 毎回、担当者を決め、レジュメを作成してもらう。
◆レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。
(3) 授業の進め方
①特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。
②それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	・授業の進め方についての説明 ・発表の順番等の決定
第 2 回	一　序説	・「いき」とは何か
第 3 回	二　「いき」の内包的構造	・内包性（intensioanlity）
第 4 回	三　「いき」の外延的構造	・外延性（extensionality）
第 5 回	四　「いき」の自然的表現	・「いき」の文化
第 6 回	五　「いき」の芸術的表現	・「いき」と芸術・美学
第 7 回	六　結語	・九鬼哲学における『「いき」の構造』の位置づけ
第 8 回	「風流に関する一考察」①	・風流とは何か？
第 9 回	「風流に関する一考察」②	・「もののあわれ」 ・「幽玄」
第 10 回	「情緒の系図」①	・文学における「情緒」とは何か
第 11 回	「情緒の系図」②	・歌における「情緒」
第 12 回	「情緒の系図」③	・「情緒」の哲学分析
第 13 回	九鬼哲学における文学の位置①	・九鬼周造の「文芸論」
第 14 回	九鬼哲学における文学の位置②	・文学の形而上学に向けて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を３つ以上考え、簡単な質問表を作ってくること（発表当日でよい）
・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を１つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。
・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
九鬼周造『「いき」の構造』、岩波文庫、1979 年
九鬼周造『「いき」の構造』全注釈・藤田正勝、講談社学術文庫、2003 年
『対訳『「いき」の構造』奈良博訳、講談社インターナショナル、2008 年

【参考書】
安田武・多田道太郎『「いき」の構造』を読む』、ちくま学芸文庫、2015 年
◆ その他については、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
・個別報告発表（50 %）（回数および内容による評価）
・特定質問担当（30 %）（質問内容による評価）
・討論参加（20 %）（内容による評価）
※　以上に基づいて、総合的に評価する。
※　なお、無断欠席は認めない。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。
また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。
演習とは practice（=実践）を意味しているのであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。
【受講上の注意】
本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものと心得てもらいたい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　現代哲学（現象学・構造主義以後のフランス哲学）・現代倫理学（ケアの倫理学・応用倫理学）
＜研究テーマ＞　生命体・地球を含む「生の倫理学」（例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人たちを「生・生活・人生・生命（life）」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する）
＜主要研究業績＞
1.【単著】森村修『ケアの形而上学』、大修館書店、2020 年
2.【共著】森村修「「社会政治的トラウマ」の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019 年【臨床哲学・生の倫理学】
3.【共著】森村修「アマルティア・セン――自由と正義のアイデア」、栩木玲子／法政大学国際文化学部編『〈境界〉を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016 年【現代倫理学】
4.【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題―テロルと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道: 共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013 年【現代哲学】
5.【論文】森村修「西田幾多郎の「グラマトロジー」――〈書〉の美学=感性学（エステティクス）の可能性」、東北大学哲学研究室編『思索』、2021 年（近刊）【日本哲学】
6.【論文】森村修「西田幾多郎の〈グラマトロジー〉序説――〈日本語で哲学すること〉の〈意味〉について」、法政大学国際文化学部編『異文化 21』、2020 年【日本哲学】
7.【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論（Ś ūnya-Anarchist-Communism）」――小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化 20』、2019 年【日本哲学】
8.【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) ―ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 19』論文編、2018 年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
9.【論文】森村修「パウル・ツェランという問題（1）―ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017 年【現代ドイツ・フランス哲学】
10.【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題――比較思想から間文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第 42 号、2016 年【日本哲学・Intercultural Philosophy】
11.【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1) ――パトナム「事実／価値二分法の崩壊」論を手がかりに (1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 17』論文篇、2016 年【現代倫理学】
12.【論文】森村修「「性的差異」のケア倫理学――フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第 41 号、2015 年【日本哲学・ケアの倫理学】
13.【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー (1) ――デリダの〈精神分析の哲学〉(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 16』論文篇、2015 年【現代哲学】

【Outline (in English)】
（Course outline）
The aim of this course is to help students acquire Japanese aesthetic consciousness through the phenomenon of "*iki*" analyzed in "the structure of *iki*."
（Learning Objectives）

At the end of the course, students are expected to understand the Japanese aesthetic.
（Learning activities outside of classroom）
例 1:Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following oral presentation: 50%、discussant: 30%、in class contribution: 20%.

FRI500G1 － 302

多文化情報空間論ＩＢ

森村　修

サブタイトル：**九鬼周造の哲学研究**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
授業の概要
2023 年度は、九鬼周造の哲学をテーマに主要著作を読んでいく。日本の哲学、特に日本を代表する哲学の学派である「京都学派」の中でも、単純に学派に属さない特異な位置にある哲学者が九鬼周造（1888-1941）である。彼は、八年もの間、フランスやドイツに滞在し、当時の最先端の哲学思想を学びながら、自らの当地でさまざまな体験をした稀有な哲学者であった。こうした長い在外経験もあって、「京都学派」を創始した西田幾多郎（1870-1945）や、その継承者である田邊元（1885-1961）などの哲学とは一線を画しているといってよい。九鬼の特異性を遺憾なく発揮した著作が、九鬼周造の名を一躍有名にした『「いき」の構造』（1930）であろう。
秋学期は、春学期に引き続き、九鬼周造の文献を読解していく。『「いき」の構造』とテーマが近い論考として『時間論』がある。九鬼周造は、日本人や日本の文化における「美意識」を、時間の位相で考えていた。そのとき、特に文学にあらわれる時間性に着目している。それゆえ、本講義の目的は、「時間」が文学作品（特に、和歌や俳句）の中にがどのように表現されているかを明らかにし、九鬼哲学にとって時間の哲学的意味を解明することにある。

【到達目標】
①九鬼周造の哲学を概括することができる。
②日本的美意識について考えることができる。
③哲学研究に必要なレジュメを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
（1）基本的に「演習」形式で行う。
（2）毎回、担当者を決め、レジュメを作成してもらう。
◆レジュメには、①担当箇所の翻訳と解説、②用語説明、③考察、④問題点を記載する。
（3）授業の進め方
①特定質問者を決めて、担当者の発表に対して、質問を行う。
②それ以外の授業参加者と教員を含めて質疑を行い、問題点について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	・授業の進め方についての説明 ・発表の順番等の決定
第 2 回	時間論①	Ｉ 時間の観念と東洋における時間の反復① ・仏教の時間観
第 3 回	時間論②	Ｉ 時間の観念と東洋における時間の反復② ・武士道の時間観
第 4 回	時間論③	Ⅱ 日本芸術における「無限」の表現① ・芸術における時間
第 5 回	時間論④	Ⅱ 日本芸術における「無限」の表現② ・詩歌における時間
第 6 回	時間の問題①	ベルクソンにおける時間
第 7 回	時間の問題②	ハイデッガーにおける時間
第 8 回	文学の形而上学①	・言語芸術としての文学
第 9 回	文学の形而上学②	・文学に表現される時間
第 10 回	文学の形而上学③	・時間観念の諸相
第 11 回	九鬼哲学における「文学」と「時間」①	・文学における「永遠性」①
第 12 回	九鬼哲学における「文学」と「時間」②	・永劫回帰の思想
第 13 回	九鬼哲学における「文学」と「時間」③	・九鬼周造の芸術思想と輪廻の問題
第 14 回	九鬼哲学における「文学」と「時間」④	・九鬼哲学における偶然性と時間性の関係

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・担当者は、テキストの該当箇所のレジュメを発表前日までに教員に提出すること。
・特定質問者は、テキストの該当箇所に関する質問を３つ以上考え、簡単な質問表を作ってくること（発表当日でよい）
・それ以外の参加者は、該当箇所について質問を１つは考え、当日の議論に参加する準備をすること。
・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
九鬼周造『時間論』、岩波文庫、2016 年

【参考書】
伊藤邦武『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』、ぷねうま舎、2014 年
◆ その他については、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】
・個別報告発表（50 %）（回数および内容による評価）
・特定質問担当（30 %）（質問内容による評価）
・討論参加（20 %）（内容による評価）
※　以上に基づいて、総合的に評価する。
※　なお、無断欠席は認めない。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【その他の重要事項】
最近の大学院生の中には、基本的なテキスト読解が不十分な者が見受けられる。テキストを「読む」というのは、テキストを「読み解く」のであって「読み込む」のではないことは肝に銘じるべきである。「読み込む」ということは、自分の考えをテキストに投影することであり、それは単なる勝手な解釈に過ぎない。それでは、真にテキストを「読解する」ことにならない。あくまで「虚心坦懐」にテキストに向かい、「眼光紙背を徹する」態度でテキストに向かわなければ、哲学的なテキストを「読む」ことはできない。
また、担当者はレジュメを作成する上で、引用されているテキストはもちろん、それ以外にも用語・概念などについて、徹底的に下調べを行うべきである。担当者以外に対して、教員から授業中に質問することが多々あるので、担当者と同様に準備を怠らないでほしい。
演習とは practice（=実践）を意味しているのであり、テキストを「読む」という実践は五感を十分に活用することです。授業に参加する皆さんは、哲学を「実践する」態度で臨んでもらいたい。
【受講上の注意】
本授業は、哲学・倫理学、思想の分野に深くコミットしているために、自身の思考の鍛錬を要する。テキストを読むこと、それに基づいて自分の思考を実践すること、これらの作業は哲学研究にとって必須のものと心得てもらいたい。単に、カルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアリズム研究などとは異なるので、注意を要する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　現代哲学（現象学・構造主義以後のフランス哲学）・現代倫理学（ケアの倫理学・応用倫理学）
＜研究テーマ＞　生命体・地球を含む「生の倫理学」（例えば、暴力や虐待、テロなどによるトラウマや PTSD に苦しむ人たちを「生・生活・人生・生命（life）」という観点からケアしていくためにしなければならない義務・責任を考察する）
＜主要研究業績＞
1.【単著】森村修『ケアの形而上学』、大修館書店、2020 年
2.【共著】森村修「「社会政治的トラウマ」の倫理」、牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・斎藤元紀編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019 年【臨床哲学・生の倫理学】
3.【共著】森村修「アマルティア・セン――自由と正義のアイデア」、栩木玲子／法政大学国際文化学部編『〈境界〉を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016 年【現代倫理学】
4.【共著】森村修「ヨーロッパ」という問題―テロルと放射能時代における哲学」、熊田泰章編『国際文化研究への道: 共生と連帯を求めて』所収、彩流社、2013 年【現代哲学】
5.【論文】森村修「西田幾多郎の「グラマトロジー」――〈書〉の美学=感性学（エステティクス）の可能性」、東北大学哲学研究室編『思索』、2021 年（近刊）【日本哲学】
6.【論文】森村修「西田幾多郎の〈グラマトロジー〉序説――〈日本語で哲学すること〉の〈意味〉について」、法政大学国際文化学部編『異文化 21』、2020 年【日本哲学】
7.【論文】森村修「市川白弦の「空-無政府-共同体論（Śūnya-Anarchist-Communism）」――小笠原秀実の仏教アナキズムと西谷啓治の自衛論批判をめぐって」、法政大学国際文化学部編『異文化 20』、2019 年【日本哲学】
8.【論文】森村修「技術は「ヒューマニズムを超える」か? (1) ―ハイパー・ニヒリズム時代におけるハイデガーの「技術哲学」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 19』論文編、2018 年【現代ドイツ哲学・応用倫理学】
9.【論文】森村修「パウル・ツェランという問題（1）―ガダマーとデリダの「途切れない対話」(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化』論文編、2017 年【現代ドイツ・フランス哲学】
10.【論文】森村修「思想の翻訳と文字の問題――比較思想から間文化性の比較思考へ」、比較思想学会編『比較思想研究』第 42 号、2016 年【日本哲学・Intercultural Philosophy】
11.【論文】森村修「センの「道徳哲学」(1) ――パトナム「事実／価値二分法の崩壊」論を手がかりに (1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 17』論文篇、2016 年【現代倫理学】
12.【論文】森村修「「性的差異」のケア倫理学――フェミニズム倫理学と和辻倫理学における「肉体」の問題」、『比較思想研究』第 41 号、2015 年【日本哲学・ケアの倫理学】
13.【論文】森村修「喪と／あるいはメランコリー (1) ――デリダの〈精神分析の哲学〉(1)」、法政大学国際文化学部編『異文化 16』論文篇、2015 年【現代哲学】

【Outline (in English)】
（Course outline）

The purpose of this course is to clarify how time is expressed in literary works (especially *waka* and *haiku*) and to elucidate the philosophical meaning of time for Kuki's philosophy.
（Learning Objectives）
At the end of the course, students are expected to understand the Japanese aesthetic.
（Learning activities outside of classroom）
Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.
（Grading Criteria /Policy）
Your overall grade in the class will be decided based on the following Oral presentation: 50%、discussant : 30%、in class contribution: 20%.

FRI500G1 － 305

多文化情報メディア論ＩＡ

大嶋　良明

サブタイトル：**ソーシャルメディアの調査と分析**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的な発展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上の言説に着目し、その分析手法やメディアデータとしての特徴や書物との違いについて学ぶ。

【到達目標】
この科目では現代のテキストを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会をテキストの計量的・統計的な諸特性においてとらえる。英米文化の理解と異文化理解の観点から、インターネット上の言説や文化表象に関連するメディアに着目し、その主要な分析手法やモデル化について説明できるようになる。また実際のデータに適用して分析することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
講義と輪講により行う。
・複数レポータ制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
・各自が学習内容を相互閲覧可能な形で Web に記録する。
・日本語のみならず各国語文化圏の Web テキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション: 社会と機械学習	Web から海外社会を観察することと分析の課題を学ぶ。
2	即時性の検出	時系列のテキストからキーワードの出現傾向を検出する方法を学ぶ。
3	評判分類	評判分類とは何か、ロジスティック回帰などの手法を学ぶ。
4	意味表現の学習	意味表現とは何かを理解し、そのモデル化と可視化の手法について学ぶ。
5	表現の連鎖	リンクに基づくテキストデータの分析手法を学ぶ。
6	関連性の評価	テキストから関連性の高い文書を見つける手法を学ぶ。
7	話題性の抽出	トピックモデルと言説空間の分析法を学ぶ
8	感情分析	感情分析とは何かを理解し文章から意見の抽出方法を学ぶ。
9	推薦の仕組み	予測とレコメンド手法、バスケット分析の手法を学ぶ。
10	ジャンルの抽出	テキストのジャンル分類を学ぶ。
11	クラスの分類	テキストのクラス分類の方法を学ぶ。
12	特徴抽出	大規模データからの特徴抽出の手法を学ぶ
13	特徴量の圧縮と次元削減	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ
14	学習のまとめ	第 14 回：まとめ – 総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。
予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テキストは指定しない。必要な資料は授業内で配布する。

【参考書】
全体を通じての参考書は特に指定しない。
必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【多言語環境】三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会 (2014)、ISBN: 978-4-7664-2178-1
【英米言語文化】Swiss, T., “Unspun,” NYU Press(2001), ISBN: 978-0814797594
【ネット社会の文化的特性】川上量生（監修）、「ネットが生んだ文化」、角川学術出版 (2014)、ISBN: 978-4-04-653884-0
【言語分析の手法】
(1) ボレガラ、岡崎、前原、「ウェブデータの機械学習」、講談社 (2016)、ISBN:978-4-06-152918-2
(2) Richart, W. and Coelho, L.,P.,(著)、齋藤康毅（訳）、「実践　機械学習システム」、オライリー・ジャパン（2014）、ISBN:978-4-87311-698-3

【成績評価の方法と基準】
平常点 25%
輪講 25%
課題 20%
学期末レポート 30%
を総合的に評価する。
設定した達成目標を 60 %以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
2018 年度より日本語および中文のテキストマイニングに取り組んでいる。留学生も含めてテキストの分析への履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。2021 年度は担当教員が国内研究を取得したので、2022 年度にはこの間の深化を盛り込んだ内容としたので、2023 年度もその発展的な継続を目指す。

【学生が準備すべき機器他】
授業においてノート PC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語 Python を用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集する Wiki やポートフォリオツール等の CMS を個々の研究科科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】
ジャンルキーワード：　テキストマイニング、Web、機械学習、データサイエンス、ビッグデータ、インターネット、オンラインデータ

【担当教員の専門分野等】
http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html

【担当教員の実務経験】
担当教員は IT 企業での研究所勤務において 15 年間のディジタル信号処理（特にディジタル音響、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】
This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It also covers well-known research methodology and basic analysis techniques for online text data as well as various types of media data on the Internet.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 25%
Analysis report on reading assignment: 25%
Homework: 20%
Term paper: 30%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI500G1 － 306

多文化情報メディア論ＩＢ

大嶋　良明

サブタイトル：**行動データから知る人間社会と心理**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的な発展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上のユーザの行動の分析から人間社会と心理について何が解明できるのかを学ぶ。

【到達目標】
この科目ではソーシャルメディアを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会をテキストの計量的・統計的な諸特性においてとらえる研究事例から、ネット社会に参加するユーザの行動や心理について考察できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
講義と輪講により行う。
・複数レポータ制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
・各自が学習内容を相互閲覧可能な形で Web に記録する。
・日本語のみならず各国語文化圏の Web テキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	Web の誕生、発展からソーシャルメディアの出現までを学ぶ。
2	Web とソーシャルメディア	知識源としての Web、人文社会科学におけるソーシャルメディア、Web とソシャルメディアの社会性を学ぶ。
3	ソーシャルメディアの分類	Web とソーシャルメディアの発展形態、サービスからみたソーシャルメディアの分類を学ぶ。
4	集合知と Web2.0	集合知とは何か、Web2.0 の出現とその影響、社会の変容について学ぶ。
5	情報検索	情報検索の仕組み、クローリング、インデクシング、ランキングを学ぶ。
6	情報推薦	情報推薦の仕組み、カスタマイズ、コンテンツフィルタリング、ユーザー協調について学ぶ。
7	ネットワークとしての社会	スモールワールド実験、ネットワークの評価指標、ネットワーク生成のモデルを学ぶ。
8	ソーシャルメディアによる社会分析	実ネットワークの分析と社会イベントの検出について学ぶ。
9	ソーシャルメディアにおけるユーザの心理 (1)	コミュニケーション媒体としてのソーシャルメディアの特性と利用目的とユーザー心理との関係を学ぶ。
10	ソーシャルメディアにおけるユーザの心理 (2)	ソーシャルメディアがパーソナリティ、対人関係、ユーザー行動に及ぼす影響を学ぶ。
11	Web 社会における印象形成	Web と現実世界での印象形成、SNS における印象形成について学ぶ。
12	SNS プロフィールからの印象形成	SNS プロフィール、写真画像、身体的魅力の効果などについて学ぶ。
13	ソーシャルメディアの将来	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ
14	まとめ	学習内容を総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。
予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
土方 嘉徳 (著)、「ソーシャルメディア論: 行動データが解き明かす人間社会と心理」、サイエンス社 (2020)、ISBN-13 ： 978-4781914862

【参考書】
全体を通じての参考書は特に指定しない。
必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
【多言語環境】三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会 (2014)、ISBN: 978-4-7664-2178-1
【メット社会の言語文化】Swiss, T., “Unspun,” NYU Press(2001), ISBN: 978-0814797594
【ソーシャルメディアの特性】
土方 嘉徳 (著)、「Web でつながる―ソーシャルメディアと社会/心理分析」、サイエンス社 (2018)、ISBN: 978-4781914367
藤代 裕之 (著)、「ソーシャルメディア論・改訂版 つながりを再設計する」、青弓社 (2019)、ISBN-13: 978-4787234490

【成績評価の方法と基準】
平常点 25%
輪講 25%
課題 20%
学期末レポート 30%
を総合的に評価する。
設定した達成目標を 60 %以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
2018 年度より日本語および中文のソーシャルメディア分析に取り組んでいる。留学生も含めてテキストの分析への履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。2021 年度は担当教員が国内研究を取得、2022 年度にはこの間の深化を盛り込んだ内容としたので、2023 年度もその発展的な継続を目指す。

【学生が準備すべき機器他】
授業においてノート PC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語 Python を用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集する Wiki やポートフォリオツール等の CMS を個々の研究科科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】
ジャンルキーワード：　SNS、Web、ビッグデータ、インターネット、ネット社会

【担当教員の専門分野等】
http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html

【担当教員の実務経験】
担当教員は IT 企業での研究所勤務において 15 年間のディジタル信号処理（特にディジタル音響、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】
This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It focuses on social media and covers research methods and techniques to analyze user community and behavior as networked entity.
Grading policy is as follows:
In-class contribution: 25%
Analysis report on reading assignment: 25%
Homework: 20%
Term paper: 30%
Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.
The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI500G1 － 307

多文化情報メディア論Ⅱ

重定　如彦

サブタイトル：**人工知能について学ぶ**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とする AI からはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いた AI などを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。
また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。

【到達目標】
人工知能の基礎を学ぶ。
人工知能が社会に与える影響について自分なりの考察を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
人工知能について、古典的なチェスのようなゲームにおける手法から始め、最近注目を浴びてきているディープラーニングを使った画像認識に至るまで、具体的にその仕組みについて実習を行いながら学習していく。
授業では、あらかじめ与えたテーマについて各自が発表し、その内容についての議論なども行う。
学生の理解度に応じて、実際に動作する、簡単な人工知能のプログラミングの実習などを行うことも考えている。
リアクションペーパーや課題などを課した場合、提出は学習支援システムで行う。また、そのフィードバックは必要に応じて提出後の授業の冒頭で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	人工知能の定義と歴史	授業の導入及び、人工知能の定義や歴史について学ぶ
2 回	ゲームの人工知能	○ × ゲームやチェスなど、ゲームにおける人工知能の考え方について学ぶ
3 回	ゲーム木と探索	ゲームを題材とした人工知能における、古典的な手法であるゲーム木とその探索について学ぶ
4 回	α β法と、枝刈り	ゲーム木の探索を効率的に行うための手法の一つであるα β法と、ゲーム木の枝刈について学ぶ
5 回	様々な探索手法	ゲーム木の様々な探索手法について学ぶ
6 回	評価関数	状況を数値化するための手法（評価関数）について学ぶ
7 回	機械学習とディープラーニング	機械学習の基礎とその種類について学ぶ
8 回	ニューラルネットワーク	ディープラーニングの基礎となるニューラルネットワークについて学ぶ
9 回	画像の分類	機械学習を用いた画像認識について学ぶ
10 回	ディープラーニングによる学習	人工知能がディープラーニングにおいて、どのように学習していくかについて学ぶ
11 回	機械学習における様々な手法	機械学習で用いられる様々な手法について学ぶ
12 回	人工知能の問題点	人工知能が抱える問題点や、限界などについて学ぶ
13 回	社会に与える影響	人工知能が社会に与える影響について議論する
14 回	まとめ	授業で学んだことのまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
前半は教科書を指定しないが、授業で学んだことをしっかりと復習し、授業内で提示する次回の授業のテーマについて予習する。
後半は教科書を読んで予習を行い、授業で学んだことをしっかりと復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
「ゼロから作る Deep Learning ― Python で学ぶディープラーニングの理論と実装 」　斎藤 康毅　オライリー・ジャパン
その他、必要に応じて授業内で提示する。

【参考書】
なし

【成績評価の方法と基準】
「配分」
平常点 25 %、授業内での発表や議論 50 %、レポート 25 %
「評価基準」
発表及びレポートは、読解の正確さ、発表資料またはレポートの適切さ等によって評価する

【学生の意見等からの気づき】
特にありません。

【学生が準備すべき機器他】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門分野＞情報科学
＜研究テーマ＞ユビキタスコンピューティング、分散 OS、ユーザインタフェース
＜主要研究業績＞
「デジタルミュージアムのためのキオスク型 WWW ブラウザ」、電子情報通信学会論文誌, vol.J85-D1, No.3, 2002 年 3 月
「分散ハイパーメディア OS Net-BTRON におけるハイパーメディアサービス管理機構」、情報処理学会論文誌,2001 年 6 月
A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON, In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 (Aug.2000)
Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura, "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure," 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp. 303 - 310, July
19 - 23, 2010.

【Outline (in English)】
The objectives of this class are to learn about basics of artificial intelligence, and disscuss about influence of artificial intelligence on our society.
In the first half of the class, the textbook is not specified, but students are expected to review what they have learned in the class and prepare for the next class topic to be presented in class.
In the second half, students are expected to read the textbook and review what they have learned in class. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.
Distribution.
Ordinary points: 25%, presentations and discussions in class: 50%, reports: 25%.
Evaluation Criteria
Presentations and reports will be evaluated on the basis of accuracy of reading, appropriateness of presentation materials and reports, etc.

LNG500G1 － 308

外国語実践研究 A（英語）

MARK E FIELD

備考（履修条件等）：**初回授業に出席し、受講許可を得ること**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. Most graduate students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country. Study Abroad experiences like those the faculty's undergraduates experience or when foreign students do their graduate studies outside their home countries are sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

【到達目標】
The goal of English Application is to give Post-SA students and graduate students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.
In this course, we will first look at the historical development of tourism and its expanding cultural significance. Later participating students will be asked to investigate potential areas and/or sites where tourism is developing or may be developed in the future. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	History of Tourism: World Tourism Day	Brief English lecture on UNWTO. Students take notes, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	History of Tourism: Global Code of Ethics for Tourism	Brief English lecture on UNWTO's Code of Ethics, students take notes, then discuss parts of the code and their practical meaning.
Week 4	History of Tourism: The Development of Mass Tourism	Brief English lecture on the technological and economic changes that made modern mass tourism possible. Students take notes, followed by class discussion, and Q&A session.
Week 5	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourist destinations incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 6	Tourist Markets: Transportation & Infrastructure	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 7	Tourist Markets: Accommodations	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 8	Tourist Markets: Attractions & Activities	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 9	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourism related topics incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 10	New Modes of Tourism: Cruises	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 11	New Modes of Tourism: Thematic Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 12	Business Constraints: The Economics of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 13	Social Considerations: The Environmental and Cultural Impacts of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 14	Examination/Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some course material early in the semester, and participating students will generate more course material as the semester progresses.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.
This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】
40% Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)
20% Short Presentations
40% Final Examination/Term Project
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】
OHC and PC presentations.

【その他の重要事項】
Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

【Outline (in English)】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. Most graduate students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country. Study Abroad experiences like those the faculty's undergraduates experience or when foreign students do their graduate studies outside their home countries are sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

LNG500G1 － 309

外国語実践研究 B（英語）

大野　ロベルト

備考（履修条件等）：**初回授業に出席し、受講許可を得ること**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.

【到達目標】
The goal of this course is to assist students enrolled in Graduate School to acquire a set of language skills necessary to conduct research and present its outcome in English at a suitable level.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.
During each class meeting students will give short lectures related to cultural topics followed by classroom practice of various styles of English discourse. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
第 2 回	Introduction to How to Make Presentations on Culture in English	Introduction to Specialized Vocabulary, Presentation Methods
第 3 回	Traditional Culture: Everyday Life	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, Group Discussions, and Written Assignment
第 4 回	Traditional Culture: Pre-modern cityscapes	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 5 回	Traditional Culture: Festivals	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 6 回	Traditional Culture: Performing Arts	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 7 回	Contemporary Culture: Student Life in Present-day Society	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions, and Written Assignment
第 8 回	Contemporary Culture: Sports as a Cultural Activity	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 9 回	Contemporary Culture: The Arts	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 10 回	Contemporary Culture: Language and Present-day Life	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 11 回	Comparison of Cultures: Japan and Asia	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions, and Written Assignment
第 12 回	Comparison of Cultures: Japan and America	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 13 回	Comparison of Cultures: Japan and the World	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第 14 回	Comments/Conclusion	Comments/Conclusion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
Read about Japanese culture.
The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some reference materials.

【参考書】
An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】
50% Presentation and Class Participation
50% Written Assignments
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】
Not Applicable.

【Outline (in English)】
English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.

LNG500G1 － 308

外国語実践研究 A（ドイツ語）

熊田　泰章

備考（履修条件等）：**初回授業に出席し、受講許可を得ること**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
これまでに身に付けたドイツ語の運用能力をさらに高めるためのトレーニングを行います。授業では、簡潔に文意を捉える力を養うために、また、ドイツ語の構文を正しく理解し内容を精緻に把握する力を養うために、読解の訓練をしていきます。必要に応じて会話や聞き取りの練習も行います。ドイツ語圏の生活、文化、社会、政治、経済、歴史、現在の問題など多様なテーマに関する資料を用い、内容を把握します。

【到達目標】
ドイツ語圏の生活、文化、社会、政治、経済、歴史、現在の問題など多様なテーマに関する理解を深める。ドイツ語の文章を正確に読み解く。迅速に文章の大意を把握できるようになる。ドイツ語の仕組みや、ドイツ語圏の人々の考え方を学ぶ。様々な文化との対比を通して、間文化性を理解する。
大学院生として、言語運用に関する知識と意識を涵養する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
ドイツ語圏の生活、文化、社会、政治、経済、歴史、現在の問題など多様なテーマに関する資料を用います。授業では、テクストを読み、理解を得ていく練習をします。内容を正確に読み解くとともに、そこで取り上げられているトピックについての議論も行います。教材資料は学習支援システムで提示します。
セメスターの後半では、準備したテーマに加えて、受講者の提案によって取り上げるテーマを選定し、テクストを追加していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の進め方についての解説、受講者の自己紹介とドイツ語レベルの確認。
2	2022 年の世界を振り返る;Energiekrise	2022 年に起きたことや社会情勢を振り返る。 特に Energiekrise を取り上げる。
3	ドイツ語圏を知る（1）ドイツについて	ドイツ語圏のいまを知る。ドイツの社会や政治制度について、日本とも比較しながら学ぶ。
4	ドイツ語圏を知る（2）オーストリアについて	ドイツの隣国オーストリアの政局や移民政策、難民受け入れなどにをついて概観する。
5	ドイツ語圏を知る（3）スイスについて	EU 諸外国とは大いに異なるスイスの独自性や地域性について、ニュース記事などを訳しながら情報を得る。
6	ドイツ語圏を知る（4）ポピュリズム	要人の殺害やシナゴーグ襲撃など、ドイツにおける排外主義の高まりについて考える。
7	ドイツ語圏を知る（5）ドイツの選挙制度	似ているようで大きく異なる日独の選挙制度や政治システムの相違について考察する。
8	ドイツ語圏を知る（6）ドイツと日本の交流史を知る	1861 年に修好通商条約が締結されて間もなく 160 年となる日本とドイツの関係について学ぶ。
9	ドイツ語圏を知る（7）ドイツと EU 諸国との関係	戦後ドイツが諸外国とどのような関係を築いてきたのかを知る。
10	コロナ禍	コロナ禍について確認する。
11	受講者選定テーマ１	受講者選定テーマに即したテクストを用いる。 初級・中級文法の定着を図る。
12	受講者選定テーマ２	受講者選定テーマに即したテクストを用いる。リスニングの練習を加える。
13	受講者選定テーマ３	受講者選定テーマに即したテクストを用いる。 複雑な表現を学ぶことを加える。
14	このセメスターのまとめ	学んだことを整理する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎回の授業の教材資料は、学習支援システムで事前に配布しますので、適宜予習してください。
本授業の準備学習・復習時間は各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
教科書は使用せず、適宜、教材資料を学習支援システムで提示します。

【参考書】
中島悠爾・朝倉巧・平尾浩三『ドイツ文法総まとめ』白水社、2003 年
辻朋季『もやもやを解消！ ドイツ語文法ドリル』三修社、2015 年

【成績評価の方法と基準】
大学院生として、授業での発言と参加 40 %、課題への取り組み 40 %、小テスト 20 %。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
受講者が自ら発言する授業運営とするように努めています。

【学生が準備すべき機器他】
学習支援システムで教材資料の提示と課題の提出を行います。

【担当教員の専門分野等】
担当教員の専門分野等
＜専門領域＞文化記号論、テクスト論
＜研究テーマ＞間文化性研究
＜主要研究業績＞
「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互受容－個人と文化の相互的生成と変容についての一考察」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 16 号、2015 年
「 唯一であることの相対的価値についての試論」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第 15 号、2014 年
「絵画のナラトロジー試論―知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察」熊田泰章編『国際文化研究への道―共生と連帯を求めて』彩流社、2013 年

【Outline (in English)】
【Course outline】
The aim of this course is to make progress in German language skills acquired by staying and studying in Germany, in Austria or in Switzerland and so on. The course is especially focused on reading German texts. On one hand we'll practice reading various types of texts rapidly without using dictionaries in order to be able to grasp the main points of the text. On the other hand we read more complicated texts precisely by paying attention to the structures of sentences as well as cases (nominative, genitive, dative and accusative).
【Learning Objectives】
The goals of this course are to make progress in German language skills acquired by staying and studying in Germany, Austria, Switzerland or so, and to gain a broader cultural understanding.
【Learning activities outside of classroom】
Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
【Grading Criteria /Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following: contribution to each class meeting: 40%, short reports: 40%, examinations: 20%

LNG500G1 － 309

外国語実践研究 B（中国語）

曽　士才

備考（履修条件等）：**初回授業に出席し、受講許可を得ること**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
本授業は、中級レベル以上の中国語コミュニケーション能力を有する学生が、長文の中国語を読解する力を身につけるとともに、それを質の高い日本語に翻訳する力を養うことをめざしている。

【到達目標】
本授業の到達目標は、中国の報道記事や評論文を辞書やネットを使用しながら十分に読みこなすとともに、レベルの高い日本語に仕上げることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
新華社のニュースサイトや中央電視台ニュースアプリなど各種サイトが提供する報道記事を熟読し、和訳することによって中国語の読解力、翻訳力を高めるとともに、中国の政治、経済、社会、文化、歴史について日中双方の視点からバランスよく理解を深める。
課題等へのフィードバックは Hoppii の掲示板や授業時間を通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション、論説文の基礎①	授業の進め方の説明、教材配布。『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 1 課
第 2 回	論説文の基礎②	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 2 課、第 3 課
第 3 回	論説文の基礎③	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 4 課、第 5 課
第 4 回	論説文の基礎④	『論説体中国語読解力養成講座』第Ⅱ部論説体解析講座の第 6 課、第 7 課
第 5 回	プリント 1 ①	政治・経済関係の記事を読み、日本語に訳す。
第 6 回	プリント 1 ②	翻訳と講読を続ける。
第 7 回	プリント 1 ③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第 8 回	プリント 2 ①	社会関係の記事を読み、日本語に訳す。
第 9 回	プリント 2 ②	翻訳と講読を続ける。
第 10 回	プリント 2 ③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第 11 回	プリント 3 ①	文化関係の記事を読み、日本語に訳す。
第 12 回	プリント 3 ②	翻訳と講読を続ける。
第 13 回	プリント 3 ③	翻訳と講読を完成させ、全体を振り返る。
第 14 回	読解力テストと講評	読解力テストの実施とテスト後の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
三潴正道『論説体中国語読解力養成講座』の第Ⅱ部論説体解析講座の練習問題を各自で翻訳し、第 2 回から第 4 回までの授業に備える、また、プリント教材（報道記事など）を読み、翻訳し、第 5 回から第 13 回までの授業に備えておく。本授業の準備・復習時間は、各 1～2 時間程度。

【テキスト（教科書）】
プリント教材

【参考書】
三潴正道『論説体中国語読解力養成講座－新聞・雑誌からインターネットまで』東方書店 2010 年

【成績評価の方法と基準】
第Ⅱ部論説体解析講座の練習問題の翻訳（20 %）と学期末に実施する読解力テスト（80 %）で達成度を判定する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。授業への出席は成績評価の大前提となる。

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【Outline (in English)】
（Course outline）
The aim of this course is to help students acquire not only the intermediate or higher Chinese reading comprehension, but also high level Japanese translation ability.
Students will mainly read the news or critique in Chinese newspapers or magazines.
（Learning Objectives）
At the end of the course, students should be able to efficiently read news articles and critiques using dictionaries and the Internet. Students are also expected to improve their ability to translate into high-level Japanese.
（Learning activities outside of classroom）
Before each class meeting, students will be expected to translate exercises for reading comprehension（in the 2nd to 4th classes）、to read and translate specified news articles（in the 5th to 13th classes）. Your study time will be one or two hours.
（Grading Criteria /Policy）
Final grade will be calculated according to the following process: Translation of basic exercises (20%) and reading comprehension test conducted at the end of the semester（80 %）

LNG500G1 － 308

外国語実践研究 A（ロシア語）

佐藤　千登勢

備考（履修条件等）：**初回の授業に出席し、受講許可を得ること**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
これまで培ってきたロシア語の運用能力をさらに伸ばし維持することを第一の目的とします。ロシア語の動画視聴を通して、多様な情報や知識、決まった口語表現を覚える楽しみを分かち合いましょう。

【到達目標】
ロシア語能力検定試験３級程度、またロシア連邦教育科学省が認定するロシア語検定試験（ＴＰＫＩ）基礎レベルのロシア語運用能力（聴解と会話）を身につけることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
平易なロシア語の動画を視聴しながら、文法とリスニング、会話をバランスよく学んでいきます。動画やテキストを通してロシアの文化や慣習を知ることが可能となります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第１回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。使用教材、視聴覚資料の確認。
第２回	Ｚｎａｋｏｍｓｔｖｏ	ロシア語で、ある程度複雑な自己紹介ができるようにする。動画のリスニング。
第３回	Ｚｎａｋｏｍｓｔｖｏ	ロシア語で、ある程度複雑な自己紹介ができるようにする。動画のリスニングと台詞の暗記。
第４回	Ｖ ｋａｆｅ	ロシア語で注文をできるようにする。食文化について知る。動画のリスニング。
第５回	Ｖ ｋａｆｅ	ロシア語で注文をできるようにする。食文化について知る。動画のリスニングと台詞の暗記。
第６回	Ｖ ｔｅａｔｒｅ	劇場のシートについて、観劇のマナーについて知る。動画のリスニング。
第７回	Ｖ ｔｅａｔｒｅ	劇場のシートについて、観劇のマナーについて知る。動画のリスニングと台詞の暗記。
第８回	Ｍｙ ｌｙｂｉｍ ｓｐｏｒｔ	スポーツに関する用語を確認し、観戦を楽しめるようにする。動画のリスニング。
第９回	Ｍｙ ｌｙｂｉｍ ｓｐｏｒｔ	スポーツに関する用語を確認し、観戦を楽しめるようにする。動画のリスニングと台詞の暗記。
第10回	Ｍｙ ｅｄｅｍ ｏｔｄｙｈａｔｙ	観光に必要な表現：交通機関の表現、宿泊に必要な表現を覚える。動画のリスニング。
第11回	Ｍｙ ｅｄｅｍ ｏｔｄｙｈａｔｙ	観光に必要な表現：交通機関の表現、宿泊に必要な表現を覚える。動画のリスニングと台詞の暗記。
第12回	Ｖ ｇｏｓｔｙａｘ	ロシア人の家庭に招待された時の表現、マナーを会得する。動画のリスニング。
第13回	Ｖ ｇｏｓｔｙａｘ	ロシア人の家庭に招待された時の表現、マナーを会得する。動画のリスニングと台詞の暗記。
第14回	これまでのまとめと試験	これまで培ってきた会話表現を確認する試験の実施と解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
授業で視聴した動画内容の習得のために、１回につき 1.5 時間程度の復習が必要となります。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点 80%、小テスト 20%とし、総合的に判断します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
本科目の大学院生履修者が昨年度はいなかったため、フィードバックできません。

【Outline (in English)】
● Course outline
The aim of this course is to maintain and improve listening and speaking in Russian. We would like to share the pleasure of learning more about Russian culture and customs through the short movies in Russian. The level of this course is A2(CEFR).
● Learning Objectives
The purpose is to further develop and maintain the Russian language proficiency that has been cultivated so far.
● Learning activities outside of classroom
It takes about 1.5 hours for class review.
● Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80 %) and quizzes(20 %). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

LNG500G1 － 309

外国語実践研究Ｂ（ロシア語）

佐藤　千登勢

備考（履修条件等）：**初回授業に出席し、受講許可を得ること**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
ロシア映画を２編とりあげ、その作品に関する文章をロシア語で読み、これを確認するかたちで映画作品を部分的に鑑賞します。読解力、聴解力を身につけます。読解についてはＴＰＫＩ第１レベル程度の力をつけることが可能となり、ロシアの日常や慣習、歴史について知識を得ることができるでしょう。

【到達目標】
読解力を向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めるために、ロシア映画の作品論・作品概要をロシア語で読み、これを確認するかたちでロシア映画の珠玉に触れます。そうすることで、ＴＰＫＩ第１レベルの読解力、文法力を身につけると同時に、ロシアの文化や歴史に関する知識を獲得できるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
ロシア映画の２つの作品に関する資料を講読します。みなさんの予習に基づいて進め、文法事項や文章の構造の説明を丁寧におこないます。作品に関する情報を把握した後、これを確認するために実際の映画作品を少しずつ鑑賞します。課題は授業で確認と解説を行うかたちでフィードバックします。映画『戦争と平和』（原作トルストイ）は生涯に一度は見ておきたい大作であり、『サリュート７号』は、冷戦末期、ソ連の宇宙ステーション事故をめぐる人間ドラマの珠玉です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第１回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。資料配付。
第２回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ａｎｄｒｅｊ Ｂｏｌｋｏｎｓｋｉｊについて（１）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ａｎｄｒｅｊ Ｂｏｌｋｏｎｓｋｉｊの内容について読解。映画を鑑賞。
第３回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ａｎｄｒｅｊ Ｂｏｌｋｏｎｓｋｉｊについて（２）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ａｎｄｒｅｊ Ｂｏｌｋｏｎｓｋｉｊの鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第４回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ａｎｄｒｅｊ Ｂｏｌｋｏｎｓｋｉｊについて（３）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ａｎｄｒｅｊ Ｂｏｌｋｏｎｓｋｉｊの歴史背景について読解。映画を鑑賞。
第５回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ｎａｔａｓｈａ Ｒｏｓｔｏｖａについて（１）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ｎａｔａｓｈａ Ｒｏｓｔｏｖａの内容について読解。映画を鑑賞。
第６回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ｎａｔａｓｈａ Ｒｏｓｔｏｖａについて（２）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ｎａｔａｓｈａ Ｒｏｓｔｏｖａの鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第７回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: 1812について（１）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: 1812の内容について読解。映画を鑑賞。
第８回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: 1812について（２）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: 1812鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第９回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ｐｊｅｒ Ｂｅｚｕｘｏｖについて（１）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ:Ｐｊｅｒ Ｂｅｚｕｘｏｖの内容について読解。映画を鑑賞。
第10回	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ｐｊｅｒ Ｂｅｚｕｘｏｖについて（２）	映画Ｂｏｊｎａ ｉ ｍｉｒ: Ｐｊｅｒ Ｂｅｚｕｘｏｖ鑑賞ポイントについて読解。映画を鑑賞。
第11回	映画Ｓａｌｕｔ-7について（１）	映画Ｓａｌｕｔ-7の内容について読解。映画を鑑賞。
第12回	映画Ｓａｌｕｔ-7について（２）	映画Ｓａｌｕｔ-7の反響について読解。映画を鑑賞。
第13回	映画Ｓａｌｕｔ-7について（３）	映画Ｓａｌｕｔ-7の史実と脚色について読解。映画を鑑賞。
第14回	映画Ｓａｌｕｔ-7について（４）	映画Ｓａｌｕｔ-7の読解の続き。小テストと解説。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
ロシア映画の作品に関するテクスト読解の予習に、１回につき 1.5 時間程度が必要となります。

【テキスト（教科書）】
適宜、教場で配付、もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】
教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】
平常点 80%、小テスト 20%とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
本科目の大学院生履修者が昨年度はいなかったため、フィードバックできません。

【Outline (in English)】
● Course outline
We will pick up two Russian films, read the text about the film in Russian, and watch some scenes of the film while checking the text. You will acquire reading comprehension and listening comprehension skills. You will be able to gain knowledge about Russian daily life, customs and history.
● Learning Objectives
Students will acquire the level of CEFR B1 of reading comprehension and grammar, as well as knowledge of Russian culture and history.
● Learning activities outside of classroom
It takes about 1.5 hours to prepare for reading comprehension of texts about the Russian movies.
● Grading Criteria /Policy
Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80 %)　and quizzes(20 %). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

OTR500G1 － 403

Oral Presentation

MARK E FIELD

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
Good communication skills are necessary for anyone wanting to work in an international environment. This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

【到達目標】
The goal of the course is to develop students' communications skills and confidence as public speakers. Course content will include listening and vocabulary development, as well as extensive practice in using spoken English as a presentation tool. The main theme of students' presentations will be based on their current research interests.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.
The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to actively participate in classroom activities, prepare weekly homework assignments, and review and practice at home for in-class presentations. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	Class Orientation:	Presentations and Speeches: What is the Difference?
2 回	Structure:	The Types of Language Used in an Oral Presentation
3 回	Presentation #1:	Presenting Your Background & Research Interests
4 回	Learning Strategy:	Assessing Your Skills
5 回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part I
6 回	Presentation #2:	Introducing Geographical Locations
7 回	Expanding Discourse:	Exchanging Information
8 回	Reflective Communication:	Planning Your Presentation
9 回	Presentation #3:	Presenting Books and Research Material
10 回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part II
11 回	Expanding Discourse:	Controlling Your Presentation Environment
12 回	Putting It All Together:	Talking About Main Points
13 回	Putting It All Together:	Clearing up Confusing Ideas
14 回	Final Assessment:	Presentation of Your Research Theme

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
University guidelines suggest preparation and review are around 4 hours a week for a two-credit course and around an hour a week for a one-credit course.
Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. Effective presentations depend on sufficient preparation and practice, so students will need to prepare and practice outside of class before giving their in-class presentations. 本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
The instructor will provide some reading materials related to Oral Presentation Skills.

【参考書】
Students will be expected to bring in reading materials related to their current research interests.

【成績評価の方法と基準】
30% On-going Evaluation participation, discussions etc.
20% Homework
50% In-class Presentations
** Class attendance is a course requirement.
Students are allowed no more than three absences in the academic semester.

【学生の意見等からの気づき】
Previous students were happy with this course and currently no data is available to support changing it. However, the instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】
We will use some OHC (Over Head Camera) and/or PC (Personal Computer) equipment to Present Visual Aids.

【その他の重要事項】
The Instructor Reserves the Right to change or alter this syllabus as needed.

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
異文化間コミュニケーション、西洋思想史、経済学、言語学
＜研究テーマ＞
文化の変化と西洋思想の進化
＜主要研究業績＞
国際線の代わりとなるスロートラベルは存在するか？
"Is There a 'Slow Travel' Alternative to Intercontinental Flight?" 異文化 13, 117-182, 2012/04
ピネチェト政治後のチリにおける文化的ヒーローの発見 "Discovering a Cultural Hero in Post-Pinochet" 異文化 9, 113-166, 2008/04
Communication, Culture, Diffusion and Education: The Complexity of Intercultural Communication, Learning from the Past and Looking to the Future 法政大学 教養部紀要 111/ 外国語学　外国文学, 141-166, 2000/02

SOS500G1 － 405

国際協力論

松本　悟

サブタイトル：**歴史・社会影響・人材育成・地域協力から考える**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では国際協力を文化の視点から考える。文化とは「体系的な生きるための工夫」（クラックホーン）であり、協力を必要とする背景及び協力そのものが特定集団に内在する文化によって影響を受けると同時に文化に影響を与えている。いくつかのキーワードを手がかりに文献を丁寧に読み解きながら、文化という切り口から国際協力の歴史と現状を理解する。

【到達目標】
(1) 授業で取り上げる概念や術語（テクニカルターム）について理解できる。
(2) 国際協力を国際文化の視点から論じることができる。
(3) 当該分野の文献を正しく理解し、分析的な発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しつつ、対面で行う。
■第 1 回は教員が担当し、第 2 回からは事前課題文献をもとに学生が発表・議論する。進め方は以下の通り。
（1）履修者全員が事前課題文献（20 頁程度を想定）を熟読し、①「文献の簡潔な要約」（15 分以内）、②「この文献から重要だと考えた点」を 3 つ程度とそう考えた理由、③そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
（2）（1）を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
（3）必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の説明、受講者の関心の共有に基づき、必要に応じて課題文献を変更する。
第 2 回	モジュール１：開発援助の歴史①開発援助の社会学から	第 2 次世界大戦後の開発援助の歴史を社会学的側面から考える。
第 3 回	モジュール１：開発援助の歴史②言説	日本における開発援助の言説から利己・利他の揺れ動きを考える。
第 4 回	モジュール１：開発援助の歴史③自立と依存	援助は自立を目指すことが自明のように語られるが、依存とは本当に問題なのかを考える。
第 5 回	モジュール２：開発援助の社会的影響①概観	開発援助が社会にもたらす影響を俯瞰して考える。
第 6 回	モジュール２：開発援助の社会的影響②精神的な影響	これまであまり議論されてこなかった開発に伴う精神的な影響について考える。
第 7 回	モジュール３：人を育てる①人材育成	日本型援助と言われる人材育成について考える。
第 8 回	モジュール３：人を育てる②高等教育協力	義務教育に焦点を当てやすい教育支援の中で大学などの高等教育の国際協力について考える。
第 9 回	モジュール４：メコン地域協力①地域協力の捉え方	ローカル、リージョナル、グローバルな視点で地域協力を考える。
第 10 回	モジュール４：メコン地域協力②国境貿易と経済特区	アクターによって異なる「国境を越える」意味を考える。
第 11 回	モジュール４：メコン地域協力③国境を越える NGO	リージョナルな開発に社会影響への懸念から働きかける NGO の動きについて考える。
第 12 回	モジュール５：学生による発表①グループA	履修者が自分の研究に関連した読んだ文献をもとに発表と議論を行う。
第 13 回	モジュール５：学生による発表②グループB	履修者が自分の研究に関連した読んだ文献をもとに発表と議論を行う。
第 14 回	総合討論	この授業で扱ったテーマを横断的に分析し、「国際協力と文化」について新たな視点を掘り起こす。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。
・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
課題文献（日本語、英語）は学習支援システムを通じて配布する。

【参考書】
特になし。

【成績評価の方法と基準】
（1）事前課題・発表 30%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
（2）平常点 20%（授業での積極的な発言・議論のファシリテート）
（3）授業後課題 30%（授業内容の理解度）
（4）独自文献の発表と論点提示 20%（第 12 回と第 13 回に予定している発表での文献理解度と説得力のある論点の抽出）

【学生の意見等からの気づき】
特になし

【学生が準備すべき機器他】
Jamboard を使うため、対面で参加する際も、大学のネットワークに接続可能なパソコンを持参すること。

【その他の重要事項】
・国際協力に 15 年近く携わった教員が具体的な経験に基づく事例も紹介しながらコメントする。
・履修者の研究関心によって、授業内容や課題文献を若干変更することがある。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞国際開発研究
＜研究テーマ＞影響評価、国際組織、開発援助、NGO
＜主要研究業績＞
『国際協力と想像力』（共編著、日本評論社、2021 年）
『調査と権力』（単著、東大出版会、2014 年）
『NGO と世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）
『人々の資源論』（共著、明石書店、2008 年 9 月）
『シリーズ国際開発　生活と開発』（共著、日本評論社、2005 年 9 月）

【Outline (in English)】
【Course outline】
This course aims to enable students to understand and analyze international development cooperation from the aspects of "culture". It includes the background which requires international cultural cooperation, the impacts of international cooperation on culture and the impacts of culture on international cooperation.
【Learning Objectives】
By the end of the course, students should be able to do the following:
1) to explain the concept of the technical terms covered at the class
2) to discuss international development cooperation from the viewpoints of intercultural communication.
3) to read and analyze the relevant literatures critically.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant literature assigned, and after the class, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be more than four hours for a class.
【Grading Criteria / Policy】
Your overall grade in the class will be decided based on the following
1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
2) Short reports on your own research: 20%
3) In class contribution: 20%

POL500G1 － 406

国際人権論

藤岡　美恵子

サブタイトル：**マイノリティの視点から考える人間の尊厳**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
人権は現代世界で常に重要な問題として扱われてきた。その保障は国際的に普遍的な課題として認識されており、何よりも、社会的に周縁化されてきた人々が自らの人間の尊厳を回復するための重要な手立てとして活用してきたのが人権であった。人権保障制度の発展は、そうした周縁化された立場の人々の尊厳を求める運動を契機に発展してきたと言ってよい。
しかし近代の国民国家体制とともに生まれた人権思想と制度は、その枠組みの中で排除や搾取の対象となってきた集団（先住民族、マイノリティ、移民）の尊厳を守るためには不十分、もしくは根源的な矛盾をはらむという課題に直面している。それに関係するのが植民地主義の継続である。植民地主義が終焉するどころか、新たな形態で継続しているという認識が広く支持されるようになっている現在、近代の人権保障の思想と制度が植民地主義の観点から再考されるようになっている。この課題は、ヘイトスピーチの台頭という重大な挑戦に直面する日本社会にとっても、きわめて重要な課題である。
本授業では、国際人権保障体制の発展を踏まえた上で、それが日本を含め世界のマイノリティや先住民族の人権にどのような影響をもたらしたのかを考察し、現代世界が直面する人権をめぐる危機を人種主義と植民地主義をキーワードに考えていく。とくに現代日本におけるレイシズムと多文化主義に焦点をあてる。
人権がともすれば「思いやり」の問題として考えられがちな日本において、人権が差別され周縁化されてきた集団による公正と尊厳を求める運動を契機に発展してきたことを理解することは、今後の日本社会の在り方を考えて行く上で意義が多い。どうすればあらゆる人々の尊厳を保障することができるのかを、人権を侵害されてきた／いる人々の立場から考える思考態度を身につけ、人権をめぐって生じている国際的な課題について批判的な理解・思考能力を養う。

【到達目標】
国際的な人権保障の体制や考え方がどのように進展してきたかを踏まえた上で、それが国内の人権保障とどのように関係しているかを理解し、20 世紀終盤から 21 世紀にかけての国際秩序の変容の中で、人権の保障という課題がどのような矛盾や問題を抱えているのかを、植民地主義と人種主義というキーワードを使って整理し、説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
基本的に対面授業とするが、新型コロナ感染状況によってはオンライン授業に切り替えることもある。各回の指定テキストの報告発表と討論で進める。期末に小論文形式の試験を行う。初回授業を含め、授業参加の方法、各種お知らせは学習支援システムで通知する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション ●日本における人権に関する認識：　ヘイトスピーチ、Black Lives Matter, #MeToo を手がかりに	授業内容・授業計画の説明。 人権とは何か。人権がなぜ必要なのか。人権は人間社会においてどのような位置をもつのかをあらためて考える。
第 2 回	国際人権の発展と現在 [テキスト] 阿部（2010）「国際法への眼差し――序にかえて」」	国際人権の起源と発展の跡をたどり現在的な課題を知る。
第 3 回	変容する世界と国際人権 [テキスト] 阿部（2010）第 1 章「「人間」の終焉	冷戦終結と９・１１以降、「テロリズム」という記号が動員される中での人権の後退と新たな問題を考える
第 4 回	人権と「文明化の使命」 [テキスト] 阿部（2010）第 2 章「愚かしき暴力と、国際人権の物語」	植民地主義の観点から国際人権を捉えなおし、現在の「南北問題」との関係を考える
第 5 回	ヘイトスピーチの被害と人権 [テキスト] 朴「京都朝鮮学校襲撃事件」、鄭「ヘイトスピーチ被害の非対称性」	近年問題になっているヘイトスピーチがどのような被害をもたらすのかを理解する。
第 6 回	ヘイトスピーチへの対応 [テキスト] 阿部（2019）「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」、中村「ヘイトスピーチの修復的アプローチを考える」	ヘイトスピーチに対して国際人権法がどう規制しているか、またヘイトスピーチを乗り越える一つの方法としての修復的アプローチを考える。
第 7 回	シティズンシップとレイシズム [テキスト] 梁「シティズンシップに潜むレイシズム」	シティズンシップとレイシズムがどのような関係にあるのか、日本の市民権制度・入管制度を取り上げて考える。
第 8 回	植民地主義と先住民族の自決権 [テキスト] 上村（2001）「第 3 章 近代国家日本 と「北海道」「沖縄」の植民地化」	日本によるアイヌ・沖縄への植民地支 配の歴史と先住民族の自決権を理解 する。
第 9 回	先住民族の権利に関わる世界的動向と日本の先住民族の運動の国際的展開 [テキスト] 上村（2018）「声を上げた日本の先住民族」、宮里「差別主義と民族主義の清算」	先住民族の権利を求める世界的な動向が日本の先住民族にどう影響し、日本社会にどのようなインパクトをもたらしているかを考える。
第 10 回	植民地主義の克服と「多文化共生」論 [テキスト] 藤岡「第 1 章　植民地主義の克服と「多文化共生」論」	北朝鮮バッシングを手がかりに、日本の「多文化共生」論と植民地主義の克服という課題の関係を考える。
第 11 回	「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティ [テキスト] 高谷「移民・多様性・民主主義――誰による、誰にとっての多文化共生か」、塩原「多文化共生がヘイトを超えるために」	「多文化共生」政策が移民、マイノリティへのレイシズムをなくすことにつながるのかを考える。
第 12 回	多文化主義と人権の未来 [テキスト] 阿部（2010）第 4 章「要塞の中の多民族共生／多文化主義」」	EU を例に多文化主義を標榜する社会における新たな排除の問題を考える。
第 13 回	過去の人権侵害への責任 [テキスト] 阿部（2010）第 7 章「戦後責任と和解の模索」」	現在の人権をめぐる課題が過去の重大人権侵害に対する責任と密接に関係していることを踏まえ、その責任をどのように問えるのかを考える。
第 14 回	まとめ／期末試験講評	授業のまとめと期末試験講評を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
指定テキストを事前に読み、報告者に指定された回は要約を作成し授業当日に発表する。毎回、授業でのディスカッションに備えて準備を行う。本授業の準備時間は各 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
★――指定書　要購入。その他はプリントを配布

①★阿部浩己『国際法の暴力を超えて』岩波書店、2010 年（「序に変えて」、第 1 章、第 2 章、第 4 章、第 7 章）
②阿部浩己「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー　ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019 年
③上村英明『先住民族の「近代史」―植民地主義を超えるために』平凡社、2001 年（第 3 章　「近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」）
④上村英明「声を上げた日本の先住民族」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界――わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018 年
⑤塩原良和「多文化共生がヘイトを超えるために」岩渕功一編『多様性との対話――ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021 年
⑥高谷幸「移民・多様性・民主主義――誰による、誰にとっての多文化共生か」岩渕功一編『多様性との対話――ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021 年
⑦鄭　暎惠「ヘイトスピーチ被害の非対称性」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー　ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019 年
⑧中村一成「ヘイトクライムの修復的アプローチを考える」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー　ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019 年
⑨朴　貞任「京都朝鮮学校襲撃事件」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー　ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019 年
⑩藤岡美恵子「第 1 章　植民地主義の克服と「多文化共生」論」中野憲志編『制裁論を超えて――朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007 年
⑪宮里護佐丸「差別主義と民族主義の清算」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界――わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』2018 年、昭和堂
⑫梁　英聖「シティズンシップに潜むレイシズム」『世界』2021 年 9 月号

【参考書】
①岩崎稔他『継続する植民地主義―ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005 年
②植木哲也『植民学の記憶――アイヌ差別と学問の責任』緑風出版、2015 年
③岡和田晃／マーク・ウィンチェスター『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015 年
④エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラリズム』岩波書店、1996 年
⑤小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001 年
⑥塩原良和『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義――オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』三元社、2005 年
⑦永原陽子編『「植民地責任」論―脱植民地化の比較史』青木書店、2009 年
⑧西川長夫『〈新〉植民地主義論――グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006 年
⑨ガッサン・ハージ（保苅実・塩原良和訳）『ホワイト・ネイション――ネオ・ナショナリズム批判』平凡社、2003 年
⑩バンセル、N. ほか『植民地共和国フランス』岩波書店、2011 年
⑪樋口直人『日本型排外主義―在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014 年
⑫ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌：グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』明石書店、2007 年
⑬ジョージ・M. フレドリクソン『人種主義の歴史』みすず書房、2009 年
⑭前田朗『ヘイト・クライム』三一書房労働組合、2010 年
⑮松島泰勝『琉球　奪われた骨――遺骨に刻まれた植民地主義』岩波書店、2018 年
⑯アルベール・メンミ『人種差別』法政大学出版局、1996 年
⑰テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める――アイヌが経験する近代』みすず書房、2000 年
⑱梁英聖『日本型ヘイトスピーチとは何か』影書房、2016 年

【成績評価の方法と基準】
・平常点 50%（発表、討論への参加）、期末試験 50 %
・発表については、指定テキストの内容の報告だけでなく、討論のための論点の提示を求める。
・討論への参加については、内容の理解に加え、討論の進行を助け、他の参加を促すような積極的な疑問の提示、意見表明を評価する。
・期末試験は、予め提示する２，３題の質問に対する小論文形式で行う。答案の提出日は第 13 回授業と第 14 回授業の間で後日指定（学習支援システムを通じて提出）。授業の到達目標の達成度を基準に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
本授業を受講する以前は人権問題についてよく知らなかったため、当初は内容を理解するのに精一杯だったが、次第に知的関心を刺激されるようになり、授業をとってよかったという受講生の意見を踏まえ、できるだけ具体的な問題を取り上げて関心をもてるように工夫した。

【学生が準備すべき機器他】
課題の提出、学習支援システムの利用にパソコン等が必要。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞国際人権論（マイノリティ、先住民族の権利）、NGO 論、植民
地主義と平和
＜研究テーマ＞人種主義と植民地主義
＜主要研究業績＞'Condemning J. Mark Ramseyer's Paper "On the Invention of Identity Politics: The Buraku Outcastes in Japan" ' in The Asia-Pacific Journal: Japan Focus, Volume 19, Issue 9, Number 8, 2021.
『脱「国際協力」――開発と平和構築を超えて』（新評論、2011 年）
「資源開発への異議申し立てと先住民族の自己決定権」（東日本部落解放研究所発行『明日を拓く』第 80 号、2009 年）、
「多文化共生」論」（『制裁論を超えて――朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007 年）

【Outline (in English)】
【Course outline】
The guarantee of human rights has been considered an issue of universal importance in the modern world. More importantly, socially marginalized groups of people have used human rights to restore their human dignity, contributing to the development of the international human rights systems.
However, the ideas and systems of human rights which were born along with the development of the modern nation-state system now face serious challenges: one is that they are insufficient in, or in fundamental contradictions with, the protection of human dignity of groups of people who have been excluded or exploited in that system. One factor behind it is the continuation of colonialism. The human rights protection systems are now being reconsidered from that perspective.
In this course, the participants will learn how the international human rights protection systems have developed and what impact they have brought to minority and indigenous groups in Japan and elsewhere. They will consider the challenges posed to the international human rights protection systems using racism and colonialism as key concepts. A particular focus will be put on the issues of racism and multiculturalism in present-day Japan. The course provides the participants an opportunity to acquire critical thinking abilities on the issues of human rights and the perspective of the marginalized/discriminated against in thinking about how human rights can be respected for all.
【Learning Objectives】
At the end of the course, students are expected to develop an understanding of how the international human rights system has developed and how it is related to the protection of human rights within national borders, what kind of challenges the world is facing in the changes of the international order since the end of the 20th century and how those issues can be explained with the keywords of colonialism and racism.
【Learning activities outside of classroom】
Before each class meeting, students are expected to have read the relevant text, prepare a summary (when designated) and be ready for class discussion. Your required study time is at least four hours for each class meeting.
【Grading Criteria /Policy】
Grading will be decided based on the following.
Term-end examination: 50%; In-class contribution: 50%

FRI500G1 － 407

多文化情報ネットワーク論Ａ

和泉　順子

サブタイトル：**インターネットの社会性と情報文化**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
情報科学、特にインターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術は広く深く発展し、情報基盤として様々な分野で必要不可欠なものとなっています。これらが、もともとどういう理由で設計された技術なのか、それが時代とともにどのように変わって来たのかを学び、インターネットの社会基盤としての役割や問題を討議します。

【到達目標】
この科目の到達目標は、コンピュータネットワークの仕組みの大枠を理解し、仮想空間を流通する情報の特性や理解を深めることです。知識を蓄積するだけでなく、自身のネットワークおよび関連情報技術の利用や社会性について論理的に考え討議することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
多文化情報ネットワーク論 A では、コンピュータネットワークの設計と基本的な仕組みを理解することにより、ネットワーク上での情報流通や形式を学ぶ。また、関連技術がどのように使われることを想定して設計され淘汰されてきたか、普段利用している情報サービスが技術的にどの程度安全性を確保されているものか、どの程度リスクがあるものかを、学生自身の使い方に鑑みながら確認していく。
なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。
本講義は対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更やそれにともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システムでその都度提示する。履修予定者は、必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日中に確認すること。
課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システムを通じて行うが、必要に応じて補助的に Google Classroom 等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第 2 回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第 3 回	コンピュータが情報を２進数で扱う理由、情報理論基礎	情報科学の基礎として、２進数の復習とネットワーク技術で使われる主なアルゴリズムを学ぶ。
第 4 回	情報ネットワークとインターネット	コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第 5 回	インターネットの歴史、OSI 参照モデル	インターネットの開発の理由や歴史、OSI 参照モデルを学ぶ。
第 6 回	インターネット関連技術の動向（1）	インターネットアーキテクチャの内、物理層およびデータリンク層の仕組みを学ぶ。
第 7 回	インターネット関連技術の動向（2）	インターネットアーキテクチャの内、ネットワーク層の仕組みを学ぶ。
第 8 回	情報科学技術と仕事（1）	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を仕事の観点から論じる。
第 9 回	情報科学技術と仕事（2）	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。
第 10 回	情報科学技術と安全性（1）	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を個人または組織に対するセキュリティの観点から論じる。
第 11 回	情報科学技術と安全性（2）	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。
第 12 回	個人情報とプライバシ	保護されるべき個人情報やプライバシとは、どのようなものかを学び、議論する。
第 13 回	情報セキュリティとネットワークセキュリティ	主な情報セキュリティ技術を学び、それがインターネットにどのように利用されているかを学ぶ。
第 14 回	授業のまとめ	授業での議論を振り返り、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】
必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】
課題・レポート（30 %）、議論・平常点（20 %）、最終レポート（50 %）で総合的に評価します。
コンピュータネットワークの仕組みの概略と現在のインターネットの利用形態に関連する技術への理解度をレポートで評価し、それに対する授業中の議論を出席および授業参加として評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
履修者の理解度に合わせて学習進度や項目を柔軟に変更する。

【学生が準備すべき機器他】
オンライン併用授業の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。
授業内容の議論や補足は Zoom あるいは Webex を用いる。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。
授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞　インターネット上の情報流通に関する研究
＜研究テーマ＞ 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
＜主要研究業績＞
"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】
（Course outline）
We will grasp the mechanism and the design philosophy of the internet roughly and discuss its role in real society.
（Learning Objectives）
- To understand the general framework of how computer networks work.
- To develop an understanding of the characteristics and understanding of information circulating in virtual space.
In addition to accumulating knowledge, the course aims to encourage students to think and discuss logically about the use and social aspects of their own networks and related information technologies.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

FRI500G1 － 408

多文化情報ネットワーク論Ｂ

和泉　順子

サブタイトル：**インターネットの社会性と情報文化**

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
インターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術の研究背景とその時代で最先端だったシステム設計を学ぶことで情報ネットワークの仕組みを大まかに掴み、今後のインターネットや他情報科学技術の使われ方について議論します。

【到達目標】
この科目では、コンピュータネットワークの仕組みの概略を理解し、現在利用されているインターネットの利用形態に関連する技術を知ると同時に、今後の通信技術の展望を考えることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
この科目の到達目標は、現在深く広く普及しているインターネットを始めとする情報ネットワークについて、その仕組みの概略と開発背景を掴む。その上で、情報ネットワーク技術が社会通信基盤として利用されていることに鑑み、実空間情報が仮想空間上をデジタルデータとして流通することの利便性とリスクを検討し、議論する。
　全体を通して、教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指し、問題意識の整理と解決のための意見交換をしていく。
なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。
本講義は対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更やそれにともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システムでその都度提示する。履修予定者は、必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日中に確認すること。
課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システムを通じて行うが、必要に応じて補助的に Google Classroom 等も用いる場合もある。
授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第 2 回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第 3 回	インターネットの歴史	インターネットの開発の理由や歴史、コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第 4 回	プロトコルとレイヤ（OSI 参照モデル）	OSI 参照モデル、および現状のインターネットアーキテクチャと主なプロトコルを学ぶ。
第 5 回	経路制御アルゴリズム	ネットワーク層で使われる主な経路制御アルゴリズムを学ぶ。
第 6 回	IP アドレスと名前解決	インターネットプロトコル（IP）の役割と名前解決の仕組みを学ぶ。
第 7 回	無線技術と移動体通信	無線通信技術の種類と変遷を学び、移動体通信技術について学ぶ。
第 8 回	クラウドコンピューティング	クラウドコンピューティングの仕組みを学び、利益と弊害を議論する。
第 9 回	インターネットの社会性	インターネットが共通通信基盤として社会的に普及したことによる利益と弊害を議論する。
第 10 回	日本の通信技術戦略	日本が進めてきた通信技術戦略の一部を紹介し、その効果について議論する。
第 11 回	個人情報とプライバシ	保護されるべき個人情報やプライバシとは、どのようなものかを学び、議論する。
第 12 回	ネットワーク技術の国際標準化	情報技術の普及戦略の一角を担う国際標準化について学ぶ。
第 13 回	知的財産とインターネット	知的財産権の一つである著作権を学び、国境を越えて利用されるインターネット上での振る舞いを考える。
第 14 回	情報ネットワークの抱える問題、授業のまとめ	情報ネットワークの将来性と問題について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要になります。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】
必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】
レポートまたは小テスト（30 %）、平常点（20 %）、最終レポート（50 %）で総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】
該当なし

【学生が準備すべき機器他】
オンライン授業、あるいはオンライン併用となった場合、Zoom や Webex を用いた講義となります。PC だけでなく Web カメラやマイクなど、授業参加のための PC とネットワーク環境は準備してください。

【その他の重要事項】
大学の行動方針レベルが２となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞インターネット上の情報流通に関する研究
＜研究テーマ＞ 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
＜主要研究業績＞
"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】
（Course outline）
We will grasp the mechanism of information communication technology roughly and discuss how future information technology is used in real society.
（Learning Objectives）
The goal of this course is to provide students with a general understanding of how computer networks work and the technologies relevant to the current forms of Internet use, and to consider the future prospects for communications technology.
（Learning activities outside of classroom）
You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.
（Grading Criteria /Policy）
Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

OTR500G1 － 501

国際文化研究日本語論文演習Ａ

浅利　文子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語を母語としない留学生が、日本語の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を拡充し、専門分野の修士論文を書くための基礎力を身につける。

【到達目標】
・一定分量の専門的レベルの日本語の文章の論旨を正確に読み取ることができる。
・一定分量の専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約できる。
・与えられたテーマで 800 ～ 1200 字程度の小論文を書くことができる。
・自分の修士論文についてレジュメを作成し、定められた時間で口頭発表できる。
・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて、日本語で自分の感想や意見を述べ、他の意見を良く理解して、議論することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
第１回の授業では、受講生に作文を書いてもらって日本語レベルを確認します。第 2 回では、自己紹介と修士論文のテーマについて作文し、日本語の文章力と研究テーマ等を確認します。第 3 回から第８回は、学術的・専門的な日本語の文章を課題文として配布し、正確に読めるよう確認した後、指示された字数で要約文を書く練習をします。提出された各人の要約文は、すべて添削して返却します。その後、課題文のテーマについて、全員が感想や意見を出し合い討議します。以上の要約練習により、文章の論理的展開の筋道を読み取ることから、論文の論理的構成の重要性を学びます。第９回から第１２回は、小論文を書く練習をします。400 字から始め、1200 字程度の小論文を書くことを目標に練習しつつ、論理展開や段落構成の基礎を学びます。提出された小論文は、すべて添削して返却します。第 13 回と第 14 回は、必要に応じて、7 月の概要発表会の準備をします。レジュメの書き方を学び、口頭発表の練習をします。学習内容・方法や難易度は、受講する学生の日本語の水準や希望等に合わせて適宜変更します。
春学期は、対面授業を中心に行いますが、コロナウィルス感染状況等に応じて随時オンライン授業に切り替えることもあります。学習支援システムを利用する際は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明をします。各回の授業の内容に応じて、受講生が積極的に意見交換を行う時間を設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション 自己紹介スピーチ・作文	授業の目的と方針、学び方の説明 受講者の日本語レベル確認、受講者の希望確認
第 2 回	自己紹介と修士論文のテーマについて作文する	前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、受講生の修士論文のテーマを作文によって確認
第 3 回	課題文①	【演習１】前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①の音読確認、要約文の書き方を講義、要約文を書き提出
第 4 回	課題文②	【演習２】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①について討議、課題文②音読確認、要約文を書き提出
第 5 回	課題文③	【演習３】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文②について討議、課題文③音読確認、要約文を書き提出
第 6 回	課題文④	【演習４】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文③について討議、課題文④音読確認、要約文を書き提出
第 7 回	課題文⑤	【演習５】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文④について討議、課題文⑤音読確認、要約文を書き提出
第 8 回	課題文⑤、まとめ	【演習６】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文⑤について討議、要約文を書くことで何が学べたか自己評価した後、感想や考えを出し合いまとめる。
第 9 回	小論文を書く①	【演習７】小論文のテーマ設定・論理展開・段落構成等について講義、次回の小論文テーマ指示
第 10 回	小論文を書く②	【演習８】小論文を書き提出
第 11 回	小論文を書く③	【演習９】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、次回の小論文テーマ指示
第 12 回	小論文を書く④	【演習 10】小論文を書き提出
第 13 回	小論文を書く⑤、まとめ 概要発表会のレジュメ作成準備	【演習 11】前回の小論文を添削し返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、概要発表会のレジュメの書き方について講義
第 14 回	概要発表会の口頭発表練習	【演習 12】レジュメ提出、概要発表会の口頭発表練習、感想・意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認すること。
③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
『大学・大学院　留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法　調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】
平常点 50 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物 50 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】
・毎回、日本語で発表し、日本語の文章を書く機会を設けます。
・提出された文章は全て添削して返却し、必要に応じて説明をします。
・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】
なし

【その他の重要事項】
秋学期の国際文化研究日本語論文演習Ｂを継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞近現代日本文学
＜研究テーマ＞村上春樹ほか

＜主要研究業績＞『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 － 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第４輯』『村上春樹研究叢書第 5 輯』『村上春樹研究叢書第 6 輯』『村上春樹研究叢書第７輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】
Foreign students whose mother tongue is not Japanese read logical sentences written in Japanese and practice writing in Japanese to improve their basic ability to write their own master's thesis in Japanese.
【Grading criteria】
attitude toward class 50 %（attendance state, positive attitude）
assignment 50 %

OTR500G1 － 502

国際文化研究日本語論文演習Ｂ

浅利　文子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語を母語としない留学生が、専門分野の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を向上させ、専門分野の修士論文を書くための基礎力を拡充する。

【到達目標】
・専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約し、口頭で発表できる。
・自分の修士論文のテーマに関して、4000 字程度の小論文を書くことができる。
・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて議論できる。（発言者ひとりひとりの意見を正確に聴き取り、テーマの方向性に沿った論理的な意見を述べたり問題点を指摘したりして、テーマを深化し発展させることができる）

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
第 1 回の授業で、各受講生は自分の研究テーマについてスピーチします。第 2 回の授業では、全員が自分の研究テーマについてまとめた作文を提出し、添削を受けた後、音読発表します。第３回から第７回までは、各受講生が自分の研究テーマに沿った書籍や文献から一定の長さの日本語の文章を抜粋して全員に配布し、その要約を書いて発表し、全員でその内容や研究テーマとの関連性について感想・意見を出し合います。第８回から第１３回は、各自の研究テーマに沿った小論文を書きます。1200 字程度から書き始め、第 13 回では、4000 字程度の小論文を完成させます。第 14 回は、完成した 4000 字の小論文を口頭発表し、相互評価をします。提出された要約文・小論文は、すべて添削して返却します。学習内容・方法や速度・難易度は、受講生の水準に合わせて適宜変更します。対面授業を中心に行いますが、コロナウィルス感染状況に応じて随時オンライン授業を行うこともあります。学習支援システムを利用する際は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明をします。各回の授業の内容に応じて、受講生が積極的に意見交換を行う時間を設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション・研究テーマについてスピーチ	演習の目的と方針の説明、受講者の日本語レベル、研究テーマ、受講者の希望確認
第 2 回	作文「私の研究テーマ」	【演習１】作文後、添削された作文を各人が音読して発表し、添削内容について質疑応答
第 3 回	課題文①	【演習２】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文①について討議
第 4 回	課題文②	【演習３】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文②について討議
第 5 回	課題文③	【演習４】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文③について討議
第 6 回	課題文④	【演習５】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文④について討議
第 7 回	課題文⑤	【演習６】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文⑤について討議
第 8 回	小論文を書く①	【演習７】小論文を書く際のテーマ設定・論理展開・段落設定等について講義
第 9 回	小論文を書く②	【演習８】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 10 回	小論文を書く③	【演習９】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 11 回	小論文を書く④	【演習 10】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 12 回	小論文を書く⑤	【演習 11】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 13 回	小論文を書く⑥	【演習 12】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第 14 回	小論文を書く⑦（まとめ）	【演習 13】4000 字の小論文を口頭発表・相互評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をすること。
②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認し、正確に音読できるよう練習すること。
③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意すること。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
『大学・大学院　留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法　調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】
平常点 50 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物 50 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】
・毎回、日本語の論理的文章を書き、日本語で発表する機会を設けます。
・提出された文章は全て添削して返却します。
・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】
各自、パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】
来年度の国際文化研究日本語論文演習Ｃの履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞近現代日本文学
＜研究テーマ＞村上春樹ほか
＜主要研究業績＞『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 － 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第４輯』『村上春樹研究叢書第 5 輯』『村上春樹研究叢書第 6 輯』『村上春樹研究叢書第７輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】
Foreign students whose mother tongue is not Japanese practice writing in Japanese to improve their ability to write master's thesis on each specialized field.

【Grading criteria】
attitude toward class 50 %（attendance state, positive attitude）
assignment 50 %

OTR500G1 － 505

国際文化研究日本語論文演習Ｃ

浅利　文子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
日本語を母語としない留学生が、日本語で修士論文を書き始める準備を整え、実際に執筆しながら論文の書き方や日本語表現について学ぶ。

【到達目標】
・修士論文完成までのスケジュール（概要発表会・中間発表会等）を確認する。
・従来の修士論文の体裁（構成・分量・注の付け方・図表の入れ方・参考資料の掲載方法・文体・印字体等）を確認する。
・修士論文の主題と副題を決める。
・修士論文の構成（章立て・各章の分量・各章の内容と節の数やその分量）を決める。
・目次を書く。
・概要発表会の準備をする（レジュメの準備、口頭発表・質疑応答の練習等）
・修士論文の序論、あるいは第 1 章を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
最初の 7 回で修士論文を書き始めるための具体的な準備を行い、その後、実際に修士論文を書き始めます。準備の段階では、まず、今まで国際文化研究科に提出された修士論文の体裁を確認し、各自のテーマに従って修士論文の構想を具体的にまとめます。次に、7 月末の概要発表会、10 月末の中間発表会のレジュメの書き方を学び、口頭発表・質疑応答の練習をすることによって、修士論文の構想・テーマを具体化し深化させます。第 8 回からは、各自修士論文の序論あるいは第 1 章を書き始めます。段落と段落、節と節がそれぞれ文章としてのまとまりを持ち、論理的構成の下で互いに関連し合うことを学ぶことを目標として、一つの章を完成させることを目標とします。受講生の希望と実態に合わせて内容を変更する可能性があります。
対面授業を中心として行いますが、コロナウィルス感染状況に応じて随時オンライン授業を行います。オンライン授業では、学習支援システムにおいて、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明を加えます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	・授業の目的と内容・方針の説明 ・各受講生の修士論文のテーマと進捗状況の確認
第 2 回	従来の修士論文の体裁を確認する	・構成、分量、注の付け方、図表の入れ方、参考資料の掲載方法、文体、印字体等
第 3 回	概要発表会のレジュメの書き方	・概要発表会のレジュメの書き方について講義 ・レジュメを書く
第 4 回	レジュメ提出・添削	・各人のレジュメを添削 ・質疑応答
第 5 回	レジュメに基づいて口頭発表の練習①	・声の出し方、話し方 ・時間の使い方 ・質疑応答の対応の仕方
第 6 回	レジュメに基づいて口頭発表の練習② スケジュール確認	・概要発表会、中間発表会、学会発表等のスケジュールを確認
第 7 回	修士論文の主題・副題、論文構成を確認する	・主題と副題、章立てと分量配分を書いて提出
第 8 回	修士論文を書く①	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出
第 9 回	修士論文を書く②	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 10 回	修士論文を書く③	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 11 回	修士論文を書く④	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 12 回	修士論文を書く⑤	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 13 回	修士論文を書く⑥	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第 14 回	修士論文を書く⑦	・序論あるいは第 1 章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
修士論文の内容については、随時指導教官から指導を受けてください。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
なし

【参考書】
『大学・大学院　留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法　調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】
平常点 50 パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物 50 パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】
修士論文を書き始める準備をし、実際に論文を書き進めながら、論文の論理的構成や日本語表現について、逐次アドバイス・添削を受けることができます。修士論文執筆のペースメーカーとして利用できます。

【学生が準備すべき機器他】
各自パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】
国際文化研究日本語論文演習Ａ・Ｂ受講者が継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞近現代日本文学
＜研究テーマ＞村上春樹ほか
＜主要研究業績＞『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ 2008 － 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第４輯』『村上春樹研究叢書第 5 輯』『村上春樹研究叢書第 6 輯』『村上春樹研究叢書第７輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】
This class help and give some advice to foreign students whose mother tongue is not Japanese to write their master's thesis in Japanese.
【 Grading criteria】
attitude toward class 50 %（attendance state, positive attitude）
assignment 50 %

OTR600G1 － 503

修士論文演習Ａ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します．

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる．
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ，論文執筆，口頭発表について指導します．論文の骨子を 7 月の構想発表会で発表し，広くコメントを受けることを当座の目標とします．修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図って進めていきます．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は，修士１年の研究成果を基に，指導教員と研究計画を練る．
2	研究計画の検討	履修者は，修士１年の研究成果を基に，引き続き指導教員と研究計画を練る．
3	論文執筆指導①	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，春学期の研究計画を検討する．
4	論文執筆指導②	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，春学期の研究計画を引き続き検討する．
5	研究発表準備①	履修者は，構想発表会を意識し，指導教員と具体的な春学期の研究について議論する．
6	研究発表準備②	履修者は，構想発表会を意識し，指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する．
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，指導教員と議論する．
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，指導教員と議論を重ねる．
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，引き続き指導教員と議論を重ねる．
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備．履修者は，修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる．必要な場合には，発表会のリハーサル等も行う．
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ，具体的な春学期の研究について指導教員と議論する．
12	論文執筆指導③	履修者は，構想発表会でのコメントを受けて，指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する．
13	論文執筆指導④	履修者は，構想発表会でのコメントを受けて，指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を，更に議論・検討する．
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し，指導教員とともに，夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み，必要な関連文献の精読，学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください．

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します．

【参考書】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します．

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%），構想発表会での評価（35%），それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%），総合的に評価します．
この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より，授業，学習支援システム等を通じて，適宜情報共有されます．

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web，インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので，それに合わせた機器を用意してください．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise your ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 504

修士論文演習Ｂ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します.

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる.
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ，論文執筆，口頭発表について指導します．論文の骨子を 11 月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを，当座の目標とします．修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます.
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は，修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する.
2	研究計画の検討	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する.
3	論文執筆指導①	履修者は，修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し，指導教員に提出，議論する.
4	論文執筆指導②	履修者は，指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを，指導教員と引き続き議論・検討する.
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する.
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する.
7	研究発表準備③	履修者は，指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる.
8	研究発表準備④	履修者は，指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する.
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し，確認する．必要な場合は，発表会のリハーサルも行う.
10	研究発表会の振り返り	履修者は，中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し，指導教員と議論・確認する.
11	論文執筆指導③	履修者は，修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し，それをもとに指導教員と議論する.
12	論文執筆指導④	履修者は，指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し，最終稿の目処を立てる.
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに，提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する.
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う．履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み，必要な関連文献の精読，学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます.
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください.

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【参考書】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%），中間発表会での評価（35%），それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み（35%）で，総合的に評価します.
この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より，授業，学習支援システム等を通じて，適宜情報共有されます.

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web，インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので，それに合わせた機器を用意してください.

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise your ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 503

修士論文演習 A

大嶋　良明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します.

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる.
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ，論文執筆，口頭発表について指導します．論文の骨子を 7 月の構想発表会で発表し，広くコメントを受けることを当座の目標とします．修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図って進めていきます.
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は，修士 1 年の研究成果を基に，指導教員と研究計画を練る.
2	研究計画の検討	履修者は，修士 1 年の研究成果を基に，引き続き指導教員と研究計画を練る.
3	論文執筆指導①	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，春学期の研究計画を検討する.
4	論文執筆指導②	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，春学期の研究計画を引き続き検討する.
5	研究発表準備①	履修者は，構想発表会を意識し，指導教員と具体的な春学期の研究について議論する.
6	研究発表準備②	履修者は，構想発表会を意識し，指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する.
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，指導教員と議論する.
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，指導教員と議論を重ねる.
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，引き続き指導教員と議論を重ねる.
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備．履修者は，修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる．必要な場合には，発表会のリハーサル等も行う.
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ，具体的な春学期の研究について指導教員と議論する.
12	論文執筆指導③	履修者は，構想発表会でのコメントを受けて，指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する.
13	論文執筆指導④	履修者は，構想発表会でのコメントを受けて，指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を，更に議論・検討する.
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し，指導教員とともに，夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み，必要な関連文献の精読，学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます.
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください.

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【参考書】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%），構想発表会での評価（35%），それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%），総合的に評価します．この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より，授業，学習支援システム等を通じて，適宜情報共有されます.

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web，インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので，それに合わせた機器を用意してください.

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise your ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 504

修士論文演習 B

大嶋　良明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します.

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる.
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ，論文執筆，口頭発表について指導します．論文の骨子を 11 月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを，当座の目標とします．修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます.
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は，修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する.
2	研究計画の検討	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する.
3	論文執筆指導①	履修者は，修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し，指導教員に提出，議論する.
4	論文執筆指導②	履修者は，指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを，指導教員と引き続き議論・検討する.
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する.
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する.
7	研究発表準備③	履修者は，指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる.
8	研究発表準備④	履修者は，指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する.
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し，確認する．必要な場合は，発表会のリハーサルも行う.
10	研究発表会の振り返り	履修者は，中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し，指導教員と議論・確認する.
11	論文執筆指導③	履修者は，修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し，それをもとに指導教員と議論する.
12	論文執筆指導④	履修者は，指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し，最終稿の目処を立てる.
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに，提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する.
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う．履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み，必要な関連文献の精読，学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます.
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください.

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【参考書】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%），構想発表会での評価（35%），それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%），総合的に評価します．この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より，授業，学習支援システム等を通じて，適宜情報共有されます.

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web，インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので，それに合わせた機器を用意してください.

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise your ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 503

修士論文演習 A

LETIZIA GUARINI

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を 7 月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図って進めていきます。
履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士 1 年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士 1 年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。
大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】
履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】
授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2023 年度の授業は対面形態が基本となりま。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up their Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1. to write up their own MA thesis/research paper.
2. to present the contents and significance of their MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Students are required to study, read, and actively present their ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 504

修士論文演習 B

LETIZIA GUARINI

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を 11 月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます。
履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出，議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。
大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】
履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】
授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2023 年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up their Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
By the end of the course, students should be able to do the followings:
1. to write up their own MA thesis/research paper.
2. to present the contents and significance of their MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Students are required to study, read, and actively present their ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 503

修士論文演習 A

佐藤　千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します.

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる.
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ，論文執筆，口頭発表について指導します．論文の骨子を 7 月の構想発表会で発表し，広くコメントを受けることを当座の目標とします．修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」と連携を図って進めていきます.
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は，修士 1 年の研究成果を基に，指導教員と研究計画を練る.
2	研究計画の検討	履修者は，修士 1 年の研究成果を基に，引き続き指導教員と研究計画を練る.
3	論文執筆指導①	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，春学期の研究計画を検討する.
4	論文執筆指導②	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，春学期の研究計画を引き続き検討する.
5	研究発表準備①	履修者は，構想発表会を意識し，指導教員と具体的な春学期の研究について議論する.
6	研究発表準備②	履修者は，構想発表会を意識し，指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する.
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，指導教員と議論する.
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，指導教員と議論を重ねる.
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの構想について，引き続き指導教員と議論を重ねる.
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備．履修者は，修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる．必要な場合には，発表会のリハーサル等も行う.
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ，具体的な春学期の研究について指導教員と議論する.
12	論文執筆指導③	履修者は，構想発表会でのコメントを受けて，指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する.
13	論文執筆指導④	履修者は，構想発表会でのコメントを受けて，指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を，更に議論・検討する.
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し，指導教員とともに，夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み，必要な関連文献の精読，学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます.
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください.

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【参考書】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%），構想発表会での評価（35%），それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%），総合的に評価します． この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より，授業，学習支援システム等を通じて，適宜情報共有されます.

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web，インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので，それに合わせた機器を用意してください.

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise your ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 － 504

修士論文演習Ｂ

佐藤　千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します.

【到達目標】
1．修士論文/リサーチペーパーを完成することができる.
2．修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ，論文執筆，口頭発表について指導します．論文の骨子を 11 月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを，当座の目標とします．修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」と連携を図って進めていきます.
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は，修士 2 年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する.
2	研究計画の検討	履修者は，修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し，秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する.
3	論文執筆指導①	履修者は，修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し，指導教員に提出，議論する.
4	論文執筆指導②	履修者は，指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを，指導教員と引き続き議論・検討する.
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する.
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備．修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する.
7	研究発表準備③	履修者は，指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる.
8	研究発表準備④	履修者は，指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する.
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し，確認する．必要な場合は，発表会のリハーサルも行う.
10	研究発表会の振り返り	履修者は，中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し，指導教員と議論・確認する.
11	論文執筆指導③	履修者は，修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し，それをもとに指導教員と議論する.
12	論文執筆指導④	履修者は，指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し，最終稿の目処を立てる.
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに，提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する.
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う．履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
与えられた課題への取り組み，必要な関連文献の精読，学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます.
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください.

【テキスト（教科書）】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【参考書】
履修者のテーマにより，必要な文献をその都度紹介します.

【成績評価の方法と基準】
毎週の指導内容に関する取組み（30%），構想発表会での評価（35%），それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%），総合的に評価します．この成績評価の方法をもとに，本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
個々の担当教員より，授業，学習支援システム等を通じて，適宜情報共有されます.

【学生が準備すべき機器他】
PC および学内 Web，インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので，それに合わせた機器を用意してください.

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise your ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 001

博士論文演習ＩＡ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究分野に関わる文献サーベイを行うことで，博士論文のテーマ，関連する研究領域，必要な専門知識，コアとなる文献，研究方法を明確化します．それと同時に，博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます．

【到達目標】
１．博士論文のテーマ．研究方法，研究計画をおおむね明確にする．
２．博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
研究分野の文献サーベイやその分析を通じて，博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます．指導教員や他の大学院生との議論を通して，より高度な分析力や批判的な考察力を修得し，研究者としての素養を磨いていきます．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文など今までの研究成果を再検討し，博士論文との関連や発展の方向性を検討する．
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ，確認する．
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを引き続き，修得する．
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルの修得を，更に進める．
6 回	文献サーベイ④	必要があれば，他の研究分野の文献なども利用しながら，博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
7 回	文献サーベイ⑤	必要があれば，他の研究分野の文献なども利用しながら，博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを，引き続き修得する．
8 回	文献サーベイ⑥	必要があれば，他の研究分野の文献なども利用しながら，博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを，更に高次のレベルで修得するよう努める．
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき，投稿論文の準備を進める．
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき，投稿論文の準備を引き続き進める．
11 回	研究報告③	指導教員の指導の下で，修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を進める．
12 回	研究報告④	指導教員の指導の下で，修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を，引き続き進める．
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して，研究計画を検討する．
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して，研究計画を引き続き検討する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどして，自らが積極的に対応していくことが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 002

博士論文演習ＩＢ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究分野に関わる文献サーベイを通して，博士論文のテーマ，関連する研究領域，必要な専門知識，コアとなる文献，研究方法を明確化します．それと同時に，博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
１．博士論文のテーマ，研究方法，研究計画を明確にする．
２．学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う．
３．博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
研究分野の文献サーベイやその分析を通じて，博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます．指導教員や他の大学院生との議論を通して，より高度な分析力や批判的な考察力を修得し，研究者としての素養を磨いていきます．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し，必要に応じて研究計画を見直す．
2 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
3 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
4 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う．
8 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
9 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
10 回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
11 回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
12 回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
13 回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
14 回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年次に向けた春季休暇中の計画を立てる．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどして，自らが積極的に対応していくことが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 003

博士論文演習ⅡＡ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究計画に沿って必要な調査（文献，一次資料収集，アンケート，フィールドワーク等）を実施します．調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本目の投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
1．博士論文に必要な調査を進めることができる．
2．博士論文に関係する 2 本目の投稿論文の執筆を開始できる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
定期的に履修者が調査の進捗を報告し，それをもとに議論を行い，調査の進め方，分析の方法，追加的に必要な専門知識，論文の方向性，追加調査の必要性等について，指導教員が助言を行います．
また，履修者の報告に対して，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行うこともあります．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返り	1 年次及び 2-3 月の研究成果を報告し，春学期の研究計画を議論する．
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
5 回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
6 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
7 回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
8 回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
9 回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
10 回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
11 回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
12 回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
13 回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して，春学期の研究成果をまとめる．
14 回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り，秋学期の研究計画を検討し，夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に注力します．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどしながら，自ら対応することが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 004

博士論文演習ⅡＢ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究計画に沿って必要な調査（文献，一次資料収集，アンケート，フィールドワーク等）を実施します．調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本目の投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
1．博士論文の一部にあたる 2 本目の学術論文を投稿できる．
2．学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
定期的に履修者が調査の進捗を報告し，それをもとに議論を行い，調査の進め方，分析の方法，追加的に必要な専門知識，論文の方向性，追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います．学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し，その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて，研究者としての素養を磨いていきます．
また，履修者の報告に関しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し，必要に応じて研究計画を見直す．
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う．
8 回	調査報告④	研究計画に従って文献，一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
9 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献，一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
10 回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
11 回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
12 回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
13 回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
14 回	まとめ	2 年間の研究成果のまとめを行うとともに，博士論文の構成や目次を検討し，不足する調査内容を明確にする．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．特に，博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に注力します．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどしながら，自ら対応することが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本です．

【Outline (in English)】
授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 005

博士論文演習ⅢＡ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます．

【到達目標】
1．博士論文の要旨を完成させる．
2．博士論文の予備論文（草稿）を完成させる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し，議論していきます．必要に応じて追加的な文献サーベイを行い，追加調査を実施します．
また，履修者の報告に対して，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行うこともあります．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	執筆・調査計画の立案	2-3 月の研究成果の報告を行うとともに，追加調査が必要な項目の洗い出し，博士論文の執筆計画を立案する．
2 回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．更に，必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い，その内容を指導教員に報告し，議論する．
3 回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．更に，必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い，その内容を指導教員に報告し，議論する．
4 回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．更に，必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い，その内容を指導教員に報告し，議論する．
5 回	予備論文（草稿）への指導①	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．この頃までに予備論文（草稿）を完成させる．
6 回	予備論文（草稿）への指導②	完成した予備論文（草稿）について，指導教員と議論・検討を行う．
7 回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し，追加調査や文献サーベイを検討する．
8 回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ，追加調査や文献サーベイを行い，その成果を報告する．
9 回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ，追加調査や文献サーベイを行い，その成果を報告する．
10 回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ，追加調査や文献サーベイを行い，その成果を報告する．
11 回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ，博士論文全体の構成と流れを，指導教員と議論・検討する．
12 回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ，博士論文全体の構成と流れを，指導教員と議論・検討する．
13 回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して，博士論文の全体の構成を固める．
14 回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ，博士論文全体の構成と内容を見直し，本格的な執筆を行なう．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます．特に，博士課程 3 年目は博士論文執筆に注力します．補強したい専門知識に関しては，指導教員の助言にしたがって自ら対応，補強していくことが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本です．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 006

博士論文演習ⅢＢ（代表シラバス）

浅川　希洋志、石森　大知

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます．

【到達目標】
1．博士論文を完成することができる．
2．博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
博士論文を完成させ，その内容と意義を公開審査会の場で発表します．また，審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います．
履修者の報告に対して，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行うこともあります．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて，最終的な指導を指導教員より受ける．
2 回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より，提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける．
3 回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より，完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける．
4 回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より，完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける．
5 回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う．
6 回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う．
7 回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う．
8 回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より，公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける．
9 回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より，公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける．
10 回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う．
11 回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う．
12 回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて，必要であれば学位請求論文を修正する．
13 回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて，必要であれば学位請求論文を修正する．また，出版に向けた論文の修正を行う．
14 回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて，必要であれば学位請求論文を修正する．また，出版に向けた論文の修正を行う．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます．特に，博士課程 3 年目は博士論文執筆に注力します．補強したい専門知識に関しては，指導教員の助言にしたがって自ら対応，補強していくことが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本です．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 003

博士論文演習ⅡA

森村　修

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究計画に沿って必要な調査（文献，一次資料収集，アンケート，フィールドワーク等）を実施します．調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本目の投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
1．博士論文に必要な調査を進めることができる．
2．博士論文に関係する 2 本目の投稿論文の執筆を開始できる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
定期的に履修者が調査の進捗を報告し，それをもとに議論を行い，調査の進め方，分析の方法，追加的に必要な専門知識，論文の方向性，追加調査の必要性等について，指導教員が助言を行います．
また，履修者の報告に対して，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行うこともあります．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返り	1 年次及び 2-3 月の研究成果を報告し，春学期の研究計画を議論する．
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
5 回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
6 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
7 回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
8 回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
9 回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
10 回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
11 回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
12 回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
13 回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して，春学期の研究成果をまとめる．
14 回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り，秋学期の研究計画を検討し，夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に注力します．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどしながら，自ら対応することが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 004

博士論文演習ⅡB

森村　修

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究計画に沿って必要な調査（文献，一次資料収集，アンケート，フィールドワーク等）を実施します．調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本目の投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
1．博士論文の一部にあたる 2 本目の学術論文を投稿できる．
2．学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
定期的に履修者が調査の進捗を報告し，それをもとに議論を行い，調査の進め方，分析の方法，追加的に必要な専門知識，論文の方向性，追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います．学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し，その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて，研究者としての素養を磨いていきます．
また，履修者の報告に関しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し，必要に応じて研究計画を見直す．
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う．
8 回	調査報告④	研究計画に従って文献，一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
9 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献，一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
10 回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
11 回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
12 回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
13 回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
14 回	まとめ	2 年間の研究成果のまとめを行うとともに，博士論文の構成や目次を検討し，不足する調査内容を明確にする．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．特に，博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に注力します．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどしながら，自ら対応することが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本です．

【Outline (in English)】
授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 003

博士論文演習ⅡA

佐藤　千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究計画に沿って必要な調査（文献，一次資料収集，アンケート，フィールドワーク等）を実施します．調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本目の投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
1．博士論文に必要な調査を進めることができる．
2．博士論文に関係する 2 本目の投稿論文の執筆を開始できる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
定期的に履修者が調査の進捗を報告し，それをもとに議論を行い，調査の進め方，分析の方法，追加的に必要な専門知識，論文の方向性，追加調査の必要性等について，指導教員が助言を行います．
また，履修者の報告に対して，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行うこともあります．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返り	1 年次及び 2-3 月の研究成果を報告し，春学期の研究計画を議論する．
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
5 回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
6 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
7 回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
8 回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
9 回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
10 回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
11 回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
12 回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
13 回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して，春学期の研究成果をまとめる．
14 回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り，秋学期の研究計画を検討し，夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．特に、博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に注力します．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどしながら，自ら対応することが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 004

博士論文演習ⅡB

佐藤　千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究計画に沿って必要な調査（文献，一次資料収集，アンケート，フィールドワーク等）を実施します．調査結果をふまえて研究計画の修正及び 2 本目の投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
1．博士論文の一部にあたる 2 本目の学術論文を投稿できる．
2．学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
定期的に履修者が調査の進捗を報告し，それをもとに議論を行い，調査の進め方，分析の方法，追加的に必要な専門知識，論文の方向性，追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います．学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し，その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて，研究者としての素養を磨いていきます．
また，履修者の報告に関しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し，必要に応じて研究計画を見直す．
2 回	調査報告①	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
3 回	調査報告②	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
4 回	調査報告③	研究計画に従って文献，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う．
8 回	調査報告④	研究計画に従って文献，一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
9 回	調査報告⑤	研究計画に従って文献，一次資料，アンケート，フィールドワーク等の調査を行い，結果を報告する．
10 回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
11 回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
12 回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
13 回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
14 回	まとめ	2 年間の研究成果のまとめを行うとともに，博士論文の構成や目次を検討し，不足する調査内容を明確にする．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．特に，博士課程 2 年目は博士論文執筆のための調査に注力します．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどしながら，自ら対応することが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本です．

【Outline (in English)】
授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 005

博士論文演習ⅢA

髙柳　俊男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます．

【到達目標】
1．博士論文の要旨を完成させる．
2．博士論文の予備論文（草稿）を完成させる．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し，議論していきます．必要に応じて追加的な文献サーベイを行い，追加調査を実施します．
また，履修者の報告に対して，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行うこともあります．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1 回	執筆・調査計画の立案	2-3 月の研究成果の報告を行うとともに，追加調査が必要な項目の洗い出し，博士論文の執筆計画を立案する．
2 回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．更に，必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い，その内容を指導教員に報告し，議論する．
3 回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．更に，必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い，その内容を指導教員に報告し，議論する．
4 回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．更に，必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い，その内容を指導教員に報告し，議論する．
5 回	予備論文（草稿）への指導①	博士論文の一部を執筆し，それをもとに指導教員の指導を受ける．この頃までに予備論文（草稿）を完成させる．
6 回	予備論文（草稿）への指導②	完成した予備論文（草稿）について，指導教員と議論・検討を行う．
7 回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し，追加調査や文献サーベイを検討する．
8 回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ，追加調査や文献サーベイを行い，その成果を報告する．
9 回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ，追加調査や文献サーベイを行い，その成果を報告する．
10 回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ，追加調査や文献サーベイを行い，その成果を報告する．
11 回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ，博士論文全体の構成と流れを，指導教員と議論・検討する．
12 回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ，博士論文全体の構成と流れを，指導教員と議論・検討する．
13 回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して，博士論文の全体の構成を固める．
14 回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ，博士論文全体の構成と内容を見直し，本格的な執筆を行なう．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます．特に，博士課程 3 年目は博士論文執筆に注力します．補強したい専門知識に関しては，指導教員の助言にしたがって自ら対応，補強していくことが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本です．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 006

博士論文演習ⅢB

髙栁　俊男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます.

【到達目標】
1．博士論文を完成することができる.
2．博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
博士論文を完成させ，その内容と意義を公開審査会の場で発表します．また，審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います.
履修者の報告に対して，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行うこともあります.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1 回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて，最終的な指導を指導教員より受ける.
2 回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より，提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける.
3 回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より，完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける.
4 回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より，完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける.
5 回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う.
6 回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う.
7 回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う.
8 回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より，公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける.
9 回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より，公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける.
10 回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う.
11 回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う.
12 回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて，必要であれば学位請求論文を修正する.
13 回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて，必要であれば学位請求論文を修正する．また，出版に向けた論文の修正を行う.
14 回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて，必要であれば学位請求論文を修正する．また，出版に向けた論文の修正を行う.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます．特に，博士課程 3 年目は博士論文執筆に注力します．補強したい専門知識に関しては，指導教員の助言にしたがって自ら対応，補強していくことが重要です.
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください.

【テキスト（教科書）】
特になし.

【参考書】
特になし.

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します.
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします.

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます.

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本です.

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 101

博士ワークショップＩＡ

浅川　希洋志、大野　ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに，自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます．

【到達目標】
１．研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から，他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる．
２．他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる．
３．博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書である論文プロポーザルを書き上げ，構想発表会で発表する．論文プロポーザルは，
（1）研究テーマ
（2）研究の目的
（3）研究の方法
（4）研究計画
（5）期待される成果
（6）文献リスト等
が含まれていることをその要件とする．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し，その結果をレポートにまとめます．また，構想発表会において論文プロポーザルを発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを提出します．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 6 回	研究発表とコメント①	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 7 回	研究発表とコメント②	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 8 回	研究発表とコメント③	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 9 回	研究発表とコメント④	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 10 回	研究発表とコメント⑤	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 11 回	研究発表とコメント⑥	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 12 回	研究発表とコメント⑦	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 13 回	研究発表とコメント⑧	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 14 回	研究発表とコメント⑨	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「国際文化共同研究 A」の履修者の発表に対するコメントは，授業内に行うと同時にレポートとしても提出します．さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します．また，自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これらはあくまでも標準である，とご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
①平常点（コメント・シート）： 20 点
・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し，コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する．加えて，構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ，提出する．
②論文プロポーザル： 80 点
・論文プロポーザルの内容： 40 点　・論文プロポーザルについての発表： 40 点
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【その他の重要事項】
・「国際文化共同研究 A」のうち，いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは，あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること．
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長，専攻副主任）．

【担当教員の専門分野等】
この科目は研究科執行部が担当します．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
Three objectives:
1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:
(1) research theme
(2) research goals
(3) research methods
(4) research plan
(5) possible outcome
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
- Comment sheets submitted: 20%
- Thesis proposal: 80% (its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)
*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 102

博士ワークショップＩＢ

浅川　希洋志、大野　ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに，自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます．

【到達目標】
１．研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から，他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる．
２．他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる．
３．博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書である論文プロポーザルを書き上げ，中間発表会で発表する．論文プロポーザルは，
（1）研究テーマ
（2）研究の目的
（3）研究の方法
（4）研究計画
（5）期待される成果
（6）文献リスト等
が含まれていることをその要件とする．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し，その結果をレポートにまとめます．また，中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを提出します．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 6 回	研究発表とコメント①	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 7 回	研究発表とコメント②	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 8 回	研究発表とコメント③	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 9 回	研究発表とコメント④	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 10 回	研究発表とコメント⑤	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 11 回	研究発表とコメント⑥	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 12 回	研究発表とコメント⑦	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 13 回	研究発表とコメント⑧	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 14 回	研究発表とコメント⑨	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「国際文化共同研究 B」の履修者の発表に対するコメントは，授業内に行うと同時にレポートとしても提出します．さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します．また，自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これらはあくまでも標準である，とご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
①平常点（コメント・シート）： 20 点
・「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも 5 回参加し，コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する．加えて，中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ，提出する．
②論文プロポーザル： 80 点
・論文プロポーザルの内容： 40 点 ・論文プロポーザルについての発表： 40 点
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【その他の重要事項】
・「国際文化共同研究 B」のうち，いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは，あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること．
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長，専攻副主任）．

【担当教員の専門分野等】
この科目は研究科執行部が担当します．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
Three objectives:
1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:
(1) research theme
(2) research goals
(3) research methods
(4) research plan
(5) possible outcome
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
- Comment sheets submitted: 20%
- Thesis proposal: 80% (its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)
*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 103

博士ワークショップⅡA

浅川　希洋志、大野　ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに，自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます．

【到達目標】
1．研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から，他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる．
2．他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる，
3．博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる．
先行研究分析報告書は，内外の主要な先行研究の分析を行ない，それをふまえた上で，自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し，その結果をレポートにまとめます．また，構想発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを提出します．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 6 回	研究発表とコメント①	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 7 回	研究発表とコメント②	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 8 回	研究発表とコメント③	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 9 回	研究発表とコメント④	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 10 回	研究発表とコメント⑤	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 11 回	研究発表とコメント⑥	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 12 回	研究発表とコメント⑦	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 13 回	研究発表とコメント⑧	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 14 回	研究発表とコメント⑨	7 月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「国際文化共同研究 A」の履修者の発表に対するコメントは，授業内に行うと同時にレポートとしても提出します．さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します．また，自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これらはあくまでも標準である，とご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
①平常点（コメント・シート）：20 点
・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し，コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する．加えて，構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ，提出する．
②先行研究分析報告：80 点
・先行研究分析報告の内容：40 点・先行研究分析報告についての発表：40 点
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【その他の重要事項】
・「国際文化共同研究 A」のうち，いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは，あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること．
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長，専攻副主任）．

【担当教員の専門分野等】
この科目は研究科執行部が担当します．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
Three objectives:
1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the prior research analysis to show your progress and originality.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
- Comment sheets submitted: 20%
- Prior research analysis: 80% (its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)
*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 104

博士ワークショップⅡB

浅川　希洋志、大野　ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに，自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます．

【到達目標】
1．研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から，他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる．
2．他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる，
3．博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる．
先行研究分析報告書は，内外の主要な先行研究の分析を行ない，それをふまえた上で，自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し，その結果をレポートにまとめます．また，中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを提出します．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 6 回	研究発表とコメント①	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 7 回	研究発表とコメント②	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 8 回	研究発表とコメント③	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 9 回	研究発表とコメント④	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 10 回	研究発表とコメント⑤	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 11 回	研究発表とコメント⑥	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 12 回	研究発表とコメント⑦	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 13 回	研究発表とコメント⑧	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 14 回	研究発表とコメント⑨	11 月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「国際文化共同研究 B」の履修者の発表に対するコメントは，授業内に行うと同時にレポートとしても提出します．さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します．また，自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これらはあくまでも標準である，とご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
①平常点（コメント・シート）：20 点
・「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも 5 回参加し，コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する．加えて，中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ，提出する．
②先行研究分析報告：80 点
・先行研究分析報告の内容：40 点・先行研究分析報告についての発表：40 点
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【その他の重要事項】
・「国際文化共同研究 B」のうち，いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは，あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること．
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長，専攻副主任）．

【担当教員の専門分野等】
この科目は研究科執行部が担当します．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
Three objectives:
1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the prior research analysis to show your progress and originality.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
- Comment sheets submitted: 20%
- Prior research analysis: 80% (its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)
*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 105

博士ワークショップⅢ A

浅川　希洋志、大野　ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに，自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます．

【到達目標】
1．研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から，他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる．
2．他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる，
3．博士論文を構成する章を書き，論文として学術雑誌等に投稿する．構想発表会においては，完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え，博士論文の構成（章立て）を示し，博士論文の全体像を説明する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 A」の授業に討論者として参加し，その結果をレポートにまとめます．また，構想発表会においてこれまでの研究成果や博士論文の構成（章立て）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを提出します．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 A」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 6 回	研究発表とコメント①	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 7 回	研究発表とコメント②	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 8 回	研究発表とコメント③	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 9 回	研究発表とコメント④	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 10 回	研究発表とコメント⑤	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 11 回	研究発表とコメント⑥	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 12 回	研究発表とコメント⑦	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 13 回	研究発表とコメント⑧	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 14 回	研究発表とコメント⑨	7 月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「国際文化共同研究 A」の履修者の発表に対するコメントは，授業内に行うと同時にレポートとしても提出します．さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します．また，自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これらはあくまでも標準である，とご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
①平常点（コメント・シート）：20 点
・「国際文化共同研究 A」に討議者として少なくとも 5 回参加し，コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する．加えて，構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ，提出する．
②博士論文を構成する章：80 点
・博士論文を構成する章の内容：40 点・博士論文を構成する章についての発表：40 点
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【その他の重要事項】
・「国際文化共同研究 A」のうち，いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは，あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること．
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長，専攻副主任）．

【担当教員の専門分野等】
この科目は研究科執行部が担当します．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
Three objectives:
1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In Thesis Planning Presentations (TPP), you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as TPP. According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
- Comment sheets submitted: 20%
- Written-up chapter(s): 80% (its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)
*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 106

博士ワークショップⅢ B

浅川　希洋志、大野　ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに，自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます．

【到達目標】
1．研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から，他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる．
2．他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる，
3．博士論文を構成する章を書き，論文として学術雑誌等に投稿する．中間発表会においては，完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え，博士論文の構成（章立て）を示し，博士論文の全体像を説明する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
修士課程 2 年次の必修科目である「国際文化共同研究 B」の授業に討論者として参加し，その結果をレポートにまとめます．また，中間発表会において博士論文の要旨を発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを提出します．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	討論者①	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 2 回	討論者②	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 3 回	討論者③	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 4 回	討論者④	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 5 回	討論者⑤	「国際文化共同研究 B」の討論者として修士課程 2 年生の発表に対するコメントを行う．
第 6 回	研究発表とコメント①	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 7 回	研究発表とコメント②	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 8 回	研究発表とコメント③	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 9 回	研究発表とコメント④	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 10 回	研究発表とコメント⑤	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 11 回	研究発表とコメント⑥	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 12 回	研究発表とコメント⑦	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 13 回	研究発表とコメント⑧	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．
第 14 回	研究発表とコメント⑨	11 月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに，他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
「国際文化共同研究 B」の履修者の発表に対するコメントは，授業内に行うと同時にレポートとしても提出します．さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します．また，自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，科目の性格上，これらはあくまでも標準である，とご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
①平常点（コメント・シート）：20 点
・「国際文化共同研究 B」に討議者として少なくとも 5 回参加し，コメント・シート（毎回 A4 のシート 1 枚）を提出する．加えて，中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ，提出する．
②博士論文を構成する章：80 点
・博士論文を構成する章の内容：40 点・博士論文を構成する章についての発表：40 点
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
N/A

【その他の重要事項】
・「国際文化共同研究 B」のうち，いつの授業（5 回）に討論者として参加するかは，あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること．
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長，専攻副主任）．

【担当教員の専門分野等】
この科目は研究科執行部が担当します．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.
【到達目標（Learning Objectives）】
Three objectives:
1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In Thesis Interim Presentations (TIP), you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as TIP. According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
- Comment sheets submitted: 20%
- Written-up chapter(s): 80% (its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)
*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 001

博士論文演習Ⅰ A

佐藤　千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究分野に関わる文献サーベイを行うことで，博士論文のテーマ，関連する研究領域，必要な専門知識，コアとなる文献，研究方法を明確化します．それと同時に，博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます．

【到達目標】
1．博士論文のテーマ．研究方法，研究計画をおおむね明確にする．
2．博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
研究分野の文献サーベイやその分析を通じて，博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます．指導教員や他の大学院生との議論を通して，より高度な分析力や批判的な考察力を修得し，研究者としての素養を磨いていきます．
履修者の発表などに対しては，授業，学習支援システム，個々のメール等を通じて，適宜フィードバックを行います．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	これまでの研究の振り返り	修士論文など今までの研究成果を再検討し，博士論文との関連や発展の方向性を検討する．
2 回	研究テーマの確認	第 1 回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ，確認する．
3 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
4 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを引き続き，修得する．
5 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルの修得を，更に進める．
6 回	文献サーベイ④	必要があれば，他の研究分野の文献なども利用しながら，博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
7 回	文献サーベイ⑤	必要があれば，他の研究分野の文献なども利用しながら，博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを，引き続き修得する．
8 回	文献サーベイ⑥	必要があれば，他の研究分野の文献なども利用しながら，博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを，更に高次のレベルで修得するよう努める．
9 回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき，投稿論文の準備を進める．
10 回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき，投稿論文の準備を引き続き進める．
11 回	研究報告③	指導教員の指導の下で，修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を進める．
12 回	研究報告④	指導教員の指導の下で，修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を，引き続き進める．
13 回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して，研究計画を検討する．
14 回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して，研究計画を引き続き検討する．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどして，自らが積極的に対応していくことが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 － 002

博士論文演習ＩＢ

佐藤　千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
研究分野に関わる文献サーベイを通して，博士論文のテーマ，関連する研究領域，必要な専門知識，コアとなる文献，研究方法を明確化します．それと同時に，博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます．

【到達目標】
１．博士論文のテーマ，研究方法，研究計画を明確にする．
２．学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う．
３．博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する．

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
研究分野の文献サーベイやその分析を通じて，博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます．指導教員や他の大学院生との議論を通して，より高度な分析力や批判的な考察力を修得し，研究者としての素養を磨いていきます．

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し，必要に応じて研究計画を見直す．
2 回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
3 回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
4 回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
5 回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
6 回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する．
7 回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う．
8 回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
9 回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要となる高度な知識とスキルを修得する．
10 回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
11 回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
12 回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
13 回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し，指導教員と議論・検討する．
14 回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年次に向けた春季休暇中の計画を立てる．

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います．なお，専門知識を補強したい場合には，修士課程の講義科目等を履修するなどして，自らが積極的に対応していくことが重要です．
大学設置基準に基づくと，準備・復習時間は講義及び演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が標準となります．しかし，本科目は博士論文作成のためのものであり，それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください．

【テキスト（教科書）】
特になし．

【参考書】
特になし．

【成績評価の方法と基準】
日頃の研究姿勢（50 %），研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50 %）を勘案して，総合的に評価します．
本授業の到達目標の 60 %以上を達成した者を合格とします．

【学生の意見等からの気づき】
担当の教員ごとの気づきに関しては，授業等で適宜フィードバックされます．

【その他の重要事項】
授業形態については，担当教員より事前に周知されますが，2023 年度の授業は対面形態が基本となります．

【Outline (in English)】
【授業の概要（Course Outline）】
This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.
【到達目標（Learning Objectives）】
They are twofold:
1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.
【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.
【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】
Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

法政大学
HOSEI University